64-134

加藤咄堂著

修養論

全

第壹版

東京 東亞堂書房發兌

東亞堂書房
創業第五週
年紀念出版

は僅に百歳に滿たずして逝く。生前既に天地位し、死後尚ほ萬物育す。天地我あるが爲めに一毫を加へず。萬物我を缺くが爲に一糸を減ぜず。我何の故にか生き、何の故にか存す。己を知るの第一歩は先づ此の生存の意義を明にせざるべからず。

言ふ勿れ、我が身は微小にして我が命や短しと。此の微小の身は直に是れ宇宙の一物。此の短き生命も亦悠久なる時間の一部分にあらずや。一刹那も亦永劫を繋ぐの連鎖たり。況んや五十年の生命をや。一微塵も亦全宇宙の影を宿す。況んや五尺の人身をや。我が存在は全宇宙の存在なり。全宇宙の存存は我が存在なり。一擧手直に

宇宙の活動に影響し。一投足直に天地の妙用と相渉る。

微小なりと嘲ちしは現相の迷見にして短しと嘆きしば生滅の妄執なり。萬里雲なし萬里の天、千江水あり千江の月、現相の裏に本體あり、生滅の奥に不滅あり、不滅の海上生滅の波を揚げ、本體の明月現相の水に映ず。吾等は我が存在の意義を明にすると共に我が迷執多き妄心の秘奥に不斷の靈光宿りて宇宙の本體と脈絡貫通するものあるを看取せざるべからず。佛家の眞如といひ佛性といひ本地の風光といひ本來の面目といひ、儒家の良知良能といひ本然の性といひ基督教家の神の囁語といひ、倫理學者の先天内容の聲とし眞我といふものの之れにあらざ

るなからんや。

萬象悉く歸一する所に宇宙の本體あり、雜慮妄想、紛々擾々たる吾等の心にも亦歸一する所あり。其の歸一する所に靈覺の明性存す。吾等は此の明性を發揮して此に心裏の統一を計り、此の統一の觀念を提げて我が全生活を統一し、事に處して誤らず、境に應じて動ぜざるの心膽を錬養するを要す。

吾等の目は天を望むべきも、吾等の足は地を離れず、心を理想の一境に置て、而かも身は現實の羈絆を離れず。離れずと雖も心境別に天空快濶の風趣あり。此の風趣あるが故に世事葛藤裡に沒在して毫も累せらるゝことなく、

曾ては外界の爲めに動かされたる我が心、今は却て外界を左右して我が心の如くならしむ、これ此の時、乾坤唯だ一人、我は則ち萬象の主となり、又他に瞞せられず。明眼達識、事を未前に察し、變を臨機に施す。政治、文藝、商業、農工の道、行くとして不可あることなし。

我、唯だ一路を行く坦々として嶮なく岨なし。我、唯だ一を守る、此の一能く萬事に施して應化無礙、受用不盡なり。我が踏む所をして二路あらしむる勿れ。泰山我を壓すと雖も、我之をして二面あらしむる勿れ。滄海我を漂すと雖も、我之れを踏んで我を守て棄てず。四海我れを避けざる底の主一、これ吾等が認得せざるべからざるの

緊要事たり。

我、之れを想ふて得ず。念々工夫を忘れず、刻々修養を棄てざらんことを期し、或は靜坐冥想に實在の源底に觸れんことを欲し、或は讀書文藝に本地の風光を探らんとし、時に社交場裡に其の眞趣を見んとし、時に野人の聲に其の隻影を認めんとす。然かも疎懶の性、未だ之れを得ず、齢、既に不惑に達して懊惱未だ除かず、何の顔あつてか他に向て修養を說かん。唯だ僅に自己に資する所のものを取て又他に資せんとす。造詣、未だ深からず、書を讀んて誤多く、文辭、未だ熟せず、筆を執て、意通ぜざるもの少からず、嗚呼四十年來の修養、吾、尙ほ我

を知らず、自ら揣らず本書を稿して他の笑を買ふ。其の愚及ぶべからずと云ふ者ありとも、我將た何の辭を以てか之れに答へん、我夫れ我を知るものか、抑も亦知らざるものか。

己酉三月、細雨霏々たるの夕

咄堂居士

緒言五則

一修養は、行ふべき事にして論ずべきものにあらず。本書縷々數萬言、殆んど無用の施設に似たりと雖も、行くものは其の方を知らざるべからず。歩むものは其の道に通せざるべからず。方を誤まりて行く。行くこと多くして、誤ること多く、道に通せずして歩む。歩むこと遠くして、道を去ること亦遠し。本書は聊か其の行くべきの方を示し、歩むべきの道を指さんとして諸種の論議を試みたり、されど淺學、誤謬の言多く、不識、未通の事少からざるもの罪一に著者にあり。

一本書想を構へてより幾星霜を經、其の間諸方に講説する所、多く本書構想中の一部分たらざるはなく、今本書を稿するに當り、既に世に公にせられたるの言説少からず。重複する所のものは多く之れを省略したれど、尚ほ舊著を引用すること多し。これ一に予の取材廣からず造詣深からざるに因す、深く咎むることなくんば幸なり。

一想を構ふること久しと雖も、稿を起してより五閲月、塵務蝟集の中閑を偸むで机に向ひ、稿するに従ひて刻に付せしが故に、推敲精からず文辞亦蕪雑を免れず。讀者請ふ諒せよ。

一書中古聖先賢の語を引き又其の行實を擧ぐること多し。これ著者が瓦礫の如き文中に金玉の聲を藏し、修養の資料に供すること多からんを望みたるに歸す。古聖の一言先賢の一行、皆な之れ我が修養の箴たり、線心の料たり、讀者其の煩鎖を厭ふことなきを望む。

一第一篇を理論とし第二篇を方法としたれど理論の中に方法あり、方法の中に理論あり、讀者前者を以て後者を補ひ、後者を以て前者を補ひたまはんことを要す、第三篇は範とすべき四五の例を擧げたるのみにして其の第五章は全篇の補遺として線心の料を供したるのみ。其の事の斷片的なるは之れに因す。

己酉三月

著者識

修養論目次

卷首　修養の要義

第一編　修養の理論

第一章　緒論

一　修養の意義……一

新時代の新修養……修養の語義……動靜二面……身體と精神……動物としての人……心の三方面……人生の偏執……修養と各方面……修養の圖解……修養と教育……不斷の修養……教育とは何ぞ……

二　修養の目的……一三

人格の本質……自由獨立……品性の涵養……一般目的と部分目的……文明と人格……二個の大問題……意志の自由……

目次

第二章　性の善惡

一　孔孟の性善說……一九

東亞倫理の異彩……孔子の性理……人性の四品……子思の性論……子思の修養法……孟子……四端の說……眞智眞能……眞欲……放心……存夜氣の說……浩然の氣……性杞柳の論……性湍水の論……孟子と告子……仁内義外論性

二　荀子の性惡說……三一

性惡說……僞を習ふ……孟子を駁す……禮……刑名の學

三　性善惡混淆說……三六

淮南子……董仲舒……善の原質……揚雄の善惡混淆說……劉向の性無惡說……韓退之の三品說……性善情惡說……復性說……性情同一說

四　程朱理氣の說……四二

周濂溪……誠は聖の本……張橫渠……天地の性と氣質の性……程明道、程伊川……理氣の說……寂然……主一無適……仁……朱子……天地の性と大極……性と情……道心と人心……靜坐……夜氣存養……讀書窮理

五　陸王の心即理論……五二

陸象山……心即理……誠思之……王陽明……知行合一……四句教……良知致知

第三章　知見と德性

一　ソークラテース及びプラトーンの學說……五九

ソークラテース……汝自身を知れ……惡は不知……智即德德即福……プラトーン……イデア……エロース……太陽の譬喩……四德……理想國

二　アリストテレス及び其以後の學說……六四

人類の精神……能動理情と受動理性……意志の修練……中庸……ストア學派……不動心……理性……寂靜心……フイーロン……恍惚境……プローテイノス

第四章　罪惡の起源

一　罪惡と自由意志……七一

人性の思索……神と冤……ゾロアスター……猶太敎……サタン……原罪……基督……信、愛、望……當死罪、當釋罪……內心の正……アウアスデーヌスとペラギウス、アンセルムス……アベラルドウス……トマス、アクイヌス……ドウンス、スコートス

二　佛性と罪惡……八〇
宿業……四聖六凡……惑業苦……忽然念起……熏習……悉有佛性……性德
と修德……戒定慧……如來の智慧……本源清淨心……內熏と外熏……信仰……
……罪惡と信心……自力と他力
第五章　自由意志……九〇
一　宿命と自由意志……九〇
定業と自由……神の豫定……回々教の宿命說……易……十干十二支……袁了凡
……雲谷
二　自由意志と人格……九六
デカルトの意志自由說……スピノーザの意志必至說……ライプニッツの制限的自由說……
……カントの批判……實踐理性……無上大法……カントの意志自由說……人格と品位
……ヘッケルの意志不自由說……パウルセンの自由意志說……自由と必然……人格
的意識……精神と國家組織
三　性と自由意志……一〇五
性論の歸結……眞我……已むを得ざるの誠……靈性の際涯……個性の分解
第六章　個性の要素……一〇九
一　遺傳と個性……一〇九
自然の大法……心身の遺傳……人類精神の萌芽……發生の階段……本能とは何ぞ……
……本能の解……第一本能第二本能……人の地位……普遍遺傳と特殊遺傳……四
稟質……四稟質の特解……直接遺傳と間接遺傳……ダーウヰンとワイズマン
二　家庭の薰陶……一二〇
遺傳と家庭……家庭の影響……偉人と賢母……偉人と配偶者……謀殺と家庭……
……自殺と家庭……父母と犯罪……資產と犯罪
三　社會の感化……一二八
個人と社會……社會的遺傳……智識の素材……官語と文字……習慣……流行……
……輿論……政治法律……橫井小楠國情視察の網格……產業と氣風……宗教と氣風
……犯罪と社會……個人の意志と會社
四　風土の影響……一三五
地と人……東西兩洋の氣風と地理……文明と河流……愛鄉心……火山國……地
震と風氣……雪と氣風……偉人と山水……山國……平原國

目次

第七章　修養の可能

一　個性と修養……一四七

ショーペンハウエル……遺傳と變化……胎教……家庭教育……
學校教育……社會教育……知育……德育……美育……體育……プラトン

二　修養の理想……一五三

第一性……第二性……性の三別……教養……無學の幸福……修養の時代……人生の危機……修養の極致

第二編　修養の方法

第一章・理想と現實

一　修養の困難……一六一

宇宙に於ける人生……微小觀……無常觀……人口と食物……人生苦觀……不如意觀……理想と現實

二　現實の悲哀……一六六

存在の否定……青年の悲哀と中年の悲哀……生活難……糊口の途……時代遲れ……死の逼迫……缺陷の世界……圓滿の心

三　實在の風光……一七二

人生の二面……個別の理……變易の相……同一の理……一氣相通ず……下變の理……無窮無限……宇宙の個人……一部分……相關の理……宇宙に於ける覺悟……至公至平……言語不到の境……詩的感想

四　宇宙の大道……一八五

一元的傾向……機械論と目的論……超絶的目的論……內存的目的論……宇宙論……宇宙の齊整……宇宙の理想……道とは何ぞ……老子……ロゴス……菩提……平常心……是道……至誠

五　人生の本務……一九三

個人と社會……人と人との調和……人道の本義……仁……祖先の恩澤……人生譬喩……生存の意義……道を行ふ……勇の二種……三德……三卷

第二章　國民道德

目次

一 東西道德の比較……二〇一

社會狀態と道德……時代と道德……階級的……縱の道德……無階級的……橫の道德……義務本位と權利本位……家族本位と個人本位……家督相續と財產相續……同化力……儒敎……佛敎……西洋道德……同化の標準

二 國民道德の標準……二〇六

勅語圖解……天壤無窮……歷代の聖德……君民同祖……忠孝一致……國體の精華……人倫の要旨……孝道……兄弟……夫婦……朋友……恭儉……博愛……義勇奉公……一德……國民道德の長所

三 國民道德と大道……二一三

國家の使命……自然界の二面……弱肉强食……國際法……共同生活の實……地の公道……文明の惠澤……戰爭……軍人……武士道……武士の心得……天

第三章 處世論

一 道德の價值……二三二

倫理の二潮流……善惡の標準……動機論と結果論……心の不完全……神を標準とす……順理と背理……宇宙活動の三段……自ら知る……善惡の四階……道德と修養……本務の圖解

二 處世と道德……二四六

超越主義……社會的自殺……死道德……活道德……人と人以上との關係……仁義道德と利用厚生……目前の利と永久の利……屏風と商人……商人の道……道と利との調和

三 簡易生活……二五一

生計の獨立……淸貧と濁貧……勤と儉……ヒユーム……如足……貧に處するの心……家政の經驗……高尙の理想……簡易の生活……負債……衣食住と自省……簡易生活の福音……眞面目の生活……財を惜む

四 努力生活……二六一

人文發展の樞鈕……勤勞と人道……百丈……日々の別……時間の活用……時間の殿守……懈怠……水車の喩……シドニースミス……處世の兩面……徒步的精神……知足と向上……飛脚の逸話

五 趣味生活……二六九

罪惡生活……法律生活……社會の制裁に基く生活……道義的生活……道義的生活と趣味生活……義務と權利……感謝の生活……趣味生活と宗敎生活……同情……

德、禽獸に及ぶ……天地は趣味の顯現……宗教生活の四段……活宗教の活面目

第四章　修養法

一　身體の修養……二八〇
目的と手段……健康と生活……グラッドストン……病の十因……横死の九法……素問……管仲と孔子……素食法……導引法……溜水法……觀念法……吐納法……病前自ら防ぐ……一些字……十二少……一日の生は一日の利
二　靜坐と修養……二八八
靜坐の必要……讀書觀察と靜坐……知識の整理と靜坐……靜坐の趣味……意志の鍊鍛と靜坐……逆境の修養……靜坐の効……榮辱と達觀……懺悔と靜坐……倫理的價値……存想……身體の修養と靜坐……坐禪……坐禪の目的……悟境……靜的修養の極致……動中の工夫
三　讀書と修養……三〇一
讀書の分類……學習と讀書……學生と新聞雜誌……學識と常識……妄識……特別智識と普遍智識……見識……常識修養と新聞雜誌……常識の語義……品性修養と讀書……史傳……讀書の快樂……意志鍛鍊と讀書……書籍の選擇……讀破百卷

四　文藝と修養……三一一
觀察の三方面……人心の三方面と三種の態度……趣味と品格……肉感と趣味……音樂と繪畫……繪畫と文學……文藝の趣味……文藝と誠實……同情と文藝……人格と文藝……忘我と文藝……古武士の風格
五　自然と修養……三一九
自然の光景……自然を友にす……自然と倫理……自然の教訓……不言の教師……旅行の利益……交通と文明……人情の迂餘曲折と旅行……旅行と克己獨立
六　社交と修養……三二八
閫中の得力……社交の祕議……劍道と社交……至誠……人心收攬の祕訣……短を見ずして長を見よ……刀と小刀……大度量……心隨萬境轉……儀容……談話
七　修養の道程……三三六
實行の困難……修養の三道程……發心、決心、相續心……習慣養成に關するペインの注意……ピュポンの力行例……善美の習慣……山陽の逸行……禁酒の習慣……誠實の習慣……海舟、南洲を評す……小事を忽にせざる習慣……規律を守るの習慣……朝起きの圖表……時間の習慣……効過程……フランクリンの十三目……修身二十則……無碍自在の境

目次

第三編　修養の模範

第一章　聖賢の言行

一　釋迦の言行……三五一

釋尊の境遇……永世の苦……意志の強固……降魔の相……釋尊の金言……猿の人……人生の苦惱……譬喩二則……釋尊の入滅……佛敎

二　基督の言行……三六一

クリストの幼時……舊約の聖經とナザレの風光……愛の神……ヨハネ……誘惑……傳道……基督敎の根本……山上の垂訓……嬰兒の心……地上の天國……一視同仁……敎訓……救世主

三　孔子の言行……三七四

孔子の人格……幼時……大司寇……文に武……夾谷の會……陣蔡の厄……遊境の福音……晩年……修養の徑路……進學……道に志す……三德……忠恕……內省不疚……詩と樂……天命……脫俗

四　ソークラテースの言行……三八三

父母……軍中のソークラテース……對話法……汝自身を知れ……產婆術……ソークラテースの妻……クセノフォニース……ソ氏の門人……獄中のソークラテース……其の死……メモラビリア……友愛論……デルファイ神殿の標語

第二章　英雄と修養

一　諸葛孔明の人格……三九九

英雄の修養……不動明王……劉備……南陽の臥龍……三顧……魚と水……大器……遺孤を托す……出師表……後の出師……遺表……英雄、英雄を知る……謹愼の人

二　ワシシトンの人格……四〇九

家庭、幼時……細事の注意……アレガニーの山中幼兒を救ふ……ワシントンの勇氣……言行の規律……獨立の戰……高潔……人格

三　德川家康の人格……四二〇

德川氏……節儉……家康の遺訓……足袋箱……家康の寶……石川又四郎の話……忍の一字……啐啄……武家法度……文敎……登營上人の敎訓……治國の要

第三章　文豪の修養

一　蘇東坡の修養……四三五

山水と家庭……破釜の聲……文名一代を壓す……轗軻不遇……東坡……皓禪師
と東坡……悟境……讃佛偈……達觀

二　ゲーテの修養……四四五

新舊思潮……ゲーテの家庭……放逸の生活……智識的要求……聖書の耽讀……
煩悶……自殺觀……プイマルの新居……伊太利の旅行……シルレル……フアウスト

三　松尾芭蕉の修養……四五五

風雅……出家……草庵……古池眞傳……笈の小文……句意……行脚の吟味
終焉……昨の發句、今の辭世……嚴格……讀書と文友

第四章　哲人の修養

一　王陽明の性行……四六三

性格と學說……天下一等の事……兵を學ぶ……結婚を忘る……邊務八事……前
半生……虎穴に眠る……險夷胸中に滯らず……龍場に於ける修養……良知の一字……

山中の賊、心中の賊……啾々吟……三計の病

二　スピノーザの性行……四七二

猶太人……和蘭移住……幼時……胸裡の疑團……信仰の動搖……黃金前に在り
……白刃頭上に下る……放逐式……流離困頓……生活の簡易……篤學……
……怒る事なし……死後の盛

第五章　修養の教訓

一　偉人の片影……四八三

伊達政宗……加藤嘉明……柳澤淇園……伊藤仁齋……山鹿素行……水戸光圀……
……柳生宗矩……ドリユー……ウイリヤムピツト……アーノルド……チヤールス
ダーウイン……スコツト……フツス

二　金言と詩歌……四九六

金言の力……修養の課程……聖賢の模倣……詩……和歌……俳句……廻狂
寶訓……俚言

三　達人の至言……五〇八

圍碁の名手……細工人の心得……圓山應擧……敵打ち……堪能の人……藝……

修養論目次 終

目次

……名匠の苦心……名優逸話……致富苦心……家訓 一六

修養論

加藤咄堂著

第一編 修養の理論

第一章 緒論

一 修養の意義

新らしき時代には新らしき人物を要し、新らしき人物には新らしき修養を要す。古聖の說き先賢の言ふ所、其の精髓は傳へて以て今人を啓發するに足ると雖も、時、異にして用、自ら異り、境、同じからずして事も亦違はざるを得ず。德を修め氣を養ひ、淸風に襟懷を洗ひ、明月に肚裏を爽かにし、樹下石上、靜かに其の閑寂を樂みし古人の修養は、直に以て、今人を導くべからず。脫然

◉修養の意義

塵寰の外に立ち一世を下瞰して獨り自ら高うしたりし古人の氣宇は、よし欣慕に値するとも、其の世と沒交渉なるに至ては學むで以て今人の法とするに足らず。一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在つて其樂みを改めざるは生活問題の困難ならざる昔に於てこそ行はれたれ。生存競爭の激甚なる今日に於ては誰か此の陋巷の君子を願みむや。今を以て古を以て直に今を律すべからず。古を以て遽かに古を笑ふ能はざるが如く、又剛毅果斷、事に當て屈せざる武士的精神は今人の努めて學ぶべき所なるも、其の殺伐粗豪、身命を輕んずる土芥の如き氣風に至ては斷じて之を避けざるべからず。敬虔の念、燃ゆるが如く、熱烈の信、能く人を動かしたる聖者の芳蹟は今人の範とすべき所多きも、其の迷妄の熱情は之を蹈むに躊躇せざるべからず。要は當世に處して有用の材となり、新時代の新要求に應じて其の新手腕を試み得べき素質を養ふに在り。如何にして當世に處して有用の材となり、新時代の新要求に應じて新手腕を試むべき素質を養ひ得べきか。これ本論主要の問題なり。

修養の語義多端、之を用ふる人々一ならず、暫く其の普通の意を解せんか英語之をカルチユア (Culture) といひ耕作の義なりと、心田を耕耘して其の收穫を得るの義か、獨語之をビルヅング (Bildung) といひ作爲構造の義なりと、人物を作爲し品性を模造するの義と解すべきか。諸葛孔明に靜以て身を修め、儉以て德を養ふの語ありて此の二字を明かすに適す、修養の語本來の意は暫く此の如しとするも、新時代の新修養は又新意味を以て解せざるを得ず。吾人は僅かに靜以て身を修め、儉以て德を養ふのみを以て足れりとせず、進んで動以て世に處し、勤以て道を行はしめんとす。此の故に吾人の謂ふ所の修養には靜の外に動あり、儉の外に勤あり、殊に其の修養する所、人格全般に亙るが故に、唯だ其の目的とする所心田耕耘の一面に存せずして別に身體訓練の一面あり。蓋し精神と身體とは共に全圓の內外にして、內より見れば凹の如く、外より見れば凸の如しと雖も、そは觀る者の立脚を同うせざるにして、圓其の者の二あるにあらず、主觀的に之れを心と呼び、客觀的に之れを身と名く、身心もと二元にあらず、精神は身體に影響し、身體は精神に影響

す、顏色憔悴、形容枯槁なるものに壓世の悲調を聽くべく、生氣潑溂、身體強健なるものに不斷の奮鬪を見るべし。身に病あれば心沮み、心に憂あれば身も亦健かならず。此の二者終に離すべからずとせば、彼の古の徒らに身體を惡視して苦行禁欲、食を斷ち體を虐げ、以て精神の慰安を求めんとしたるが如き修養は何の功なき邪道たりしや明かなり。人の眼は高く天を望むべきも、其の足は地を離れざるが如く靈は進んで神に近づくべきも、肉は依然として獸たるを免れず、獸たりとて何をか慨かん、修養の第一步は寧ろ善き獸たるに存せざるか。

動物としての人

何をか善き獸といふ。自然の壓迫に遇ふも毫も屈することなく、能く其の境遇に順應して自己の生存を保全し、子孫を蕃殖して天然の命を終るにあり。聞く動物の壽命は其の發育年限に四倍若くは五倍すと、馬の發育年限は五年にして生存年限は二十年乃至二十五年、猫の發育年限は十八ヶ月なるが故に其の生存年限は九年乃至十年なり、此の原則をして誤なからしめば二十年若くは二十五年を以て發育年限とする人類は百年乃至百二十五年の壽を保つに

あらざれば善き獸たるをだに得ざるにあらずや。人生五十、七十は古來稀なりの語の戰亂多き古代は知らず、太平無事、人は天然の壽を保ち得べき今日に存するは實に人類の屈辱たり。體力の養成未だ成らず、何を以てか善き獸たるを得ん。況んや剛健なる氣象は剛健なる身體に宿るは身心不二の原則より來る當然の歸結なるをや。吾人は此の身體を看過して修養を談ずることの不可能なるを信ぜざるを得ず。

然れども、人は獸と異らざるべからず、人の人たる所以は獸と離れざる肉にあらずして神にあり、修養の第一步は之れを獸と離れざる身體に置くも、修養の根底は之れを神に向ふべき精神に置かれざるべからず。身を修むるの本、此に立ち、德を養ふの源、此に發す。世にも奇しきは心なり、靈妙にして捕捉し易からず、暫く其の趣向する所を見て之を三方面に分つを以て通則とす、曰く智、曰く情、曰く意、智の求むる所は眞にして趣く所は理にあり、情の求むる所は美にして趣く所は愛にあり、意の求むる所は善にして趣く所は行にあり、此三者其の趣向する所を異にするも、其の本や一、

◎緒論

◎修養の意義

智の趣く所には情意の行く所、智も亦之れに隨ふ、此の三者相爭ふの時、心内煩悶絶えず、思慮紛雜を免れざるも、此の三者渾然融合、各〻其の趣く所に趣き、行く所に行き、しかも相侵さゝるに至て初めて心内安靜、思慮明晰なるを得て修養の功成るべきも、不幸にして人皆な偏する所あり、或る者は智に偏して情を解せず、唯だ實用の重んずべきを知て趣味の愛すべきを知らず。或る者は理智に盲にして單へに情の走するに從ひ、明快の斷なく、沈重の思慮を欠き、或る者は義理と人情とを思はずして一意、自己の欲する所を行はんとし頑迷に傾くを顧みず、此の三の者皆な不是れなり、其の偏せるを矯めて、其の枉れるを直うし、理智に明にして人情に厚く、しかも正を踏んで懼るゝなく、事に當て撓まざるの人たらしむるの要。一に修養の力にあり。

人性の偏執

吾人の所謂修養は人格の全面に亘るが故に、他の修養を談ずるものが唯だ情意の一面を說て理智を語らず、精神の方面にのみ論議して身體を默過するの嫌に倣はず、且つ古人の說く所の靜、以て身を修め、儉、以て德を養ふのみ

修養と各方面

を以て足れりとせず、進んで動、以て世に處し、動、以て道を行ふを目的とするが故に、其の修養にも動あり、靜あり、靜なるものは個人的にして處世を要とし、動なるものは社會的にして處世を要とす。

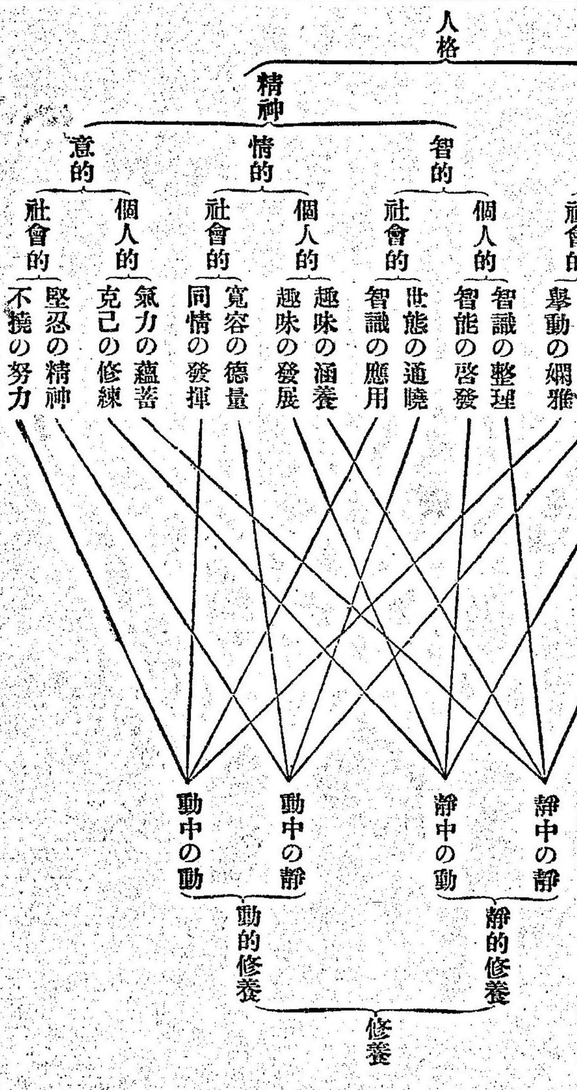
修養
- 靜的修養
  - 修身 — 個人的
  - 養德 — 社會的
- 動的修養
  - 處世 — 社會的
  - 行道 — 社會的

大要此の如しと雖も、更らに仔細に其の要とする所を分類すれば身體の修養に於て衞生を重んじ健康を保持するは個人的方面の靜的修養にして、勉勵力行、刻苦業を奬むは其の動的修養たり。禮貌を正うし儀容を整ふるは社會的方面の靜的修養にして、言語を明快にし擧動を嫻雅にするは其の動的修養たり、智の修養に於ても沈思熟考して自己の知り得たる所を整理するは個人的方面の靜的修養にして、智能を啓發するは其の動的修養たり、世態に通曉し、人情を知悉するは社會的方面の靜的修養にして、其の知り得たる所を應

◎緒論

◎修養の意義

用して社會的職務に服するは動的修養たり、情の修養に於ても亦此の二方面あり、自己の趣味を墮落せしめず、武士は食はねど高揚枝、貧に處しても改むるなきは個人的なる靜的修養にして、其の向上を計りて文藝に心を寄せ宗教に信を繫ぐは動的修養たり、社會的に發して寬容の德となるは靜的にして、出でゝ慈悲となり同情となるは動的修養たり。意の修養に於ては氣力の溫蓄となり、克己の修練となり、堅忍の精神となり、不撓の努力となり、身心相依り、動靜相待つて人格を完成す、暫く其の大要を圖示せんか。



◎緒論

◎修養の意義

こは何人も想ひ及ぶべき修養の各方面に就て分類せるものにして其の詳細に至ては更に愼重の考量を要するものありと雖も、暫く吾人が論議の範圍を此に定め、以て新時代の新要求に應じて新天地に新運動を試みるの素質を養ふの方法に及ばんとす。

教育とは何ぞ

吾人が論議の範圍、此くの如きが故に、修養の語、又廣意に於ける敎育と解するも差支なし。廣義の敎育には修養の意を寓し、廣意の修養には敎育の義を含む、強ひて其の異る所を擧ぐれば敎育は他働的にして修養は自働的なるにあり。他働的なるが故に敎育者と被敎育者との別あり、敎育は英語エデユケーション（Education）といひ、羅甸のエデユカシオ（Educatio）より出で引き出すの義を有し、獨逸語のエルヅイフング（Erziehung）は導き出すの意を有し、共に他によりて引き出され導き出さるゝの義にして、佛のコンペーレーは「敎育とは人の完全、幸福及び社會的運命を全うするを目的として身體、智識及び道德的諸能力を發達せしめんとして自然を補助する吾人の考想的作業なり」といひ、ギュヨーは「最大多數の個人をして完全なる健康を保たしめ、其の心

身の能力を發達せしめて人類社會の進步に協力せしむるにあり」とし、獨のヴァイツは「敎育は人の內部生活の陶冶し易き時代に於て具案的に影響を與へて之れに一定の形を備へしめんとするにあり」といひ、英のスペンサーは「完全なる生活に必要なる準備をなさしむるにあり」といふ等、各人其の見る所を異にすると雖も、既に敎育といふ以上は敎育者が被敎育者に對する具案的の作業にして、人と人との間に於て行はるべきものなれど、修養は自ら敎育するの義にして自働的なるが故に必らずしも敎育者と被敎育者の對立を要せず。よし敎育せらるゝことありとも、一定の人によりて具案的に敎へらるゝにあらずして、見聞する所の各人は悉く敎育者となつて我が前に現れ、其の取捨一に自己の隨意に任され、且つ其の自己を敎育する所のものも亦唯だ人のみに止らず、花紅柳綠、山高水長、悉く來て自己を啓發するの料たり。天空に燦たる星斗も、地上に既に敎育者に制限なく、其の一もとの菫花も修養の資たらざるなし。ざるが故に、敎育は終るの期あるべきも、修養には終るの期なし。小學校よ

◎修養の意義

り中學、中學より大學、大學を出でゝも尚ほ他によりて教育せらるゝことあるべきも、死に至るまで他によるものは少し、されど修養は校舍に關せず教師に依らず、一生これ不斷の修養期たり。修養には終期なしと雖も、其の初を云はんか、教育は他によるが故に初て呱々の聲を放ちしより、否、未だ母胎にある中といへども之れを開始し得べきも、修養は自ら教うるものなるが故に、少くとも自我の存在を自覺するの齡に達せずんば初め得べきものにあらず。二者此の點に於て其の趣を異にすと見るべきか。其の趣は異れるものありとも雖も、其の人格の完成を期し當世に處して有用の材たらしめんとするに至ては則ち一なり。故にいふ廣義の修養には教育の義を含み、廣義の教育には修養の義を有すと。吾人をして更に其の目的に向て思索せしめよ。

不斷の修養

二　修養の目的

人格の本質

修養の目的は人格を完成し、當世に處して有用の材たらしむるにあり。此の目的を思索するに當ては先づ人格の何たるやを定めざるべからず。人格とは人たるの資格なり、何をか人たるの資格といふ、彼の禽獸や虫魚や、能く行動し作爲すと雖も、皆な之れ外界の衝動と稟賦の本能とに由るものにして別に其の目的を認知して、斯く爲すにはあらず唯だ人能く自己が行爲の目的を認知し、其の目的に向て動作せんとす、こゝに人格の本質あり、人格の本質は自己が自己の意義を自覺し、此の自覺によつて行動して敢て他の干渉を容れず、自己は自己に對して全く自由なり獨立なり、自由なるが故に正邪を判斷し理非を考慮し、獨立なるが故に自己又他の爲めに動かされず、既に自由なり獨立なり、自己は又自己の行爲に對して其の責任を辭する能はず、これ人の倫理的價値を有する所以にして禽獸に修養なくして、人に獨り此の修養ある所以なり獨のへ

自由獨立

◉修養の目的

一般目的と部分目的

品性の涵養

ーゲル曾て教育を目して人をして道徳的ならしむるの術といふ、修養も亦かく云ひ得べきにあらずや。狹義を以つていへば修養は實に人をして善に就き惡を去るの習慣を修め養はしむるにあり。自己自由の判斷により善に就き惡を去る、習慣は第二の天性となつて、こゝに其の人の品性を造る、曾ては多少の努力を要したる道徳上の行爲も其の品性の涵養によりては容易に之れを行はしむるに至る、高僧道元が「諸惡莫作、諸惡莫作と行じもてゆく中に諸惡造られずなる」といへるもの則ち是れ、習慣は急坂に大石を轉ずるが如し、其の動かすの初めに當りて多少の努力を要すべきも、既に動けば輾轉止ること能はざるものを云はんか、前節に圖示せる所のもの皆となし。狹義に於ける修養の一般目的はこゝにあり。

更に其の目的の部分的なるものを云はんか、前節に圖示せる所のもの皆之れなりと雖も、其の要を取れば身體の剛健と智能の啓發と趣味の涵養、と意志の鍛錬とにあり。

一般的 { 廣義……人格の完成
狹義……品性の陶冶

修養の目的

一般的 { 廣義……人格の完成
狹義……品性の陶冶

部外的 { 身體……身體の剛健
精神 { 智……智能の啓發
情……趣味の涵養
意……意志の鍛錬 }

而して其の人格を完成し品性を陶冶し身體を剛健にし智能を啓發し趣味を涵養し意志を鍛錬する所以のものは獨り自ら高うせんが爲めにあらずして當世に處して有用の材たるにあり、否な寧ろ當世に處して有用の材となつて初めて人格を完成し得べしとするを妥當とす。人類は社會的動物にして社會は共同生活なり、相互に相助け相補ふて以て自己の生存を完備す、社會を離れては其の生存だも保有する能はず、況んや自己を發展し自己を滿足せしむることをや。人類は彼の下等動物の如く無理想に終る者にあらず、常に何等かの手段を以て自己の理想を實現せんとす、此理想實現に對する努力は實に人類をして至高なる動物たらしむる所以にして、獸を離れたる肉身を有しつゝ、

しかも神に向はんとする靈能を有する所以のもの又實にこゝに存す。されば徒らに他の顧使の下に服して全く自己の自由と獨立とを傷けられ、何の理想もなくして生存する上代の奴隷の如きは未だ以て完全なる人格を有する者といふべからず。君主專制の下には尙ほ幾多の奴隷的人格あるも、現代の文明は之れを許さず、人をして各自其の自我を認知して自由なる行動に出でしめんとするは眞にこれ現代文明の目的にして人格の尊重こゝに認められ、人類は皆な自己の自由を傷けらるゝことなくして他の爲めに助けられ、他の人格は又其の獨立を妨ぐるなくして自己の爲めに尊重せられ相互相補ふて現代の社會を成し、相共に其の理想の發現に努力して初めて人の人たる、實を擧ぐべきにあらざるか、吾人が修養の動物方面あるをいふもの其の理此に伏し。其の一生不斷なるを說くもの亦其の本此に在り。

文明と人格

修養の意義弁に目的は既に定められぬ。されど尙ほ其の根底に橫はる二個の大問題あり、一は性善惡の問題にして、他は自由意志の問題なり。此の二問題に於て解決せらるゝにあらずんば修養の根本義は依然として不明に屬す

二個の大問題

人の此の世に於て行動し作爲する所、果して其の自由の意志に出づるか、或は其の自由なりと思惟せるは吾人の誤想にして人の行爲は悉く必然の理法に支配せられ、其の動作は皆な因果の關係に束縛せらるゝにあらざるか。若し悉く必然の理法に支配せられ、皆な因果の關係に束縛せらるゝとせば意志の自由は全く奪却せられて所謂修養なるものも、亦無意義に了らんとす、吾人は先きに論述の便を計り、人格の存在を假定して其の自由なるべきをいへり、されど其の自由なるもの亦唯だ自己が斯く思惟するのみにして、其の實、必然の理法が暗默の間に行はれ、因果の關係が不言の中に現れつゝあるにあらざるか。若し夫れ吾人に自由の意志なく其の行動作爲、一に自然の理法に支配せらるゝとせば、如何に努めて修養を奬むとも、そは畢竟砂上に樓臺を築かんとするものにして其の事自體に於て徒勞たるを免れず、自由意志有無の問題は直に以て修養の能不能を決すべし。

意志の自由

性善惡の問題も亦修養の意義に關して重大なる關係を有す。性善ならば以て其の性を磨くを以て修養の指針とし、性惡ならば以て其の性を矯めて以て

◎修養の目的

修養の實を擧ぐべし。吾人は修養論議の階梯として暫く此の兩問題に就て研究を試みざるべからず。

「夫れ猛虎の害を爲すを去る者は山を焚て野人の蔬菓を顧みず。蛟蚢の患を爲すを去る者は流を斷て漁人の網罟を顧みず。

刄、頭目に在り指を斷て顧みず、病、心腹にあり膚を灼て辭せず。

林を焚て而して田す、獸を得ざるにあらず。明年獸なし。澤を竭して而して漁す、魚を得ざるにあらず。明年魚なし。

永嘉先生」

東亞倫理の異彩

第二章　性の善惡

一　孔孟の性善說

修養の根底に横はれる二大問題として性の善惡と自由意志の有無とを査究せむとするに當り、吾人は端なくも此の二個の問題が東西兩洋の倫理史上に於て各〻其の一面の研究に向て異彩を放ちつゝあるを看取せずんばあらず。東洋倫理史上の中堅問題は性善惡論にして西洋倫理史上の主要論點の一は自由意志有無にあり、請ふ先づ東洋倫理史上に現れたる性善惡論を一瞥して西洋學說の概觀に及び、以て此の問題の一面を決定し、更に進んで自由意志有無の難問に向はしめよ。

支那には自ら二個の思潮あり、一は南方荊楚の學風にして他は北方鄒魯の學風なり。前者は理想的超倫理的にして、人性問題に就て多く聽くことを得ざるも、後者は現實的倫理的にして先づ人性問題を定めて修養の工夫を語らん

◎性の善惡

とす。前者には老、莊、列の諸子あり、無爲恬淡を旨とし超世脫俗を風としし靜的修養に於て吾人を敎訓すること多しと雖も、動的修養に至ては殆んど之を口にすることなきが故に、其の學說も亦實社會と沒交涉にして、こゝに說述するの要を認めず。後者には孔、孟、荀の諸子あり。殊に孔子は此の學風の唱首にして支那三千載、敢て其右に出づるものなき大聖人たり、其の學、仁を本とし忠恕を道とし、修養を說くこと懇切なりと雖も、性の善惡に就ては確說を窺ふに難し、「孔子家語」は孔子の言として傳へていふ、

孔子の性理

我れ性の善なるを言はむと欲す、されど人の善に放任して惡たらんことを恐る。我れ性の惡なるを言はむと欲す、されど人皆な仁義を以て性を害すると爲し之れをなさいらんことを恐る。

と、此の語の果して孔子の口より出でたるや否やは遽かに知るべかれざれど、孔子は此の問題に關して容易に口を開かざりしや疑ひなし。唯だ「人の生るや直、之を罔して生けるは幸にして免れたるなり」といひ、又詩を誦して、

天、蒸民を生ず、物あれば則ある、民の彝を秉るや、此の懿德を好む。

と、云へる等より推して其の性善說なりしを言ひ得べきのみ。蓋し孔子の道は理の査究にあらずして行の至善なるにあり。されば人性問題の根底は暫く之を思索の外に置きて、唯だ常識的に「性相近し、習へば相遠し」といひ、「敎ありて類なし」といひて人性は略ぼ相同じきも敎養の如何によりて左右すべきを說き、人性の階級を示しては、

人の四品

生れながらにして知るものは上なり、學びて之を知るものは次なり、困みて之れを學ぶは其の次ぎなり、困みても學ばざるは民こゝに下とす。

と四品の差あるを說く、孔子の孫に子思あり、名は伋、其の學統を祖述して子思の性論

「中庸」を作る。其の開卷にいふ

天の命、之を性と謂ふ、性に率ふ之を道といふ、道を修むる之れを敎といふ。

と、天の命を以て性とし、之れに率ふを道とし、其の道を示して

誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり

と說きて、道德の根本理想を以て誠の一字を出でずとし、誠を體し道に進む

◉性の善惡

の法は善を擇んで之を固執するに外ならじとし、其の善を擇ぶに就ては先づ善の何たるかを知らざるが故に博く學び審かに問ひ愼みて思ひ明かに辯ずる學知の必要をいひ、固執利行の法としては篤く行はざるべからずとし、人の一たびして能くするものは己れは之を百たびし、人の十たびして能くするものは己れは千たびして怠ることなくむば修養其の功を積んで、「愚なりと雖も、必らず明に、柔なりと雖も、必らず強ふることを得む」と說く。蓋し博學、審問、愼思、明辯は子思が靜的修養にして篤行は其の動的修養たり。

子思の修養法

孟子

孔子に於て其の萌芽を見得べき性善の感想は子思に至りて漸く明かに、子思の門（或はいふ子思の門人に出づ）に孟軻出るに及びて性善說の旗幟は鮮明に翻けられぬ。孟軻は鄒の人なり、孔子に後るゝこと百有餘年、「天、若し天下を平治せんと欲せば、今の世に當て我を舍きて誰ぞや」と四方を遊說して盛んに仁義禮智（殊に仁義）の道を說き、此の道を以て人性の固有と爲し四端の說を述べて曰く、

四端の說

人皆な忍びざるの心あり、今ま人は孺子の井に入らんとするを見れば皆な怵惕惻隱の心あり、交を孺子の父母に內るゝ所以にあらず、譽を鄕黨朋友に要する所以にあらず、其の聲を惡みて然らざるに非ず、是に由りて之を觀れば惻隱の心なきものは人にあらざるなり、辭讓の心なきものは人にあらざるなり、惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。（中略）凡そ我れに四端あるは皆な擴して之を充つるを知る、火の始めて燃え、泉の始めて達するが如し、苟くも能く之れを充たしむれば以て四海を保するに足り、苟くも之を充たしめずんば以て父母に事ふるに足らず。

と、仁義禮智の四端、既に我が心に存す、これを修養して發達擴充せしめば以て四海を保つに足るとし、直覺的に性善を示しては、

人の學ばざる所にして能くするものは良能なり、慮らずして知るものは良智なり、孩提の童子も其の親を愛するを知らざるなく、長じて其の兄を敬するを知らざるなし。

良智良能

◎性の善惡

とて良智良能の先天的なるをいひ、更らに口の味に於ける耳の聲に於ける目の色に於ける人皆な同じく嗜む所ありとの說を根據として本能的に性善說を解明して

心の同じく嗜む所のものは何ぞや、理と義とを謂ふなり、故に義理の我が心を悅ばすこと猶ほ美味の口を悅ばすが如し

とし、こゝに絕對的性善說を主張す。されど何等の修養なく何等の工夫なくして性善を保持すべしとするにあらず。性は善なり、唯だ物欲の蔽ふ所となつて惡に陷る。されば此の欲を制して本來の性能を發揮するを以て修養の第一義とし、

心を養ふは寡欲より善きはなし、其の爲人に欲寡ければ存せざるものあり と雖も寡し、其の爲人、欲多ければ存する者ありと雖も寡し

と、朱子之を註して「欲は口鼻耳目四肢の欲の如し、人の無き能はざる所と雖も、然も多くして節せざればまづ其の本心を失はざるものあらず、學者嘗に深く戒むべし」といふ、人の性や善、其の本心を放失して初めて惡たり、

牛山の木、嘗て美なり、其の郊を大國に於けるを以てなり、斧斤之を伐る以て美と爲すべき乎、是れ其の日夜の息する所、雨露の潤す所、萌蘖の生ずるなきにあらず、牛羊又從て牧す、是を以て彼が如く濯々たり、人其濯たるを見て以爲らく、未だ嘗て材あらずと、是れ豈に山の性ならんや、人に存ずるものと雖も、豈に仁義の心なからんや、其の良心を放つ所以のものの亦猶ほ斧斤の木に於けるが如し、旦々にして之を伐る以て美と爲すべけんや

と、其の放心を求むるを以て學問の道とし、夜氣存養の說を立て、修養の道程を指さす、本來の性も亦牛山の草の如く萌蘖の生ずるなきにあらざるも、晝間外物に接するに當りて之れを梏亡す、夜間は外物に接せざるが故に本心の萌蘖こゝに生長す、此の夜間清明の氣を存養して、晝間外より來る不善の氣に打ち克つを以て必要の工夫とす。

則ち且晝の爲す所、之を梏亡するあり、之を梏して反覆すれば則ち夜氣以て存するに足らず、夜氣以て存するに足らざれば則ち禽獸と違はざること

◎孔孟の性善觀

遠からず、人、其の禽獸を見て以て未だ嘗て才あらずと爲すものこれ豈に人の情ならんや、故に苟くも其の養を得れば物として長せざるなし、苟くも其の養を失へば物として消せざるはなし。

と、夜氣の存養は實に之れ修養の一工夫たり、孟子別に浩然の氣を養ふの說を立つ、何をか浩然の氣といふ、孟子答へて曰く、

浩然の氣

言ひ難し、其の氣たるや至大至剛、直を以て養ふを害するなくんば天地の間に塞がる。其の氣たるや義と道とに配す、是れなくんば餒ゆ、是れ集義の生ずる所の者、義、襲ふて之れを取るにあらず、行ふに心に慊らざるあれば則ち餒ゆ。

と、此の氣たるや多年の積善集義によりて心裡に生ずる道德上の大勇たり。此の大勇を養ひ以て事に處し道に當るべし夜氣存養の說は孟子の靜的修養論にして、養浩然の氣の說は其の動的修養論と見るべきか、

性杞柳の論

孟子の性論幷に修養の工夫は上來述る所の如しと雖も、尙ほ一層其の所說を明瞭ならしむるが爲め彼れと告子との對論を擧げんか、告子は「性は猶ほ杞柳の如く、義は猶ほ栝棬の如し人性を以て仁義と爲すは猶ほ杞柳を以て栝棬を爲るが如し」とするもの栝棬は杞柳を以て造る所の酒杯の類を指す。栝棬は人爲によりて成る、此の人爲に爲る所のものを以て直に杞柳とするは頗る不可なるにあらずや、人性もと善惡なく仁義なし、唯だ人爲によりて善たらしめ惡たらしめ得べしとす、孟子之に答へて曰く、

性湍水の論

子、能く杞柳の性に順ふて以て栝棬を爲るか、將た杞柳を戕賊して後に以て栝棬を爲るか、若し將た杞柳を戕賊して以て栝棬を爲らんとせば則ち亦將に人を戕賊して仁義を爲さんとするか、天下の人を率ひて仁義に禍せんものは必ず子が言か。

と、反駁して杞柳に栝棬たるの性あるが故に栝棬たらしむべく、人に仁義を爲すの性あるが故に仁義たらしむべしとす。

告子又いふ、「性は猶ほ湍水の如きなり、これを東方に決すれば則ち東流し、これを西方に決すれば則ち西流す、人の性の善不善を分つなき猶ほ水の東西を分つ無きが如し」と、孟子、答へていふ、

◎性の善惡

水まことに東西を分つなしと雖も、上下を分つことなからんや、人の性の善なる猶ほ水の下に就くが如し、人、不善あることなく、水は下らざるあることなし、今ま夫れ水は搏て之を躍らせば顙を過さしむべく、激して之を行れば山に在らしむべきも、是れ豈に水の性ならんや、其の勢ひ則ち然るなり、人の不善を爲さしむべき其の性も亦是の如きなり。

と、性の善なる水の下に就くが如く、其の不善なるを以て顙を過ぎ山に在るが如く本來の性にあらずとす。孟子の論辯、機智縱橫、能く告子の論を破るに似たりと雖も、孟子と告子とは立論の根底を異にす。孟子は人の以て禽獸に異る所の性を立脚地として之れを論じ、告子は人の禽獸と相同じき性を立脚地として之れをいふ。次ぎの問答に於て之れを知るべし。

告子曰く生之れを性と謂ふが如きか

生之れを性と謂はゞ猶ほ白、之れを白と謂ふが如きか

すものなり、孟子は

告子曰く生之れを性といふと、こは吾人の知覺運動する所以を以て性を爲

と反問す、告子曰く「然り、」孟子更らに問ふ、

白羽の白は猶ほ白雪の白の白の如し、白雪の白は白羽の白の如きか、

告子曰く「然り」こゝに於て孟子斷じていふ、

然らば則ち犬の性は猶ほ女の性の如く、牛の性は猶ほ人の性の如きか。

と、告子の之れに對する答辯は之れを知るに由なしと雖も、告子が立論の根底より搖摩すれば、こも亦「然り」といふの外なかりしならん。されば告子は更に其の性論を主張して「食色は性なり、仁は内なり、外にあらざるなり、義は外なり、内にあらざるなり」といふ。則ち食色の如き動物的なる本能欲を以て性とし、仁愛の心も亦之れと同じく自然の衝動によりて内より發すとするも、義に至ては之れと異なり、外より來て我が心を律し之をして事の宜しきに從はしむるものとす。孟子之を難じて

何を以てか仁は内にして義は外と爲す

と云ふや、告子は「彼れ長にして我れ之を長とす、我れに長あるにあらず、猶ほ彼れ白にして我れ之を白とするが如し、其の白は外に從ふなり、故に之れを外といふ」白といひ長といふ皆な之れ我が心外の標準によりて云ふもの

にして食色の欲、仁愛の情の如く內より來るものにあらずとは告子の思惟したる所なるが如し、孟子更に難じて曰く、

馬の白を白とするは以て人の白を白とするに異なるなし、識らず、馬の長を長とするは人の長を長とするに異なるなきか、且つ謂へ、長ずるもの義か、之れを長とするもの義かと、長ずるもの義なるにあらず、之れを長とする心內に義ありとす。告子又辯じて「吾が義は則ち之れを愛す、秦人の義は則ち之れを愛せず、是れ我れを以て悅びを爲すものなり、故に之れを內といふ、楚人の長を長とし、亦吾が長を長とす。是長を以て悅びを爲すものなり、故に之れを外といふ」となす、是仁愛は內存的にして義を以て外來的とするもの、孟子又之れを駁して

秦人の炙を嗜むは以て吾が炙を嗜むに異なるなし。夫れ物も亦然るものあり。然れば則ち炙を嗜むも亦外にあるか。

と、楚人の長を長とし、吾が長を長とするの義を以て外來的とす然らば秦人の炙を嗜み吾も亦炙を嗜むが如き食色の欲をも外來的となすかと、言は告子

の自家撞着を責むるに似たりと雖も、立論の根底既に異なるが故に此の駁論は告子に於て何等の痛痒を感ぜざるべし。

之を要するに孟子は人の禽獸と異なる所以の性を以て先天的內存のものとし之れを發揮するを以て修養の要義と爲したりしなり。

二　荀子の性惡說

同じく源を孔子に發して、然かも思孟の性善說に反して性惡の說を主張せるものを荀卿とす、孟子に後るゝこと五六十年。深く人情の秘奧を考察し日常の經驗により立言して曰く

人の性は惡、其の善なるものは僞なり。今人の性、生れて好利あり、是に順ふが故に爭奪生じて辭讓亡ぶ、生れて疾惡あり是に順ふが故に殘賊生じて忠信亡ぶ、生れて耳目の欲あり、聲色を好むあり、是に順ふが故に淫亂

◎荀子の性惡說

生じて禮義文理亡ぶ、然らば則ち人の性に順ひ、人の情に順はゝ必らず爭奪を生じ、亂理して暴に歸せん、故に必らず將に師法の化、禮義の道ありて然る後に辭讓に出で文理に合して治に歸す、之れによりて之を觀れば人の性の惡なるや明なり。其の善なるものは僞なり。

と、人性を以て惡とし、其の善を以て僞とし此の僞を習ふを以て聖人の敎とす。聖人は思慮を積み、僞故を習し、以て禮義を生じて法度を起す。然らば則ち禮義法度は是れ聖人の僞に生ずるにあらざるなり、もと人の性に生ずるなり。若し夫れ目、色を好み、耳、聲を好み、口、味を好み、心、利を好み、骨體膚理、愉佚を好むは是れ皆な人の情性に生ず、感じておのづから然り、事とするを待て後、之れを生ずるにあらず、夫れ感じて然ること能はず、必らず且つ事とするを待て後に然るもの之れを僞に生ずといふ、是れ性僞の生ずる所、其の同じからざるの徵なり、故に聖人は性を化して僞を起す、僞は性を起して禮義を生ず、禮義生じて法度を制す、然らば則ち禮義法度は是れ聖人の生ずる所なり、故に聖人の衆に同じくして、其の衆に異なるものは性なり、異にして衆に過ぐるものは僞なり、

と、更に孟子の性善を駁して「凡そ古今天下の所謂善なるものは正理平治なり、所謂惡なるものは偏險悖亂なり、人もとより正理平治ならば何ぞ聖王を用ひ禮義を用ん、よし聖王亂義ありと雖も、亦正理平治を加ふる能はざらん、其の然らざる所以のものは人の性惡なるが故なり、人の性既に惡なり、其の性に任せば偏險して正しからず悖亂して治らざるを以ての故に、聖人禮義の法を立つ」といふ、言、頗る奇矯なるが如しと雖も、しかも亦能く人性の一面を看破し得たりといふべし。

荀子既に人性を惡と斷ず、其の修養法も亦孟子の如く內存的省察的のものにあらずして外來的矯正的のものならざるべからず、荀子此に於て禮を以て修養の要義とし、

人生れて欲あり、欲して得ざれば則ち求めなきこと能はず、求めて度量分界なければ則ち爭はざること能はず、爭へば則ち亂る、亂るれば則ち窮す。先王、其の亂を惡むが故に禮義を制して以て之と分ち以て人の欲を養ひ、

◎性の善惡

◉荀子の性惡說

人の求めを給し、欲をして必らず物に窮せず、物をして必らず欲に屈せざらしむ、兩者相持して長ず、是れ亂の起る所なり、故に亂は養なり

と禮を以て道德の根底とし以て修養の法之れを出でずとす。されば孔子の仁を說き孟子の義を示すが如く荀子は之れを以て最高の原理とし仁も之れなくんば亂れ、義も之れなくんば立たずとし、小は坐作應對より大は社會國家の法律に至るまで之れを以て規定し

禮は治辨の極なり、强國の本なり、威行の道なり、功名の總なり、王公、之れに由りて天下を得、之れに由らざれば社稷を捐つる所以なり。故に堅甲利兵も以て勝とするに足らず、高城深池も以て固と爲すに足らず、嚴令繁刑も以て威と爲すに足らず、其の道に由れば則ち行はれ、其の道に由らざれば則ち廢す

とす。禮は仁義を節文して適當なる行爲に出でしめんとする形式なり。吾人の修養に這般の形式を要するや否定すべからず、荀子の門に韓非子あり李斯あり、共に刑名の學に走せて法律至上主義に流れ、韓非は

夫の貧困に施與するものは、是れ世の所謂仁義なり、百姓を愛憐し誅罰するに忍びざるものは、是れ世の所謂惠愛なり、夫の貧困に施與する如きは功なきものにして賞を得るなり、誅罰するに忍びざる時は暴亂止まず

として仁義を排して亡國の法とし、李斯は後、秦の始皇帝を輔けて其の主義を實行し終に先王の道義を破壞し、儒書を焚き儒者を坑にする等惡辣の手段に出でしが故に、其の極、荀子の學說も亦思孟性善の說と共に確かに眞理の片影を寫する卓見たるを認めずんばあらず、性果して善とすべきか、抑も亦惡と斷ずべきか、尙ほ後段幾多の考量を要す。

三　性善惡混淆說

◉性の善惡

孟子之れを善といひ、荀子之れを惡といふ、善なれば開發せざるべからず。

惡なれば矯正せざるべからず。開發するには養浩然の說あり、矯正するには禮儀の敎あり。孰れが是、孰れが非、抑も亦兩者是にして兩者又非なるか、

淮南子

漢に淮南子あり、鄒魯學派の論點たる性を解するに荊楚學派なる老莊の形而上學的見地を以てし、萬物の本性は絕對無限の大道にあり、大道はこれ虛靜なり、されば人の性も亦、虛靜なるべしとし、之れを以て人間行爲の標準とし、

夫の舟に乘て惑ふものは東西を知らず、斗極を見て則ち寤る、夫れ性も亦人の斗極なり。

董仲舒

といひて此の斗極を離れずして能く迷ふなきが如く性を守れば、以て惑ふとなかるべしとす、性は日月の如く清明なれども、物慾の雲之れを覆ふ、覆ふと雖ども、其の本既に清明なるが故に光洩れざるなきが如く、人の性や邪なし之を以て其の善を行ふや易く、惡を行ふや難しとす。されば其の修養の工夫もまた內存的に其の本性を守りて心を虛靜にするにありとするに外ならじ董仲舒出るに及びて性善惡混淆の說初めて出づ。仲舒、人天相關を說き、天

人似形をいひ、宇宙と人事との調和とを以て道德の理想とし、天地人を以て萬物の本原とし、之れを人に及ぼしては、「天、之れを生ずるに孝悌を以てす、孝悌なければ其の生ずる所以を失ふ、人、之れを養ふに衣食を以てす、衣食なければ其の養ふ所以を失ふ、地、之れを成すに禮樂を以てす、禮樂なければ其の以て成す所以を失ふ、二者手足となり、合して體を成す」と。孝悌と衣食と禮節とあつて初めて全人格を完成すべしとす。其の性を說くや。

天に陰陽の禁あり、身に貪仁の祉あり。

といひて貪なる惡性と仁なる善性と相混ずと觀じ、

禾は米を出すと雖も、禾未だ米といふべからず、性は善を出すと雖も、性未だ善といふべからず、蘭に糸ありと雖も、蘭は糸にあらず、卵に雛あり と雖も、卵は雛にあらざるが如く、性は善にはあらざるなり、卵なり、繭なり、繭は糸にあらざるなり、卵は復るを待つて後に能く雛となり、繭は練るを待つて後に能く糸となる、性は敎誨を待つて後、能く善たり、善は敎誨の然らしむる所なり、質樸の能く至る所にあらざるなり

◉性の善惡

揚雄の善惡混淆說

劉向の性無善惡說

◉性善惡混淆說

と、性には善たるの原質あり、敎化を以て能く善ならしめ得べしとす。故に其の修養も亦內存的のみにあらずして之れを外來に待つ所なかるべからず、彼れいふ「天下患害なくして然る後に性善なるべく、性善たるべくして然る後に淸廉の化流る、然る後に王道擧り禮樂起る、故に聖人は天下の患を除く」を貴ぶ」と、これ彼れが性論當然の歸結なり。

此の董子の學說を承けて更に明かに善惡混淆說を主張せるものは揚雄にして、全然別見地に立ち、しかも相似たる所あるものを劉向とす、揚雄はいふ、天、生民を生ず、倥侗顓蒙にして其の惡を修すれば惡人たり、其の善を修すれば善人たり、と、刀ありとも砺かずんば利ならず、玉ありとも磨かずんば光なけん、修養の要こゝにあり。故に揚雄は盛んに敎化訓練の必要を唱導す、劉向は人の善惡は性にあらざるなり、物に感じて而して後に動く、とす。物に感ずるとは外界の影響にして則ち其の如何によりて善たるべく惡たるべしとする者、揚子は之れを自修の上にいひ、劉向は之れを外物の影響

韓退之の三品說

に說き、前者は善惡は性の內に伏在すとし、後者は全く性以外の作用とす。

唐に韓退之あり、自ら任ずること重く、遠く道を孟子に繼ぐものなりとし、「堯これを以て之を舜に傳へ、舜是を以て之を禹に傳へ、禹是を以て之を湯に傳へ、湯是を以て之を文武周公に傳へ、文武周公は之を孔子に傳へ、孔子之を孟子に傳ふ、孟子死して其の傳を得ず、荀と揚とは擇んで精ならず、語て詳ならず」とす、其の性を論ずる亦孟子に淵源すと雖も、性と情とを區別し、性は先天的內存的のものなれども、情は後天的外來的のものとし、

性は生と俱に生ずるものなり、情は物に接して生ずるものなり。

といひ、此の性を分ちて上、中、下の三品とし、

上なるものは善のみ。中なるものは導きて上下せしむべく、下なるものは惡のみ

とし、其の性たる所以のもの五ありとして、曰く仁、曰く禮、曰く信、曰く義、曰く智を擧げ、情も亦三品あり、其の情たる所以のもの七、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲

◉性の善惡

◉性善惡混淆說

其の上なるものは七情動て其の中に處り、中なるものは甚しき所あり、亡き所ありと雖も、其の中に合せんことを求むるものあり、下なるものは亡きと甚しきと、直情にして行ふものとなりといひ、性に三品情に三品あるをいふ。

韓退之の門に李翺あり、性と情とを區別し性を以て善とし、情を以て惡なりとして立論す。

人の以て聖たる所以のものは性なり、人の以て其の性を惑はすものは情なり、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲、七つのもの皆な情の爲す所なり、情既に昏ければ性斯に匿る、性の過にあらざるなり、水の渾するや、其の流、清からず、火の烟るや其の光、明かならず、水火清明の過にあらざるなり、と、性と情とを峻別す、しかも其の情の根原を說くや「性なければ情の生ずる所なし、情は性に由りて生ず、情自ら情だらず、性に因りて情たり、性自ら性たらず、情に因りて性を明にす」とし、情を以て性の動とす、されば其の情を生せざらしめて初めて本來の性に復るべし、其の修養を示して

慮らず思はざれば情生せず、情生ぜざれば則ち正思成る、と、韓退之幷に李翺によりて峻別せられたる性と情とを一なりと喝破せるものを王安石とす、曰く

七情の未だ外に發せずして心に存するは性なり、七情の外に發したるは情なり、性は情の本、情は性の用なり、

といひて性善性惡の說を駁し、善惡は性其の者に命名すべきものにあらずして、情が物に接して動き其の理に合ふと合はざるとを以て區別し、即ち「若し情にして理に當れば聖人たり、理に當らざれば小人たり」といひて性に於て之を定めずして行爲によりて善と叫び惡と稱せんとする者にして從來の主として本性の上に善惡を立てゝ行爲を顧みざりしものに比して一異色あるを覺ゆ、されど其の本性といふに當りても荀子の如く性惡にして禮を以て聖人の僞に生ずるとするに反し、木を器たらしむるは木に其の性あればなり、馬の齕せらるゝも亦馬に其の性あるに由る、人には自ら嚴父慈母の心あり、聖人其の性の欲する所によりて制と爲す、其の性の善、人に強ゆる如きも、實は其

◉性の善惡

◉性善惡混淆說

の性の欲に從ふなり」とす。

四　程朱理氣の說

周末に於ける孟荀二子の對峙は漢に入つて董仲舒、揚雄等の調和說となり唐に來つて韓退之の性情三品說となり、性情を峻別して善惡を分るに對し王安石の性情同一說となり。諸說紛々性の善惡に關する論議は支那倫理史上の中堅問題となつて文質彬々たる宋代に入り、諸學者の深厚なる思索と精到なる考察とは此の問題に加へられ光彩陸離以て支那思想の精華を示せり。此の先驅を爲せるものを周濂溪とす、濂溪名は敦頤、字は茂叔、太極圖說を傳へて宇宙の根本原理を究め、無極にして太極、太極動て陽を生じ、陽極つて靜、靜にして陰を生じ、靜極つて復た動く、一動一靜互に其の根たり此動靜陰陽の二氣交感して萬物を化生し此の萬物の秀を得たるものを人といひ「最も靈

周濂溪

なり、形に既に生じ、神、知を發す、五性感動して善惡分れ萬事出づ」とし、人の性もと仁義禮智信を有するも外界に接して善惡を生ず、其動かざるや唯誠のみ、誠はこれ聖の本、其の動くの幾に善惡を分ち、其の正しきものは善、正しからざるものは惡、こゝに於て君子は其の動の際たる幾を愼むを以て修養の要とす。

◉誠は聖の本

次で張載あり、字は子厚、世人橫渠先生と尊稱す。性論に一生面を開く、張子は宇宙の根本原理を以て太虛とし蒼々茫々、虛明の德を備へ、太和の動を具す、萬物は實に此の太虛の變化に外ならざれば人も亦其の性は虛明、天地の性を受く、既に天地の性を受く其の本性に於て善ならざるなし、然れども、氣に清濁を生じて終に各人其の氣質の差を爲すに至ると、こゝに初めて天地の性と氣質の性との別あり、既に其の本然に於ては同じきも氣質に於て異るをいふ、其の修養法は其の氣を養ひ、之れが本に反し偏ならざる時は性を盡くして天なり。

張橫渠

◉天地の性と氣質の性

◉性の善惡

といへるが如く氣質を變化するを主とす、如何にして氣質を變化すべき、そ

は一面心を平かにして太虛と合せしむるの內的修養を怠らざると共に他面に於て禮を守りて外來的に性を持し本に反るの工夫を講せざるべからず、これ彼れが人を敎ふるに先づ禮を以てしたる所以か。

程明道、程伊川

周張二子によりて發育し來りし宋儒の性論は二程子に至りて爛漫の花を開き、朱子に至りて終に其の實を結びぬ。二程子、長を程顥といひ、明道先生と呼ぶ、字は伯淳、幼を程頤、字は正叔、伊川先生と呼ぶ、長は性、溫厚、幼は性、嚴毅、其の學說も亦趣を異にすと雖も、兄は弟を尊んで他日、師道を尊嚴せしむるものは伊川なりといひ、弟は兄を敬して我が道、明道と同じ、異日我を知らんと欲するものは之れを明道に見よ。と後世其の學說相混じて明別し難し。張載既に天地の性と氣質の性とを分ち、前者を以て萬人共通のものとし、後者を以て個々差別のものとす、程子に至りて理と氣とを分ち、性を以て理とし、

理氣の說

性に不善なし、而して不善あるもの堯舜より途人に至るまで一なり、才は氣に稟く、氣に清濁あり、其の清を稟くる者は賢たり、其の濁を稟くる者は愚たり。

と、又いふ。

寡慾

性は天に出で、才は氣に出づ、氣清ければ則ち才清く、氣濁れば則ち才濁る、才には則ち不善あり、性には則ち不善なし。

性即ち理は宇宙に瀰漫して行くとして到らざるなく、物として備はらざるなけれど、人の才には不同あり、これ氣の清濁に由る、性を論ずるものは此の氣を忘るべからず、氣をいふものは此の性を忘るべからずとし理氣の說を立つ。性は絕對にして氣は個別なり、絕對の性は天に在ては命たり、義に在ては理たり、人に在ては性なり、身に在ては心たり此の命、性、理、心、其の名異りと雖も、其の實一、冲漠無朕にして萬象森然として具す、而して其の異る所以のものは氣の清濁にあり。故に其の修養を說くに當りても、先づ其の濁れる氣を修治して清明純全ならしめざるべからず、其の法は寡慾の二字を知るに過ぎたるはなし、寡慾なれば自然に本體の靈性を發揮し得べし、而して之れを爲す。道は敬以て心を治むるにあるのみ。敬、以て心を治むる

◎性の善惡

◎程朱理氣の說

とは心をして主あらしむるなり、一事を主とすれば他事入ること能はず、これを主一無適の工夫とす、程明道いふ、

主一無適、敬以て內を直せば便ち浩然の氣あり、浩然須く實識を要すべし

と、此の靜的修養の外に、爲學窮理の外的修養をいひ、人の性や淸明、之れを掩ふは人欲にあり、此の欲を防ぐは學を爲すより急なるはなしとし、書を讀み義理を講明し、古今人物を論じて其の是非を分ち、事物に應接して其の當に處すべきをいふ、これ其の動的修養なり。

以上動靜二面の修養は共に個人的なれど其の社會的なるものに識仁の說あり、程子は、曾に性を以て理なりと見るのみならず其の動的方面を以て仁とし、「學者須く先づ仁を識るべし。仁は渾然として物と體を同うす、義禮智信皆な仁なり」と說き譬喩を擧げていふ、

醫書に手足痿痺するを不仁となす、此の言最も善く名狀す、仁者は天地萬物を以て一體となし、己に非ざるなし。己たるを認得せば何の處にか至らざらん、若し之を己に有せざれば自ら己に與せず、相關すること手足の如

し、仁の氣己を貫かざれは皆な己に屬せず。故に博く施して衆を濟ふは乃ち聖人の功用なり。

と、更に

若し夫れ至仁の如きは天地、一身たり、而して天地間の品物萬形は四肢體たり、夫れ人豈に四肢百體を見て愛せざるものあらんや、聖人、仁の至るや、獨り能く斯心を體するのみ。

といひ天地一體、萬物調和の大原理より仁を抽出し來る、これ程子、性論の一面たり。

二程子の學風を承けて之れを大成せるものを朱晦庵とす、名は熹、字は元晦又仲晦といふ、徽洲婺源の人、理氣の二を主張し、且つ理を以て太極と斷じ、只だ是れ一箇の理のみ、其の極致に因るが故に太極といふと、萬物は一大太極に統合せられ人々又一太極あり、物物も亦一太極を具ふ、猶ほ一粒の粟、生じて苗となり、苗は花を生じ、花は實を結び、實は復た粟を成して本形に復し、一穗百粒あり毎粒個々完全にして此の百粒又各百粒を生ずるが如

◎性の善惡

く、初めは唯だ一太極、分れて個々の太極となり、初めは唯だ一理、分れて個々の理となる、人の性も亦此の如く、理を以ていふ時は全からざるなしと雖も、氣を以ていふ時は偏せざるなく清あり濁あり、清なるものは聖賢となり、濁なるものは昏愚となる、其の全からざるなきものを氣質の性とす、曰く。

天地の性と大極

天地の性あり、氣質の性あり、天地の性は則ち太極本然の妙、萬株の一本なり、氣質の性は則ち二氣交運して生ず、一本にして萬株なるものなり。

と、又いふ

天地の性を論ずる時は則ち專ら理を指して言ふ、氣質の性を論ずる時は則ち理と氣とを以て雜へて之れを言ふ

と、性に此の二を分ち、其の性の物に感じて動く所のものを情とし、我が心は此の性情を具すとしていふ、

仁義禮智は性なり、惻隱、羞惡、辭讓、是非は情なり、仁を以て愛し、義を以て惡み、禮を以て讓り、智を以て知るは心なり、性は心の理なり、情

性と情

性の用なり、心は情性の主なり

と、譬喩を設けて、

心は水の如く、性は猶ほ水の靜かなるが如く、情は則ち水の流れにして欲は則ち水の波瀾の如し

と、心性に二面あり物に感じて動く、其の本然の性に動かさるゝものを道心といひ、其の氣質の性に動かさるゝものを人心といふ、道心は普遍的宇宙的にして人心は差別的個人的なり曰く、

道心と人心

道心は是れ義理上發出し來る底、人心は是れ人身上發出し來る底、聖人と雖も人心なき能はず、飢えて食ひ渴して飲むの類の如し。小人と雖も道心なき能はず、惻隱の心の如きこれなり

と、此の個人的なる人心を制して普遍的なる道心に服せしむるもの實に修養の第一義たり。朱子此に於て人に向て常に靜坐の必要を說き、只此の心を收斂して煩思慮に走らしむることなく滿然として無事ならしめ以て事に隨ひ事に應じ、然かも心を動かさゝるの素を養はしむ、曰く、

靜坐

◎性の善惡

◎程朱理氣の說

始學の工夫は須らく是れ靜坐すべし、靜坐すれば則ち本原定る、物を逐ふことを免れずと雖も、收歸し來るに及んでまた個の安頓する處あり、譬へば人の家に居るが如し、熟し了れば便ち是れ外に出で家に到つて便ち安し、もし茫々として外に在つて曾て工夫を下さいれば便ち收斂して裡面に向ふことを要すとも又個の着落の處なし

と、又いふ、

靜坐は是れ坐禪入定して思慮を斷絶するが如きを要するにあらず、只だ此の心を收斂して走作閑思慮せしむることなくんば則ち此の心湛然として事なく自然に專一なり、其の事あるに及んで則ち事に隨て應じ、事已れは則ち復た湛然たり。

と、既に靜坐の必要をいふ、又夜氣存養に於ていふ所なかるべからず、朱子殊に力を此に用ひ、

氣清ければ則ち心清し、其の日夜の息する所は是れ善心の滋長する處を指して之を言ふ、人の善心已に放失すと雖も、其の日夜の間亦必らず滋長す

る所あり、又、夜氣澄靜するを得て以て之を存養す、故に平旦氣清き時其の好惡亦其の自然の理を得たり云々

夜氣澄靜以て善心を滋長す、これを存養するの修養の要義たる孟子言ふ所の如し、這般の靜的修養の外に常に讀書窮理の要を說き、格物致知是れ窮理、而して窮理の要は讀書にありとし、大に之れを慫慂し、「書を讀むで聖賢の意を觀、聖賢の意に因て自然の理を觀る」と讀書を閑却して理を窮むべからず、理を窮むべからずして能く其の性を養ふを得んや。朱子は是等の修養法を說くと共に又程子の衣鉢を繼ぎて仁を以て天地の道とし、

蓋し仁の道たる乃ち天地、物を生ずるの心、物に即して在り、情の未だ發せずして此の體已に具はり、情の既に發して其の用窮らず、誠に能く體して之を存せば則ち衆善の源、百行の本、此にあらざるなし。

とす。

當時朱子の學風に反對せるもの陸象山あり、又別見地を以て性を論ず。

◎性の善惡

五　陸王の心即理論

陸象山、名は九淵、字は子靜、幼にして人の程伊川の語を誦するを聞き其の頗る孔孟の言と相類せざるを怪み、十三歲にして古書を讀み宇宙の二字を解して上下四方を宇といひ古往今來を宙といふに至り豁然として大悟し、「宇宙內の事は乃ち己分內の事、己分內の事は乃ち宇宙內の事」といひ、宇宙は便ち是れ吾が心吾が心は便ち是宇宙として心即理の說を立て、從來の學者が道心と人心とを分つを破して、

心は一なり、人安ぞ二心あらん

といひ、天理と人欲とを分つを攻めては

人生れて靜なるは天の性なり、物に感じて動くは性の欲なり、是の如くなれば則ち動も亦是にして靜も亦是なり、豈に天理物欲の分あらんや。動若し是ならずば則ち靜も亦是ならじ、豈に動靜の間あらんや。

と、一を是とし他を不是とするを攻め、

心即理

心は一心なり、理は一理なり、至當一に歸す、精義二なし、此の心、此の理實に二あるべからず、故に夫子曰く吾が道一以て之を貫くと、孟子曰く夫れ道は一のみと

道といひ理といひ心といふ悉く是れ一、故に其窮理の工夫といふも朱子の如く物に即して理を窮むるにあらずして直に之れを我が心に求むるにあり。されば朱子は聖賢の書を以て金科玉條とし終生營々其の註釋を事とせしに反し、陸子は

我れ六經を註するにあらず、六經は皆な我が註脚なり。

といひ、其の修養の工夫を說ては、

義理の人心に在る實に天の與ふる所にして泯滅すべからざるものたり。彼れ其の趣を物に受けて理に悖り義に違ふ、蓋し亦た思はざるのみ、誠に能く反て之れを思へば則ち是非取捨、蓋し隱然として動き、判然として明、決然として疑ひなきものあらん。

と本具の性を究めて其の面目を發揮するを要とす。

◉陸王の心即理論

陸象山が心即理の說を繼承して更に其の蘊奥を發揮したるものを明の王陽明とす。名は守仁、字は伯安、支那倫理史上掉尾の偉人なり。彼れは心の本體は即ちこれ性にして性はこれ理とし、

其の主宰の處に就て說けば便ち之れを心と謂ひ、其の稟賦の處に就て說けば便ち之れを性と謂ふ

と、而して其の奥底を以て良知にありとし

天命の性粹然至善として其の靈照不昧なるもの皆な其の至善の發見、是れ乃ち明德の本體にして所謂良知なるものなり。

といひて心の虛靈明覺なるものを以て本然の良知とし、其の感に應じて動くものを意とし知あれば意あり、意あれば即ち行爲ありとし陽明獨得の知行合一の說を立つ。

知の眞切篤實なる處、便ち是れ行、行の明覺精察なる處、便ち是れ知と知行相表裏して二にあらず、徒らに理を說くも自ら行ふにあらずんば未だ學知せりといふべからず、孝を學ぶといふは必らず勞に服し、養を奉じ躬ら

之れを行ふにあり、射を學ぶといふは必らず弓を張り矢を挾で滿を引て的に中つるにあり、天下の學、行はずして學べりといふべきものあることなし、行はざるは知らざるなり、行ふは知れるなり、知つて行はざるはこれ眞に知らざるにあらずと喝破し實踐躬行を旨とす。

陽明の學、其の要を示すに四句教なるものあり、能く性と修養とを明す、

無善無惡心之體　有善有惡意之動
知善知惡是良知　爲善去惡是格物

と、心の本體を以て照明靈覺、相對差別を絕し粹然として至善なるもの、これを無善無惡といふ、物に感じて動きこゝに善あり惡あるは意の作用なり。其の善惡を明察するもの之れを良知とし、致良知を以て修養の工夫とす。良知を致すとは良知を明にし其の善とする所は之れを好み、惡とする所は之れを惡まざるべからず、然るに善を惡み惡を好むは此の良知を隱蔽せらるゝに由る、故に其の意を誠にして其の隱蔽を去らざるべからず、それを爲すには格物の工夫を要す、物を格すとは意中に在る所のものを格すにあり、良知之

◎陽王の心即理論

真知

れを惡めば則ち之れを去り、良知之れを好めば則ち爲す、かくて以て致良知を全うすべし、良知之れを惡みて去る能はず、良知之れを好みて爲す能はざるものは物未だ格らざるものあるなり、曰く

良知の知る所の善、誠に之れを好むと雖も、苟くも其の意の在る所の物に即いて而して實に以て之れを爲すあらざれば則ち是れ物未だ格らざるあり、而して之れを好まんと欲すと雖も、苟くも其の意の在る所の物に即いて而して實に以て之れを去るあるにあらざれば則ち是れ物未だ格らざるあり、而して之れを惡まんと欲すと雖も、苟くも其の意の在る所の物に即いて而して實に以て之れを去るあるにあらざれば則ち是れ物未だ格らざるあり、而して之れを惡むの意、猶ほ未だ洩らさずと爲す。

致知

と、これ爲善去惡是格物の義なり。蓋し致知と格物とは陽明が修養の詮要にして殊に致知は學問の大頭腦、聖人、人を敎ゆるの第一義とす、如何か知を致すべき、曰く

只だ是れ知を致す、曰く如何か致す、曰く爾、那の一點の良知、是れ爾が自家の準則爾が意念の着く所、他良知是は便ち是と知り非は便ち非と知る、更に他を瞞ずること一些も得ず、爾、只他を斯くを要せず、實々落々、他に依着して做し去らば善便ち存し惡便ち去らん、他の這裏、何等の穩當快樂ぞ

と、陽明學は所詮此の如きを以て其の工夫としては常に靜座を說き「日間の工夫、紛擾を覺えば靜座せよ」といひ此の靜座の工夫によりて心裏の主人公を徹見せしめんとす其の良知を詠ずる詩に曰く、

箇々人心有仲尼、自將聞見苦遮迷、而今指與眞頭面、只是良知更無疑。
問君何事日憧々、煩惱場中錯用功、莫道聖門無口訣、良知兩字是參同。
人々自有定盤針、萬化根源總在心、却笑從前顚倒見、枝々葉々外頭尋。
無聲無臭獨知時、此是乾坤萬有基、拋却自家無盡藏、沿門持鉢做貧兒。

人々個々良知の仲尼を求めしむるこれ其の修養たり。

支那四千載を通じて性と修養との論議は波瀾萬重なりしと雖も、所詮の要旨は人性の根底を以て善なるものにして其の惡なるは物欲の掩ふ所となりしに外ならじと見ざるはなし。偶ま荀子の如き性惡の說を立るものありしと雖

◎性の善惡

◎陸王の心即理論

も、そも亦其の根本性をも惡として敎化すべからずと說けるにあらねば、性善說を破るには足らざるなり。然らば泰西學者は如何に見る、請ふ希臘倫理の學說と一瞥せしめよ。

「人の性とする所、只仁義禮智信の五字なり。天下の道理此の外に出でず。して、ことごとく此の內にあり、是れ萬善の出る所の根源なり。五常の性にしたがひて、五倫の道を行ふ。聖賢の敎ふる所、學者の學ぶ所、此の外にこれなし。

貝原益軒」

第三章　知見と德性

一　ソークラテース及びプラトーンの學說

宇內の思潮を大觀するに自ら二派の相類似し二派の相背反せるを認む、宗敎的なる印度の思想に相似たるものはヘブライの思想にして倫理的なる支那思想に相似たるものは希臘思想なり、印度と支那とは以て東洋を代表し、ヘブライと希臘とは以て西洋を代表す、蓋し宇內の思潮は此の四派の融合し軋轢する間に起伏するものにして、既に相似の一面たる支那思想を觀察したる吾人の研究は亦勢ひ他の一面たる希臘思想に眼を注がざるを得ず。

大聖は其の轍を同うす、支那の孔子を見たる眼を以て希臘の大聖ソークラテースを見る、其の言行の頗る相類似する者あり、言行のことは暫く後章の叙述に任せ、こゝに人性に關する論議を見るにソークラテースも亦孔子の如く人性の根底に就て明言する所なしと雖も、所論の傾向を看取して其の性善

◎知見と德性

論者たるを見難からず。ソ氏の研究は人間を中心とし各人個々の間に共通せる普汎的眞理の發見を以て哲學の發程とし先づ揚言していふ「汝自身を知れ」と、人、自ら稱して知れりとなす、抑も何事をか知れる、汝の知れりと爲すは知らざるが故にあらざるか。知は德なり、既に之れを知れりといふ、これを行はざるべからず、其の未だ行ふ能はざるものは眞に知れるにあらず、惡は不知より生し不德は無識より起る。故に人の爲すべき最も高きものは眞の知識を得るにあり、眞の知識あれば德必らず之れに伴ひ、德行あれば幸福は又必らず之れに隨ふ人には自ら幸福を求むるの心あり、されば又何人も德行を望むの傾きなき能はず既に德行を望むの傾きあり人豈に知つて不德を行ふことあらんや、憐れなる哉、人、自ら知らざるが故に不德を敢てし終に自ら求めざるの禍害を招く、智は德なり、而して德は福なり。

汝自身を知れ

惡は不知

智即德德即福

ソ氏の倫理は智即德、德即福の二面を提げて其の根底を眞智識の探究に置き、自ら善と認め自ら幸福なるべしと思惟する所を遂行すべきを說き變化定めなき肉體の幸福に重きを置かずして心靈の慰安に眞正なる滿足の境地を開き、誣ひられて罪を國法に得たるも敢て驚かず、悠々毒を仰で逝ける彼の人格は實に其の學說の權化とし知行合一の活模範とも見るべきか、

ソークラテースの學說を繼承して之れを大成したるものをプラトーンとす、プラトーンの解說を得て吾人はソ氏に於て耳にしたる眞智識論に深き根底あるを認む、プラトーンは吾人の五官に接觸して得る所の感覺上の知識を以て刻々にして變化するものなれば以て永劫不動の眞知識にあらず、感覺以外の理知によりてのみ以て眞知識を獲得すべしとし個々物以外に個々物をして個々物たらしむるの實在即ちイデア (idea) と稱する普汎的性質の觀念あり、例へば難を排して人の爲めに努め死を決して國の爲めに戰ひ、或は强者の前に屈せず、白刃の下に驕がざる如き個々の事象は、變化定めなけれど此の中に共通したる普汎的性質とも見るべきは萬人共に認むる勇氣といへる觀念なるが如く、個々の事象には之れを統合するイデアあり、かくてイデアは各、其の上層なるものに統治せられ層々列を爲して相互相棄さず秩序整然なるイデアの組織をなせるものこれ全宇宙の實在なり。而して此の組織の最上に位せる

プラトーン

イデア

◎知見と德性

イデアは即ち至高の善にして個々の事象は皆な此のイデアの映像を宿し此の吾人の本性も其の未だ現實界に生れ出でざりし以前に於ては理知明かにイデアを見ることを得たりしも一たび下土の肉身に繫がるゝに至りて性慾忽ちに加はり理眼其の明を失ひたれど尙ほ心の奥底にはイデアの影を宿せるが故に肉慾の跳梁を制し物質の束縛を脫しなば理眼復び明かにイデアの境に遊ぶことを得べしとし、吾人に眞を求め善を望み美を愛するの心あるはイデアに對する追慕憧憬の念にして實にこれ戀ひに外ならずといひて、こゝに有名なる戀愛（エロース）（ἔρως）說を立てぬ。

エロース

ソークラテースに於ては未だ明確に言はれざりし人性の根底の善なることはプラトーンに於て明かになりぬ、プラトーンは其の最高なる善の觀念と吾等が善の觀念との關係を說くに巧妙なる譬喩を以てし

太陽の譬喩

吾等が物を見るは視覺あるにあらずや、視覺は眼にあり、されど眼あれども太陽の光あらずんば見る能はじ、眼をして物を見せしむるものは太陽なり、太陽は視覺其の者にあらずと雖も、視覺によりて認め得べき視覺の原始者なり、試に汝の眼を月及び星の照らせる物體に向けば、矇朧として視覺の明瞭に諸物を見ることを得ず、されど之れを太陽の照らせる物體に向くる時、汝は明瞭に諸物を見ることを得ん。精神は眼なり、其のイデアに向ふの時、殆めて知覺し理會し得るにあらずや、

と、吾等の心をしてイデアに向はしむるの時、吾等は明かに善の知識を得て至美の生活に入るべきも、不幸にして肉體の繫縛は之れを妨げ物欲の纏綿は之れを害す、此に於てプラトーンの哲學は厭世的に傾きて肉體輕賤未來憧憬に向はざるを得ず、されど彼れは他の一面に於て出來得る限り現實生活にイデアを實現せしむるの要を說き、吾等の心をして調和の美德を有せしめざるべからざるをいふ、如何にして吾等が心を調和すべきか、他なし吾等の心には理性と情慾と肉慾とあり、此の肉慾をして理性に從屬せしめ此の情慾には適宜の訓練を加へて理性を資けしめて心生活の全面を調和するにあり、即理性の德としては智識、情慾の德としては勇氣、肉慾の德としては節制、而し

◎知見と德性

て此三德の調和を以て正義の德として四德を立て以て精神修養の綱目とし殊に第一の智識と第四の正義とを以て心內統御の二大原理とす。

ソークラテースを以て孔子に比すべくんばプラトーンは其の學相に於ても孟子と相似たるものあり、されど彼れは孟子の主として內的修養を說けるに異りて荀子のいへるが如く外的修養を說き、各個人の諸德をして完全に發達せしめんには必らず秩序ある國家の統御に待たざるべからずとし。各個人を以て全然國家に從屬すべきものとし、各個人は其の利益と快樂とを犧牲として國家に盡くすべきをいひ、理想的國家を說いて個人の敎育、結婚其の他の細故に至るまで悉く之れに干涉して以て眞の德を實現すべしといひぬ。

理想國

二　アリストテレス及び其以後の學說

プラトーンの門より出でゝ其の思索の方法を其の師と異にしプラトーンが立脚地を理想の境に置きて現實界を瞰下せるに反し、現實的なる經驗界より立論してやがて理想の境に進まんとするの趣あるものはアリストテレースなり。其の學相に於てこそ二者趣を異にすれ、其の根本思想に至つては共にソークラテースを繼承して完き德は完き知によりて得らるべしとし人性の根源を至善に置きたるや一なり。アリストテレースは先づ此の現實界に於ける生活現象を視察して其の精神に三個の階段ありと爲し最とも下等なるものは植物にしてこは唯だ營養と生殖との二作用あるのみに過ぎざれど、動物に入りては此の外に感覺と運動との二作用あり、進んで人類にありては知識作用を現らはし終に理性の指導によりて是等の諸作用を統御するに至るとし、人に於ては此の營養生殖を司る植物精神、運動感覺を司る動物精神の外に人類精神とも目すべき理性ありとし、此の理性を更に能動理性と受動理性とに分ち、受動理性は身體と共に消滅すれど能動理性は遍通不變にして神に近きものなりとて人を他の動物と拔別し、人の人たる所以は其の理性の指導する所に從ひて行動するにありと說き、德はソークラテースの云ひし如く單に智識するこ

人類の精神

能動理性と受動理性

とに於てのみ達せらるものにあらずして屢ば實行することに於て養はるべきものとし、德を知能的と行爲的との二に分ち、知能的の德は推理によりて發達せしむるものなれど行爲的の德は習慣によりて獲得せらるべきものといひ、德は知にあらず、理にあらず。意志の實踐なり修練なり、如何にして意志を修練すべきか、他なし、過不及なき中庸の德を涵養することこれなり。

意志の修練

萬般の人事は過と不及とにより誤らる。運動の過ぎたると及ばざるとは共に健康を妨げ、飮食の過と不及とは同じく身體を害する如く、節制、勇氣等の諸德に於ても亦此の如く、危難を恐れ萬事に驚くものは怯者となり、何事にも驚かず、如何なる危難をも恐れざるものは暴者となり、一切の快樂を悉く得んとするものは破廉恥漢となり、一切の快樂を悉く避けんとするものは沒情漢となる。吾等の養ふ所は此の過不及なき中庸の德ならざるべからず。

中庸

と、乃ち中庸はこれ德を成すの本たり、吾等の行動をして常に此の中庸を得せしめ慣ひ性となつて以て其の德を完からしむべし、かくて吾等は其の理想とする所の至高善の地に達して大なる幸福を享受し大なる滿足を得べしとす。

ストア學派

アリストテレースの學說は自らプラトーンと其の趣を異にすと雖も、外的修養を說き個人として孤立しては至高善を發現する能はず、必らず調和的共同生活たる國家によりて達せらるべしとするの點に於ては相互一致するを見る。

されどアリストテレース以後、希臘の國家組織は全く壞裂し其の文明も亦漸次凋落するに及び、此の如き頼他的の思想は地を拂ひて各自其の主觀の滿足によりて現實の不安を免れんとするの傾向を生じ、ストア、エピクロス等の學派を出しぬ。

ストア學派の祖をツエノーンとす。此の學派の眼中王侯なく四海悉く同胞、人は皆な等しく理性的動物たり。されば此の理性に從ひて生活するは宇宙の大法に順適し、神の法則を實現する所以なりとて常に自然に從への語を以て自律の箴とし、此の理性に背きて情慾の奴隷となる如きは自然に背反したる不德の行爲なりと說き、宇宙は漠然たる神の靈體にして人心の祕奧には此の

◎知見と德性

靈體の光を藏す、此の靈體の示す所により て以て行動し運爲す、これ即ち全品性に德行の華を開かしむる所以にして、人の目的は此の理性に從ふことによつて實現せらるゝ德にあり、如何にして此の德を涵養すべきか、他なし、

不動心

理性をして慾情を統御せしめ、精神をして中庸を得せしむるにあり、若し此の理性が其の判斷を誤らんか之れ自然に背きたるものにして精神の中庸は破れて病的狀態となり惡なるもの生ず。理性だに明かなれば何の處にか過誤あり罪惡あらん。彼の徒らに生死榮辱利害得喪の爲めに喜憂し苦樂するものは未だ此の中庸の德を養ひ得たるものにあらず、眞に此の德を養はんとす。須く情慾以外に超越して毫も外物の爲めに動かされざる不動心を養はざるべからず、不動心の涵養、これ實に此の派修養の根本義なり。

其の言ふ所此の如きを以て其歸趣する所、頗る陸王の心即理說に類す此の派の學者として有名なる羅馬のマアカス、アウレリアスは明に人性を語りて、汝、自ら省みて汝を包める肉體と之れに付屬せる機關とを以て自己なりと見る勿れ、こはたゞ器具のみ、彼の織女の梭と同じく、書家の筆と同じく、

理性

又御者の鞭と同じく、之れを動かし之れを止むべき力の加はるにあらずんば何等の用をも爲す能はじ。

寂靜心（アタラクシヤ）

フイーロン

といひ、さて其の力を解して理性に外ならずとし、其の特色を擧げて

理性は宇宙の全體を超越して萬物を包容す、理性の示す所に從ふに吾等の後に生じ來る事物も新たなるはなく、吾等の前に生せる事物も亦今と異るなし。

といふ如き、頗る陸王の面目を偲ばしむ。

ストア學派と時を同うして行はれたるエピクロス派も亦主觀的にして肉欲上の快樂を乘てゝ精神上の快樂を旨とし心を平靜ならしめて滿然水の如くならしむる寂靜心の涵養を以て修養の第一義と見、新アカデーミヤ學派も亦心の平靜これ吾人の眞幸福なりと說き、少しく後れてフイローン（折衷學派）出でプローテイノス（新プラトーン派）出づるに及びて其の說は稍々神祕的傾向を帶び來りぬ。フイローンは此の宇宙を以て神と物質との對立とし、神は光明にして物質は闇黑なり、神が此の闇黑なる物質に光を與ふるには「ロゴス」なる

◎知見と德性

媒介物あり、「ロゴス」は神の語（ことば）にして猶ほ太陽より發散したる光線の如く神より出でたる神の思想なり、萬物は此の「ロゴス」によりて整然たる秩序を得、人性中にも此の「ロゴス」あり、これを天賦の理性とす。人は皆一面此の神より得たる理性を具ふると共に他面に於て物質に繫がれてこゝに情欲あり、されば此の物質の繫縛を脫して神より得たる眞正の智識によりて情慾を斷離し無念無想の恍惚境（エクスタシス）に住するを以て修養の道を說き、プローテイノスも亦萬物は神より迸り出でたるものにして神に近きものは完全なれど神を離るゝ遠きに從ひて不完全たるを免れず、吾等の精神は神に近ければ物質は神を去ること遠ければ此の物質界の欲を制して心靈の滿足を望み、凡ての思想を超越したる恍惚境（エクスタシス）に入りこゝに神人一致の怡悅を得べしといふ、希臘哲學の人性研究はこゝに至りて全く宗教と一致し來れりといふべきか、請ふ次章に於て論議せしめよ。」

恍惚境

プローテイノス

第四章　罪惡の起源

一　罪惡と自由意志

人性の思索

支那に於ける人性研究は性の善惡に發揮して漸次に心性の本源に遡り程朱陸王に至ては巧みに佛教の所說を融和し來りて其の根底の宇宙の妙理と脈絡貫通するを言はざるを得ざるに至り。希臘に於ける人性研究はソークラテースの汝自身を知れの一語に起りて知即德の研究はプラトーン、アリストテレースを經て理性の來由を辿りストア。エピクロスよりフイローン、プロティノスに入りて終に之れを神に歸せざるを得ざるに至り、未知に初りて知に半ばしたる人性の思索は遂に不可知に終りて之れを神といひ、佛といひ、天といひ理といふ絶對神祕の靈體に其の根底を置かざるを得ざるに至りぬ。既に其の根底を絶對神祕の靈體に置く、然らば人性の本源は絶對善ならざるべからず。既に絶對善ならば何が故に人生に罪惡なるもの存するか、此の問題にして解

◎罪惡の起源　七一

◎罪惡と自由意志

決せられずんば性善説は未だ遽かに首肯する能はざるなり、罪惡は如何にして生ずる此の問題を客觀的に解釋せるものを基督教とし、主觀的に說明するものを佛教とす。先づ其の客觀的解釋を見ん。

神と宛

ゾロアスター

人の眼は先づ外に向つて而して後、徐ろに內に向ふ、古代民族は眼を上げて客觀世界の千狀萬態にして而かも秩序整然たるを見て、其の靈妙なるに驚き不可知神祕の神の顯現なりと思惟すると共に、時に大破壞の其の間に行はれ大暴力の加はるを見て魔の顯現なりと考へざるを得ず。融々たる春光に神の恩寵を感謝したる彼等は疾風迅雷を目して魔の跳梁なりとして恐れざるを得ず、神と魔との二思想は密接不離の關係を爲し宇宙は此の二者の爭闘軋轢に外ならずと觀察して、こゝに善惡二神の存在を想像したるものは有名なるゾロアスター敎にして此の敎に於ては善神オルムヅを以て宇宙の創造者、支持者、保護者、防禦者にして善行の完成者として之れを仰ぐと共に惡神アーリマンは宇宙を破壞し人生を蠹毒する禍害の權化なりとして之れを恐れ、正意と正語と正行とを以て働くことによりて此の禍害より脫離し得べしと思惟したり。今云はんとする基督敎並に其の祖たる猶太敎も純然たる一神敎にしてゾロアスターの敎義と全然其の趣を異にすといへども亦太古民人思想の形式として二元的傾向を免れずして、「以塞亞書」には其の一神エホバを以て

猶太敎

サタン

我は光を造り、又くらきを創造す、我は平和を造り、又毒害を創造す、我はエホバなり、我凡て此等の事を爲す

と見て其の崇敬の中心たるエホバにも此の善惡の二性を具すとし、惡魔サタンをも亦エホバ幕下の一臣僚にして神に對する信仰の厚薄を試みる天の使の如くに感じたりしなり。かゝる二元の思想は其の原罪に關する傳說に於ても認むることを得べし。創世記は先づ人類の始源を以て神のアダム、イブの男女を造りたまひしにありとし、神は此の二人をエデンの樂園に置きたまひしに、

原罪

エホバ神の造り給ひし野の生物の中に蛇最も狡猾し、蛇、婦に言ひけるは、神

◎罪惡の起源

◉罪惡と自由意志

眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言い給ひしや、婦、蛇に言ひけるは、我等園の果を食ふことを得、されど園の中央に在る樹の果實をば神、汝等之を食ふべからず、又之れを捫るべからず、恐くは汝等死なんと言ひ給へり。蛇、婦に言ひけるは汝等必ず死することあらん、神、汝等が之を食ふ日には汝等の目開け、汝等神の如く爲りて善惡を知るに至るを知りたまふなりと、婦、樹を見れば食に善く目に美麗しく、且智慧から人が爲に慕はしき樹なるによりて遂に其の果實を取りて食ひ、亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり、是に於て彼等の目、俱に開きて彼等其の裸體なるを知り、乃ち無花果樹の葉を綴り裳を作れり、彼等園の中に日の清涼き時分歩み給ふエホバ神の聲を聞きしかば、アダムと其の妻即ち樹の間に身を匿せり、エホバ神、アダムを召て之れに言ひ給ひけるは汝は何處に居るや、彼いひけるは我が園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと。エホバ言ひたまひけるは、誰か汝の裸なるを汝に告しや、汝は我が汝に食ふ勿れと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言ひけるは汝が與へて我と偕ならしめたまひし婦、彼に其の樹の果實を我に與へたれば我食へりと、エホバ神、婦に言ひたまひけるは汝が爲したる此事は何ぞや、婦言ける、蛇、我を誘惑して我食へりと、エホバ神、蛇に言ひたまひけるは汝是を爲したるに因て汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて呪はる、汝は腹行して一生の間、塵を食ふべし、又我、汝と婦との間及び汝の苗裔と婦の苗裔との間に總

恨を置かん、彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん、又婦に言ひ給ひけるは、我大に汝の懷姙の勞を增すべし、汝は苦みて子を產まん、又汝は夫を慕ひ彼は汝を治めん、又アダムに言ひたまひけるは汝その妻の言を聽て我が汝に命じて食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしに由りて土は汝の爲めに呪はる。汝は一生の間勞苦して其より食を得ん

と。これを猶太の原罪説とす、此の系統を引ける基督教も亦此の原罪説を繼承し人類の祖先既に神の命に背きて罪を犯せるが故に其の子孫たるものも亦罪の子として責罰を受くるを免れず、悲哉、吾等は祖先の罪業に縛せられて永劫に其の苛責を受けざるべからず。嗚呼如何にして此の苛責を免るべきか、こゝに曠世の聖人耶蘇基督なるものあり自ら神の子と生れ普く人類に代りて其の罪の報を受け十字架上の露と消えぬ。吾等は此の基督に縋り此の基督に依ることによつて始めて救はるべしとの教義を以て立教の基礎として從來、神と人との關係を以て恐怖に置きたりし猶太思想を一變して愛の福音を説き吾等人類が永劫の苛責より遁れて救はるゝは神の恩寵に外ならねば、吾等は先づ此の身の罪多きことを自覺し、此の罪多き身の當然受くべき責罰を免れ得

◉罪惡の起源

◎罪惡と自由意志

るは偏へに神の冥助に依るべきを確信し、且つ神が此の罪多き身に冥助を垂れたまふは基督が吾等に代りて受けたまひし苦痛と吾等が基督に對する誠忠の情とによるものなりとし渾身の愛を神と基督とに捧げ、神は一切人類を愛し給ひ各人類は亦基督と同一人性を有するものなれば吾等も亦神基督とに對する愛を普く人類に及ぼし此の信と愛との力を以て罪業多き吾等の前途にも輝ける希望の光を認め得べしとし信、愛、望の三者を以て基督教道徳の三要素と立て、以て修養の根本となしたり。

信、愛、望

彼等は此の世を以て惡魔の治下とし吾等を以て罪惡の子とせるが故に敬虔なる中世の基督教徒は痛切に我が心の脆弱にして迷惑多きを感じ熱心に之れを免れんことを計り日夜、自ら省みて自尊の行爲なかりしや貪慾憤怒の念なかりしや、嫉妬矜驕の心なかりしやを責め、罪を分ちて當死罪(Deadly sin)と當釋罪(Nenial sin)とし、前者は一定の教規により懺悔し懲誡するの苦楚を經るにあらざれば永劫の墮獄より脫れ難き重大の罪をいひ、後者は祈禱施與等によりて保釋し得らるべき罪を指し、教會はこれらの罪によりて各々其の滅罪の

當死罪
當釋罪

形式を定め或る罪は三日以上の斷食を要し、或る罪は生涯の懺悔を要する等煩鎖なる教條を設け法律的に外より其の罪を犯さゞらしめんとするに至りぬ。

內心の正

中世の基督教徒は一面に於てかゝる教條を設けて外より其の精神を修養すると共に又基督教道德の骨髓たる內心の正(Inwardness)を維持することを努め吾等が正を求め善を望む心を以て神に向ひつゝあるものとし眞に神を愛するものは神を憧憬して忘我の境に入り、こゝに靈の眼開けて神の姿を見るに至らざるべからずとし靜座冥想の要を說きて內的修養を爲すの一面を有しき。

基督教が罪惡を觀じ且つ之れが解脫の方法として說ける所は略ぼ上述の如きも、是等の根本には尙ほ一問題の遺れるものあり。若し夫れ這般基督教徒の云ふ如く吾等を以て祖先アダム以來免れ難き罪業を遺傳し來れりとせば吾等が惡を爲すはこれ先天的必然性のものにして盖し已むを得ざるに出づ、吾等の惡行爲にして已むを得ざるに出づるものとせば吾等は何故に自ら其の責に任せざるべからざるか、人に自由の意志ありて隨意に善を撰び惡を撰ぶことを得るとなすにあらずんば善の賞せられ惡の罰せらるべき理由なきにあら

◎罪惡の起源

アウグスティーヌスとペラギウス

アンセルムス

ずや。自由意志の有無これ實に中世基督教神學主要の問題にして修養の根本義も亦此の解決によつて定められざるべからず。

上に掲げたる原罪の論議は主として教父哲學の泰斗と云はれたるアウグスティーヌスの所説を擧げたるものにして彼れは人に若し先天的罪業なくんば人は救はるゝの必要なくして基督の救世も意義なきに了ると見たれども、英吉利の僧侶ペラギウスは此の宿命的必至論に反して自由意志の説を立て、人には善を撰び惡を避くるの自由あり、此の自由あるが故に自から善を作して神の惠を受くるを得るものにして若しアウグスティーヌスの如く自から善を爲し得るの力なしとせば人は道德上に於て無責任のものとならざるべからずといひ、下つてアンセルムスに至ては此の自由の意義を究めて人に自由なしといふは其の罪の子たりといふ點に於て斯くいふのみにして必らずしも吾等に善を意識するの力なしといふにはあらず、始祖アダムが罪を犯せしより吾等が善を爲すの力は衰へて常に惡に向ふと雖も、未だ全く其の力の失せたるにはあらずして、一種の潛勢力となりて人性の中に藏れ、神の惠みを得て顯は

アベラルドウス

トマス、アクイヌス

ドゥンス、スコートス

るゝものと說き、次でアベラルドウス出でて吾等が祖先より遺傳し來れる罪即ち惡を作くる性向は未だ以て眞の罪といふべきものにあらず、又唯だ外部に現はれたる結果のみを以て罪と目すべきものにあらず、眞の罪は自己が惡なりと意識して行動する內的動機にあり、動機にして善ならば結果を問ふ所にあらずとして意志の自由をいひ基督教を合理化せしめんと努力したるスコラ哲學の曉將たるトマス、アクイヌスも亦吾等は自然の合理的欲求によりて善を求め自から理性の洞察によりて其の爲すべき行を決定し得るものとして意志の自由をいひ、しかも其の理性の指示する所に從ひ善を思惟し善を行ひ得るは神の惠にありとして基督教の信仰と調和し此の自由意志と神の惠みとによりて眞の福祉を得らるべしと說く、トマス、アクイヌスの說はアウグスティーヌスの人は先天的に罪惡ありと見たれど、そを全く神の惠みに歸したるが故に幾分の制限を意志の自由に置けるものといふべきか、これに對して絕對的自由說を立てたるものをドゥンス、スコートスとす。彼れは吾等の行動を以て惡にのみ向ふべきものと

◉罪惡の起源

も亦合理的欲求に驅られて善にのみ傾くべきものとも見ずして、善惡共に隨意選擇し得べきものなりとす、甲是、乙非、暫く之れを後章の解決に讓り、眼を轉じて罪惡の起源を主觀的に考察せる佛敎の所說を窺はん。

二　佛性と罪惡

佛敎の罪惡を論ずる大小乘其の見を異にし原始的なる小乘佛敎に於ては吾等が罪惡の緣由を以て全く過去の宿業に外ならずとし、眞理に明かならざる無明煩惱によりて動作し思念する所の過去の所業は引て現在の苦果となり、こゝに免れ難き罪惡の繫縛を受け、其の繫縛の中に於て行動する現在の所業は又以て未來の苦果を招くの因たるべしとて善惡應報三世因果の大道を明にし、一切の生類を十個の階段に分ちて、其の中、佛、菩薩、緣覺、聲聞を四聖と呼びて罪惡なきの境とし、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄を六凡と

四聖六凡　宿業

いひて罪惡の卷に沈淪するものとし、更に此の六凡の中、天上は惡少くして善多く、人間は善惡相半ばし、他の四は惡多くして善少く、地獄に至ては罪惡の極趣と爲し、皆な過去の宿業に於て受くべき當然の結果なりとて惑は業を生じ、業によつて苦を招く、此の三輾轉極りなきこと汲井輪の如きものなれば、吾等は此の罪惡の根本たる惑を斷じ以て當來の苦を免るゝ涅槃の境に入らざるべからずと說く、大乘の初門たる唯識の敎義に於ては此の惑の根本を以て吾等が心性の源たる阿賴耶識の上に生じたる末那識の命に出づるとし、進んで實大乘に入りては阿賴耶を以て宇宙の根底、人心の秘奧たる眞如の一轉し來れるものとし、淸淨無垢の眞如海上に無明煩惱の風戰ぎてこゝに妄念の波起り一波動きて千波萬波之れに伴ひ、終に罪惡に罪惡を重ぬるに至るものと示し、大乘起信論には其の起源を示して

心性は常に念なし、故に名けて不變と爲す、一法界に達せざるを以ての故に、心相應せず、忽然として念起るを無明と爲す

と、心性もと眞如に出で淸淨にして不變なり、唯だ此の眞如法界平等の一理

◎罪惡の起源

熏習

に通達せざるが故に心相應せず、忽然として差別の妄念を生ず、忽然念起の四字は實に無明の起原を盡くせるの言たり、眞如平等の心性、こゝに無明の香を止めて妄想の心を生じ、妄想によりて妄境界を生じ、妄境界によりて執着の心を起し一點微小の心火燃えて全身を燒き盡くすが如く、宇宙の眞理と脈絡貫通せる此の心の一隅に、我他の區別を生せしより我を執し他を斥くるの念となりて自ら罪業に縛せらるゝに至る。實にや忽然として起りし此一念こそ無明煩惱の源泉たるなれ、佛敎は此の經過を說くに身に惡臭の熏ずるが如しとして熏習の二字を用ひ、無明の眞如に熏習して妄心を生ずるを無明熏習といひ、其の妄心が更に無明に反熏して妄境界を生ずるを妄心熏習といひ、此の妄境界又妄心に反熏して終に執着の心を生ずるを妄境界熏習といひ、

熏習の義とは世間の衣服實に香なし、若し人、香を以て熏習するが故に香氣あるが如し、これ亦此の如し、眞如の淨法は實に染なし、但だ無明を以て熏習するの故に則ち染相ある、無明の染法は實に淨業なし、但だ眞如を以ての故に淨用あり

悉有佛性

と說き、眞如熏じて惑となり、惑に由て業を生じ業によりて苦を生ずること猶ほ次の如しとす。

無明
眞如 ← 無明熏習
妄心
無明 ← 妄心熏習
妄境界
妄心 ← 妄境界熏習
執着心

惑→業→苦

客觀的に見たる基督敎に於て吾等の祖先は神より出でて純潔なりしと見る如く、主觀的に考察したる佛敎に於ても其の心性の本源を以て眞如平等諸佛と相同じきものなりしが、忽然としてサタンの魔風に吹き荒されて終に罪の子となると說く、終に罪の子となる、されど其の初めや佛と相同じ、此に於て佛敎は人性の根本を以て一切衆生悉有佛性に置き、梵網經には

性德と修德

汝は是れ當成の佛、吾は是れ已成の佛、

と示して佛と衆生と二あるにあらず、今は暫く其の相を異にすと雖も、其の本源に遡れば共に佛たるの性格を有するものなれば、吾等が心裏の奥底には常に佛陀無限の靈光を藏し、一たび無明の闇を破りて智眼明かに德行圓かならんか、吾等は直に佛陀と其の資格を同うするを得べしとし、其の先天的内在的に有するものを性德といひ、其の潛めるを顯はし其の隱れたるを開き其の曇れるを磨きて本來の性を發揮するを修德といふも、性修もと不二、性あるが故に修も功あり、修あるが故に性も亦現はる、濁は本有といへども全體これ清し。

濁惡の吾等の本心には清淨の佛性あれば、永嘉大師は

無明實性卽佛性、幻化空身卽佛身
覺了法身無一物、本來自性天眞佛

といひ、實大乘の極義としては敢て煩惱を斷離するに及ばず、毒を變じて藥とし、鐵を點じて金と爲す、不斷煩惱得涅槃といひ、密敎に於ては父母所生

身卽證大覺位とて吾等が肉身そのまゝに大覺者たる佛陀の位を證すべしと說き、各宗各派言議多端なりといへども、所詮は一切衆生悉有佛性の觀にあらざるなし、されば其の修養を說くに當ては自力各宗に於ては吾等の本來に此の佛性の存すべきことを第一義として之れの徹見と發揮とを旨とし、佛陀の敎示によりて道義を實行(戒)し靜思冥想して內在的の佛性を求め(定)智見を明かにして(慧)迷惑の境に陷らざらしめんことを計り、華嚴經には

爾の時、如來、無障礙淸淨の智眼を以て普く法界一切の衆生を觀じたまふて、是の言を作したまはく、奇なる哉、奇なる哉、此の諸の衆生如何にしてか、如來の智慧を具有しながら、呆痴迷惑して知らず見ざる、我れ正に敎ふるに聖道を以てし、其れをして永く妄想執着を離れしめ、自ら身中に於て如來廣大の智慧、佛と異るなきを見せしむべし、卽ち彼の衆生をして聖道を修習し妄想を離れしめん、妄想離れ已むで如來の智慧を證せん。

と、妄想の雲を離れて智慧の光を見せしむるこれ佛敎の要なり、黃蘗の「傳心法要」にいふ、

◉卽惡の起源

◎佛性と罪惡

此の本源清淨心、常に自ら圓明にして偏く照らすも世人悟らず、只だ見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知に覆はれて清明の本體を見ず。

といひ、プラトーンが心性の本源を遠くイデアの理想境に求め、吾等が善を望み眞を求め美にあこがるゝを以てイデアに對する追慕憧憬の情と見たるが如く、佛性たる眞如は吾等をして吾等の罪惡を自覺して善に向はしむるの用ありとて、前に擧げたる大乘起信論には之れを眞如内熏の力といひ、既に此の内熏の力に動かされて智眼漸く明かならんとして眞善美を求むるやこゝに吾等の妄心は又動て眞如に向ひ内外相應じて終に涅槃解脫の境に入るとし、其の眞如の内より動くを内熏といひ、妄心の眞如に向ふを外熏とす、

眞如 ← 妄心 ← 眞如　内熏 外熏　得涅槃

吾等が道に志すは眞如内熏の力にして内に潛める佛性の湧然として迸り出でんとするの傾きとも見るべく、其の之れに達せんとする一切の修行は皆な

これ妄心の眞如に向ふ外熏の作用とも云ふべきか、

眞如に此の内熏の力ありと雖も、迷妄の雲深く其の光を翳ざせる吾等の身は自ら其の光を尋ぬる能はず、偶ま道に志すも其の力弱くして之れを遂ぐる能はず、知らず識らず罪惡の巷に沈淪して生死浮沈の苦を受く、佛之れを愍みて解脫の大道を開示し一切衆生を救はんとしたまふ、されば吾等は此の佛の力に縋り其の光明に攝取せられて初めて離苦得樂の境に入るべし、之れ宗教としての佛教成立の根底にして唯だ信能く之れを遂ぐとし、信は道の元、功德の母

と爲す

一切の諸の功德は信を以て使命と爲す、諸の寶の中に於て信の財を最第一

（大莊嚴經）

一切の行は信を以て首と爲す、衆德の根本なり

（梵網經）

とし、他力を說くの宗派に於ては此の信を唯一解脫の道として敎義を建立し、吾等罪惡に迷へる凡夫の心、もとより佛に向ふ素質あるべきにあらねば、此の信の一念も皆な之れ佛陀無限の大慈によりて惠まれたるものに外ならずと

◎罪惡の起源

自力と他力

し彼の自力諸宗が其の源に遡りて本具佛性をいふに反し、吾等が現在の心に着眼して殆んど性惡說とも見るべき說を立て善に向ふべき意志の自由をも缺如する如くに立言し、ひたすらに佛に依附し信賴せしめんとす、「眞宗敎要鈔」にいふ、

信心とはまことのこゝろとよむなり、行者の方に起す故に我が心より起ると思へども、もと如來の御心よりおこさしめ給ふなり、もし行者の心といはゞ僞り曲りてかたましければまことの心とは申し難し如來のすぐなる御心なるが故にまことの心とは申すなり、

僞り曲りてかたましきは吾等が心なり、唯だ佛に賴りてのみ救はるゝことを得、此の點に於て佛敎も亦基督敎と同一見地に立つと見るべきか、蓋し佛敎高遠にして各派の敎義も一ならず、其の罪惡斷離の方法も各宗其の見を異にし事に輕重ありと雖も、要するに自力に屬する宗派(天臺華言、眞言禪の如き)の立言は哲學的倫理的にして支那希臘諸賢の說に似通ひ他力に屬する宗派(淨土、眞宗の如き)の立言は全然宗敎的にして基督敎の言ふ所と相類するの傾きあり、前者は本性の淨善なることに注目せしめんとし、後者は今の心の濁惡なることを自覺せしめんとす。大道二義なく達者途を同うす、去て他の問題に向はむ。

「燈は念々に滅すと雖も、而も光明ありて闇冥を除き破る、道を修するも亦此の如し。（涅槃經）

人を議(はか)ること勿れ、さらば爾曹も議られず、人を罪すること勿れ、さらば爾曹も罪せられず人を恕せ、さらば爾曹も恕さるべし」（路加傳）

第五章　自由意志

一　宿命と自由意志

定業と自由

佛性本具の吾等も今は宿業に縛られて出離の途なく、神の子たりしアダムの子孫も今は罪の子となりて墮落の淵に沈む。吾等の意志は自由なりと見るべきが、將た不自由なりと觀ずべきか、其の論議は暫く後段に讓るも、一切の宗教が其の成立の根底に於て幾多意志の自由を制限し神の豫定を說き宿業の免れ難きをいふの一事は一應の觀察を要すべきことにあらずや、三世因果を標榜せる佛敎は、

前世の因を知らんと欲せば則ち今世に受くる所のもの之れなり、後世の果を知らんと欲せば則ち今生の爲す所これなり。（因果經）

といひ、現世に於ける運命を以て前世の業因に歸し、

深山洞穴といへども、世界中定業を免るゝ所なし。（法句經）

神の豫定

回々敎の宿命說

といひて宿業の如何とも爲し難きを說き、神の豫定に立つ基督敎は宇宙萬象悉く神の攝理にあらざるはなく、

我が天の父の植えたるものは皆な拔るべし。（馬太傳）

といひ、救世主基督の出現も亦神の豫定に外ならずとし、

我は神より出で來ればなり、夫れ吾は己れに由て來るにあらず、神、吾を遣し給へるなり。（約翰傳）

と示し、馬太傳には

二羽の雀は一錢にて售るにあらずや、然るに爾神の父の許なくんば其の一羽も地に陷ることあらず。

と說く、飛禽走獸、何者が神意ならざる、宿業に縛られ神意に左右せらる、何の所にか意志の自由ある。回々敎に於ては更に深く此の宿命の說を信じ、コーラン經に於て

人事は皆な神意によりて人爲の如何とも爲す能はざる所なり」

といひ、

◎自由意志

誰か一定の運命を左右するの權能あらんや、死は高塔に坐するも之れを避くべからず、天地未だ開けざる前、上帝既に各人の命數を定めたまへり、と爲し、支那に於ては宿命を信ずること最も甚しく、人事は天象を以てトすべしとして陰陽の兩儀より乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八卦を劃し以て萬象觀察の標準とし、易の繫辭傳には「聖人、卦を設けて象を觀じ、辭を繫ぎて吉凶を明す、」といひ、「天地位を設けて而して易其の中に行はる、成性存々道義の門なり」と說き、木、火、土、金、水の五行を以て萬物運用の根本とし、此の氣に順ふものは福を得、之れに逆ふものは禍を招ぐと示し、五行によりて甲子を生ず、

易　十干十二支

「劉氏通鑑外紀」にいふ、

黃帝、大撓に命じて五行の情を採り、始めて甲子を作る、甲乙(木)丙丁(火)戊己(土)庚辛(金)壬癸(水)、これを幹といふ、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、これを枝といふ、枝幹相配して以て日に名く

と、此の十干十二支によりて人の運命を卜し時間的には生年月により空間的には方位に配して其の吉凶を定め、人の一生を以て先天的に定められたる天命以外一歩も出る能はざるものとす。かくては意志の自由なるものは全然失はれて人の道德的責任は歸するに由なく、善に就き惡を去るの修養も何の意義なき閑事業たらんとす。明の袁了凡が陰隲錄は自己の閱歷を陳べて能く宿命說の妄を辨ず、請ふ其の行實を摘錄せしめよ。

袁了凡、幼にし父を失ひ、母の勸めにより醫を學びて衣食の道を得んとし、偶ま一老翁の白髯長く飄々仙の如きに遇ふ、老翁、凡を熟視して、「吾は姓を孔といひ、易の正傳を得たり、百發百中、千に一を誤らず、試に子をトするに子はこれ仕を求むるの人、須く醫を廢して書を讀め、鄉學にては第十四席、郡學にては第七十二席、國學にては第九席を占め、某の年より某の年までは何程の扶持を受くべく、其の後、四川の知事となり政務に從事すること二年有餘にして歸京すべし。其の死するは五十三歲八月十四日丑の時に當る、惜むらくは子なきの一事なりと、凡、これを錄して一生の覺悟を定め老翁の言を實際に徵するに符節を合するが如し、進退命あり遽かに改むべからずと深く宿命の說を信す、後、南雍に遊び、棲霞寺に雲谷禪

◎宿命と自由意志

師を訪ふ、禪師、丁凡が宿命の說を信ずるを笑ひ、喝破していふ、

愚なる哉、汝、二十年來、命數に縛せられ了んぬ。

と、丁凡膝を進めていふ、

命數、得て逃るべきか、

雲谷曰く

然り、禍福門なし、唯だ自ら招く所、汝孔公の算定に從ひ官は知事に止り命は五十三歲を限り、又子あることなしとなすか。

丁凡曰く

然り、予や薄福、功を積み德を累ぬること能はず、直情徑行、輕言妄談、如何か高位に上り得べき、且つ水淸ければ魚なし子、淸潔を好む、これ子なかるべき理の一なり、和氣能く萬物を育す、予怒り多しこれ子なかるべき理の二なり、愛は生々の本たり、予己を捨てゝ人を救ふ能はずこれ子なかるべき理の三なり、其の他、多言氣を損じ、暴飮精を害ひ、徹夜、神を亂す等過惡多し

雲谷、聽き了りていふ、

汝、今、己れの非を知りて痩す所なし、これ福に轉ずるの徵なり、されは務めて德を積まんことを要せよ、汝が從前の積惡昨日死するが如く、從後の積善は今日生るが如し、天の作せる孽は猶ほ避くべし、自ら作せる孽は避くべからず、孔生が汝、高位に上らず、子を生まずと算したるはこれ天の作せる孽に過ぎざれば猶ほ避くべし、汝、今より德性を磨き善行を務めばこれ自から作るの福なり、何ぞ得て受けざらん

と丁凡深く其の言を偉なりとし直に往日の罪を懺悔し善事を力めしかば、孔公の算には五十三歲といひし死期をも過ぎ鑑鑠として壯心未だ衰へず云

云

命は天にあらずして我にあり。此の一話能く宿命說の妄を破るものにあらずや、然らば意志は絕對的に自由にして宿命に於て制限せらるゝことなきか、

曰く然り、曰く然らず。吾等の行動の常に何者にか掣肘せられつゝあるは事實にして、吾等の思念が自由自在なるも亦否定すべからず、更に精細の思索

◎自由意志

を費すにあらずんば遽かに此の問題を決すべからず。

二　自由意志と人格

ポーロが「義人なし、一人もあるなし、人皆な既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、唯だキリスト、イエスの贖によりて神の惠を受け、功なくして義とせらるゝなり」といへるに萠し、アウグステーヌスの原罪説となりて確認せられたる基督教の意志必至、宿命的定道論は幾たびか自由意志説と戰ひて中世哲學の中堅問題となり來りしことは前章既に叙述するところのごとし、其の後、哲學漸く宗教の羈絆を脱し近世に入りても此の問題は依然として倫理問題の要點となりて近世哲學の唱首と稱せらるゝデカルトは意志必志、宿命的定道論に傾きし中世哲學の主張に反して全然意志の自由なるべきを揚言し、道德は神の命令にして之れに從ふと從はざるとは吾人の自由

デカルトの意志自由説

スピノーザの意志必至説

ライプニッツの制限的自由説

カントの批判

なり。人の神と相似たるは繫りて此の自由の存するにありといへり、されどデカルトの云へる自由は絶對放任の自由にあらずして其の眞なり善なり美なりと思惟する智識に於て行ふの自由なりと爲すものなれば、其の修養は主として智的にして先づ理智の明を味ますの情を卻け、意志をして罪惡の根源たる情の奴隷たらざらしむるにありと説き。スピノーザは此の意志自由説に反して人の一切の動作は悉く神の顯現にして吾人の一作一動は皆な自然の理法に纏縛せられつゝあるものなればこれ一歩も其の以外に出る能はざるものたり。されば人は此の自然法に服從してこそ至上善と云ふべけれとて天地の大法を仰ぎ永恒一如の本體を靜觀して我が本性を完うすべき寂靜主義を説き。其の他ライプニッツは此の二者を排して制限的自由説を採り、意志は其れ自身絶對的に自由なるにあらずして其の理性の指示し想念の活動する範圍内に於ては自由なるべしといふ等幾多の論議を經て恰かも百川の大海に朝宗するが如く精到なる批判と深遠なる考索とを以て近世哲學のオーソリティたるイマニュル、カントに入れり。自由意志に關するカントの思想は頗る穩健なり、彼れ

は先づ純粋理性に於て吾等の智識を以て全然人類生具の自性より發するものなりとせる主心派と、我が心は白紙の如く外界より來る經驗によりて智識を成すといへる經驗派とを批判し統合して、かゝる外來の經驗と素材を我が心の本具の形式に收めて初めて智識たるべきものなれば吾等の智識は其の經驗し得る現象界にのみ限られて其の現象の根底たる實體界に於ては何等の智識だも得る能はざるものとし、智識の對境たる現象界に於ては凡べての事物は悉く相對差別にして絶對善を認めず、悉く機械的必然の關係に支配せられて毫も自由なる形跡を存せざれど、吾等が自然の道德的要求としては絶對の善を望み意志の自由を思ふ、こはこれ超然經驗現象の界を超へたる實體界の上に根據を有する實踐理性の要求なりとし、

凡て此の世に於て又此の世以外何れの處に於ても無制限に善と云はるべきものあるなし、其の之れあるは唯だ善意のみ

といひ、善意を以て普遍の法則にありとし

我が行爲の法則が同時に萬人に通ずる普遍の法則と意志し得る法則にのみ

從ふて行動せよ

といひ、此の普遍の法則を以て實體界の太源より流れ出でたる無上大法の命令とす、吾等にして唯だ此の理性の存するのみならんには唯々諾々、無上大法の命を奉じて之れに違はざること恰かも自然界一切の現象が因果必至の法則に從ふが如くなるべけれど吾等の心には理性の外に感性なるものありて幾多の情欲を有するが故に、動もすれば其の爲めに囚はれて此の命令に違却し不義の渦中に陷らんとす、これ我が實踐理性は命を下して之れを止めんとし、こゝに意思自由存在の根據を築く、若し夫れ吾等の意志にして不自由のものたらんか、吾等は此の命に從はずと欲するも能はざるべし、此に於ては彼れいふ、「我れ爲し能ふ、何となれば我れは當に爲すべきものなればなり」と、當に爲すべき命令の存するは之れ爲し能ふの自由あるが故にあらずや。

カントは現象界と實體界とを峻別し自然法と道德法とを分ち現象界に行はるゝ自然法は必然的關係に支配せらるべけれど、實體界に根底を有せる道德法は其れ自身に於て自由なりとし、吾等は其の普遍的なりと意志し得る法則

に從ひて行動し、かく意志し得すば行動すべからずと敎へ、此法則に從ふの意志は其れ自身尊重すべきものにして敢て他の目的によりて評價せらるゝものにあらず、意志は其れ自身を目的とするの意思を有するものを人格といひ、こを他によりて評價せらるゝ物品價格（Price）と分ちて品位（Dignity）といひぬ、人は自己の中に自己が終極の目的を有し終極の價値を有す、これを發揮する上に修養の功は存するにあらずや。

人格と品位

ヘツケルの意志不自由說

カント以後に於ても自由意志の論議は止みたるにあらずして現象界に重きを置く唯物論經驗論の主張は意思不自由說を唱へた、

今日吾人の見る所を以てすれば意志の作用は一切自餘の心的活動と同じく、其の個體の身體構成によりて定り、又時々刻々の外圍境遇によりて定まるものにして、努力の性質は夙に父祖より遺傳せられて定り、一々の行動に對する決定は刹下の境遇に對する順應にて定り、此の順應は最強の動機に從て行はれ、動機の强弱は感情界に行はるゝ法則に從ふものなり（ヘッケル「宇宙の謎」）

パウルゼンの自由意志說

といひ、經驗以上に思索を運らす唯心論合理論の主張は意志自由說にして、動物の活動は目前の衝動並に感情感覺等によりて定められて思慮、疑惑、決意等の暇なけれど人間に至りては決意によりて其の行爲を定む、其の決意は思慮の結果にして其の初め多くの可能的行爲を自己の目的と見合せて其の適當なるものを選ぶにあらばいふべし（パウルゼン「倫理學原理」）

と、相互其の主張を異にすと雖も、之れ必らずしも調和せられざるにあらず。事物を客觀的に査究する科學者の見地より視れば宇宙萬象は悉く必然の理法に支配せられ吾等が心理的現象も亦それ〳〵必然の理法に拘縛せられて一步も其の外に出づる能はざるべけれど、暫く主觀の思索に任じて吾等が一事を爲さんとする當時の心的狀態を思へ、諸種の想念は競ひ起つて右せんか左せんか、凡て吾等が任意の選擇に委ねられたるが如く感せらるゝにあらずや、如何に必然の理法のみなりと主張するの人々も日常の些事、例へば花を墨堤に探らんか、月を東臺に眺めんかといへることにも何等の自由なくして必然

花を採るべく定められたり月を眺むべく定められたりとは思惟し能はざるべく、起たんか坐せんかとの自由だも吾等に存せじとは思ひ能はざるべく、如何に意志の自由を唱道する人々も自然の法則を無視して渇して水を需めず、餓えて食を求めずとはいひ能はざるべく、況んや羽なくして天空を翔り、船なくして水上を行くをや。吾等の自由には制限あり、吾等の不自由にも程度あり、吾等の足の地を離れざるが如く吾等は靠に必然の理法に支配せられ、吾等の眼の遠く天を望むが如く吾等は意志の自由を有す、吾等の肉の獣と相距る遠からざるが如く吾等は自然の衝動によりて行爲し、吾等の靈の神に近づくべきが如く吾等は又別に自由の決意によりて動く、まことやトルストイのいへる如く「吾等の行爲は皆な自由と必然との調和より成るものにして、如何なる行爲にても、一々に之れを吟味したらんには必らず自由の或る分量と必然の或る分量とを有するを發見せずんばあらず、而して必然の度大なるに從ひて自由の度小に、自由の度大なるに從ひて必然の度小に、此の二は反比例を成す」單に必然の理法のみを見て意志不自由と云はんとするものは人

性の自然に戻り、唯だ意志の自由をいふて必然の理法を無視せんとするものも亦日常の經驗に反す。

想ふに他の動物は目前の衝動並に感情感覺に動かされて運爲するが故に唯だ自然の大法に驅られて其の行動に何等の統一なけれど、人は一切の心象を統一して其の目的に向て行動せんとするが故に唯だ外部の刺戟にのみ動かされずして自由の選擇を有す。これ人の他の動物と其の品等を異にして別に人格なるものを存する所以にあらざるか、人の心は時々刻々に動かされ其の思想感情も日々に變化し行けば、常にこれを自我なる一觀念の下に統率し其の自ら志す所に動く、此に統一あり繼續あり自由あり、以て人格の根底を築く、

ゼームスの心理學は意識過程の四性質を示していふ、

一　心意の狀態は人格的意識の一部となるべき傾向を有する事、

二　人格的意識の諸狀態は絶えず變化しつゝある事、

三　人格的意識は連綿として相繼續する事、

四　人格的意識は常に其對象中の或者を歡迎し或る者を拒斥しつゝある事、

と、人の精神生活は猶ほ國家組織の如く、個々の心象唯だ個々に動きては完全なる能はざれど悉く自我なる人格的意識に統一せられ其の意識は常に活動變化の狀態を爲しつゝ、しかも連綿として繼續せられ、此の主權者の好む所のものを採り、好まざる所のものを斥く、既に其の好む所のものを採り好まざる所のものを斥く、取捨自己にあり、自己は自己の範圍に於て自ら自己の行爲を決定し、敢て他の干渉を受けざる猶ほ主權者の其の領土内に於て自由に行動し得るが如し。されどおのづからなる制限は其の至上權の上にも加へられて如何に自由なりとも國史を蔑如し國憲を蹂躙する能はざるが如く、自己決定の動機は又おのづから自己の性格に基かざるを得ず、吾等の性格は吾等が過去に於ける意志活動の積集したる結果に外ならねば此の性格を離れて自由なるにはあらず、所詮吾等の行動は必然と自由との混淆に成るものなれば、此の必然の部分のみを見て過去の業因とも宿世の運命とも見られざるにあらねども、將來の運命を開塞し、未來の結果を左右するの自由存せずとは思惟する能はず。自由と必然、これ吾等が行動の凡てに於て認めらるべきのことたり。」

三　性と自由意志

自由意志の論議は略ぼ定められぬ、暫く一論歩を飜して自己決定の主體たる自我なるものを査究せんか、問題は復た本の性善惡論に歸らざるを得ず。現在の我には罪惡あり過誤あれど其の本性は果して罪惡なく過誤なき清淨のものなるか、抑も亦罪惡あり過誤あるが吾等の本性なるか、上來略述したりし性論の歸結は吾等の本性の源頭を尋ねて終に心即理といひ、神に出でたりといふも、孟子の良智良能と說くも、宋儒の太極といひ本然の性といふも、佛敎の眞如といひ如來藏心と談ずるも、カントの理性といひ無上大法といふも、其の名異にして、說に深淺の別ありと雖も、皆な其の根底を絕對無限の

靈性に置かざるはなし。殊に近世倫理の泰斗として嚮然思想界の一大勢力たる英國の碩儒グリーン一派の學說も其の歸する所は吾等の意識の本源を宇宙大意識の顯現にありとし、こゝに意志自由の根據を定め、倫理の目的を以て眞我（Tsne Self）の實現にありとす、眞我が心靈の本性たり。此の眞我の滿足はこれ吾等が倫理的要求にして心裡の靈光が指示する大道にあらずや。子思の所謂誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なるもの亦之れに外ならじ、山鹿素行はいふ。

眞我

已むを得ざるの誠

已むを得ざるもの之れを誠といふ、純一にして雜らず。古今上下易るべからざるものあり、維れ天の命、あゝ穆として已まざるなり、聖敎未だ曾て誠を以てせざるはなし、道といひ、德といひ、仁義といひ、禮樂といふも皆な人々已むを得ざるの誠なり（中略）已むを得ざるの誠を致せば則ち一言一行一事一物の間に誠ならざるはなし（聖敎要錄）

と、既に已むを得ざるの誠といふ、意志必至にして自由なきに似たり。されど此の已むを得ざるの誠を致さざるとは繫りて自己の自由にあり、吾等は實に爲すべきを知つて爲さゞることあり、爲すべからざるを知つて爲すことあり、これ豈に本來の性が物欲の雲に掩はれ理想の我が現實の束縛を受けたるの結果にあらざらんや。修養の要は此の束縛を脫して天地の靈性と融合し、此の雲を排して自由の妙光を認めんとするにあり。

靈性の障礙

如何にして我が靈性は掩はれ、如何にして我が自由は束縛せられしが、吾等は過去の遺傳によりて父祖の性癖を受け、現在の境遇によりて周圍の壓迫を蒙り、心ならずも此の爲めに縛られ、知らず識らずも此の爲めに掩はれたれど、尙ほしかすがに棄て難き先天の靈性は內に輝き、本有の自由は其の面影を存するにあらざるが、現實に於ける吾等の個人性を分解し見んか一面は本有の道德的要求に從ひて自由の天地を有すれども、他面に於ては自然の大法に動かされて其の羈絆を脫する能はず。

個人性
- 道徳法
  - 本性
  - 人格の意識
  - 自由
- 自然法
  - 先天的
    - 本能
    - 遺傳
  - 後天的
    - 自然
    - 家庭
    - 境遇
    - 社會

必然

大約此の如くにして吾等が行爲は定められる、既に道徳法に關する論議の大要は略ぼ悉くしたれば、去て自然法に移りて遺傳と境遇とが如何に吾等の性格に影響するかを見て修養の能不能に及ばん。

第六章　個性の要素

一　遺傳と個性

道徳法に於ては宇宙大意識の顯現なりと認められたる吾等も、自然法の眼中には獸と相距らざる一肉塊に過ぎずして飛禽走獸に施されし草木土石に布かれたる法則は何の容赦もなく吾等の頭上に加へられて寸毫も之れを離るゝことを許さゞれば吾等は自然界一切の法則に縛られ、殊に生物進化の大則たる遺傳の理法は吾等が個性成立の一大要素となつて不識の間に得來りたる心身は吾が運命に大關係を及ぼさんとす。賢愚多く父祖に稟け、強弱もと皆な遺傳に因す。幸なるものは則ち可なり、不幸なるものに至つては終に訴ふるに所なきなり。

吾等の不幸は之れのみに止らず、自然法研究の進歩は曾ては宇宙の縮寫なりと誇りたる我が肉體も今は飛禽走獸と異るなき細胞組織に過ぎずと嘲り、

育ては神の子なりとして其の特寵を祝ひし我が身も、今は醜き獣と其の祖を同うする子孫なりと咀はれ、其の身は魚鳥の血を承け、其の心は蝮蝎と趣を同うす、自然法の研究者たるエルテストヘッケルは遺傳に關する最近研究の結果を示して云ふ、

心身の遺傳

一　個々の人間は其の初めに於ては他の高等動物と異ることなき一個の單細胞に過ぎず、

二　此の根本細胞(Cytula)の生ずる狀態は凡ての場合に於て同一にして男の精虫と女の精卵との二個の細胞が互に融合するに由る。

三　精虫と精卵との生殖細胞には各々細胞精神(Cel-soul)を有し其の感覺と運動との形式を異にす。

四　受胎の場合には此の二個の生殖細胞の原形質と核子とが融合するのみならず、其の細胞精神も亦相融合し、これら細胞の中に潜在せる緊張力も亦抱合して更に新らしき緊張力を生じ、こゝに根本細胞が有する精神の萌芽たり。

人類精神の萌芽

發生の階段

五　かくて個人は父母より其の身體及び精神の特質を受く、詳しく云へば遺傳によりて精卵の核は母の特質を傳へ、精虫の核は父の特質を傳ふ。吾等の身心は此の如くにして父母より繼承し來れるなれば更に其の祖に遡り其の先を尋ぬれば、ヘッケルは又吾等が精神發生の階段を語りて、人類の祖先は他の動物と同じき單細胞の原生動物にして其の心的作用は無機物の化學作用に過ぎざりしとし、

第一段　單なる細胞精神を有する單細胞動物即ち濾虫類

第二段　群集細胞精神を有する複細胞動物即ちカタラクタア

第三段　表皮精神を有する最古の後生動物、即ちプラトデス

第四段　簡單なる直立腦髓を有する無脊椎動物、即ち蠕形動物

第五段　頭蓋骨なく只だ單純なる髓管を有する有脊椎動物、即ち無頭蓋動物

第六段　頭蓋骨と腦とを有する動物、即ち有頭蓋動物

第七段　大腦の皮質の特に發達せる哺乳類動物

第八段　思考機關を有する高等の人猿及び人類

との段階を經來りて終に今日に於ける吾等が精神となれるものにて之れ實に科學的に證明せらるべき確乎の事實なりと說く、吾等の身には禽獸の血を存し、吾等の心には下等動物の面影を遺しつゝ祖父母より父母に、父母より吾等に進化の大道を辿りつゝ遺傳し來りしものなれば、吾等は生來他の動物と異らざるの本能を有す。本能とは意識したる何等の目的なく且つ豫備的敎育なくして生來に其の目的に向つて行動する性能にして、ゼームスの心理學に

本能とは何ぞ

本能の解

「本能的と稱する行動は、凡て反射標型に屬するものにて猫が鼠を見て之を追ひ犬を見ては逃げ又は爭はんとするの狀を呈し壁上又は樹上を步みて落ちず、火又は水を避けて之れを踏まざる如き皆これ其の場合場合に於て斯く行動せざるを得ざるが故に斯く行動するにて決して猫に一定の目的あつて然るにあらずして其の身體組織が鼠を見ては追はざるを得ず、犬を見ては避けざるを得ざるやうに構造せられたるに由るなり」と云はれたる如く、全く生來の身體組織に關聯せるものにして、福來博士の「心理學講義」には更に適切の例を引て、

第一本能
第二本能

一定の目的の自覺もなく、又之を遂行すべき豫備的敎育もなくして該目的を遂行するやうに行動する先天的性能を本能と謂ふ、例へば飯粒の過ちて氣管に入りたる時に噴嚔を發するが如し。此の噴嚔は飯粒を氣管より逐ひ出すの目的に適合す、然れども此の場合に於て人の噴嚔するは、此の如き目的を遂げんとするの自覺を以てするにあらず、又何人よりも斯くすべく敎へられたるが故にもあらず、唯飯粒の氣管に與へたる刺戟が反射的に噴嚔を解發し、而して此の嚔理が飯粒驅逐の目的に適合したるなり、故に生理的に定義すれば、本能とは一定刺戟による感神經の興奮と之に對する動神經の一定の反應との先天的聯合と謂ふべきなり。

と、本能の種類はいと多けれど、吾等が下等動物と異ならざるは第一本能と も稱すべきものにして渴して飲を求め、飢えて食を求むる飲食の本能、一定

◎個性の要素

の年齢に對して起る生殖本能及び父母（殊に母）が子に對する愛情の如き種族保存の本能の如きこれなり此の本能はやがて慾望となりて發達し更に進みては人類に於て多く見得べき第二本能と目すべき利己的要求となりて、何物にても之れを我が有たらしめんとする貪欲の萌芽となり、社交的動物なるの故を以て自己の存在を同類によりて認められんとする名聞の念となる。皆是れ吾等か動物の昔より繼承し祖先によりて傳へられたる先天の本能にして悉くこれ我が靈性を昧ますものたり。

吾等の繼承し來れる本能は之れのみにあらずして中には靈性の微光を認め得べき知識要求の本能、美を愛好するの本能、他に對する同情の本能等を算し得べければ、本能を以て直に惡なりとは云ふ能はざれど、其の最も著しき本能は慾望と密接の關係を有する動物性のものに於て殊に著しきを見る。吾等は今、進化の過程にあるものなれば、其の身心には幾分の動物性を遺すといへども、別に神に向ふべき萌芽を存す。遺傳に遺傳を重ねて來りし吾等が又遺傳に遺傳を重ねて進み行く所は獸を離れたる至靈最高の境にあれば、

此に人と獸との明かなる區別を認め得べし。しば〳〵云ふ如く人は一面は獸にして他面は神たるべき資質を父母より遺傳し其の進化の過程は漸次に獸と離れんとす、これ人の人たるの資質にあらずや。此の人の人たるの資質を遺傳するものを普遍遺傳といひ、同じく人なりと雖も、其の間、亦賢愚強弱の差あるを特殊遺傳といふ、瓜の蔓に茄子の生らざるは普遍遺傳にして其の瓜に大小あり美醜あるは特殊遺傳たり、既に特殊に遺傳せらる、個々其の資質を異にし人々其の個性を同じくせず、天下の廣き亦一人の同一身心を有するもののあることなく所謂乾坤唯一人たり、之れを之れ稟賦の性といふ。稟賦の性は人々同からずと雖も、而かも異中に同を求めて研究の便を計らんとする學者の査究は古來人間の稟質（Temperament）を血液汁により分類して多血質（Sanguin）神經質（Melancholish）膽汁質（Cholerie）粘液質（Phelegmatic）とし、近世の學者之れに新意味を倚して個性の説明に供す。請ふ諸家の言ふ所を綜合して其の要を語らしめよ。其のれ之を東西の人物に配當せるものは主として西村茂樹氏の「心學講義」に據る。

◎個性の要素

一多血質　此の體質は血液の補給迅速にして顏の色美はしく、主として丸顏にて物に感じ易けれども、忘るゝことも速く常に快活の狀を保ちて俗にいふ血の氣の多く煽動し易き質にして氣早やなれども極めて樂觀的なり、其の長所をいへば鋭敏なれども、其の短所をいへば輕卒なり。國民としては佛蘭西人は此の質に屬するものにして個人としては平清盛、足利義政、織田信長、漢の武帝、唐の玄宗など此の體質なるべし。

二神經質　先きの多血質の樂觀的なるに比して之れは悲觀的にして幽欝にし、俗に謂ふ苦勞性にて深沈寡默なれば輕佻の恐れなけれど、先きの多血質の速くして弱きに比して速くして強き精神力を有現角隱遁主義に流れ、保守的にして進取の氣象に乏く、思慮緻密なれど實行の力を缺き、顏面圭角多く身も亦痩せたるが如し。猶太のエレミヤ、希臘のホーマー、伊太利のダンテ、獨逸のシルレル、支那にては屈原、陶淵明、杜子美、我か國にては菅原

道實、鴨長明等此の質の人なるべきか。

三膽汁質　筋力強健にして血液の運行盛んにして志謀膽氣大に且つ之れを強行する忍耐の力あり、俗にいふ剛膽、腹の大きい人にて、多血質の如くに鋭敏なれど熱情あり、すに熱情あり、如何なる抵抗に遇ふも屈せず、事を爲慮に熟す、即ち遲くして強き精神力を有する人なり、若し其の缺陷を云へば主我的にして同情の念に薄きにあり、古來英雄多く此の質に屬す、羅馬のシーザー、魏の曹操、唐の太宗、我が國に於て武田信玄、上杉景勝、近くは星亨の如きは此の質の人なるべし。此の質は之れを善に向はしむれば大丈夫たるべく、惡に向はしむれば暴虐の人たるべし。

四粘液質　此の質は血管の運行平靜にして粘液の性強きものは重礙にして遲鈍たるを免れず、されど其の質適當なる時は平凡なれども忍耐の力に富み、俗にいふ實體な人なるべし。米のワシントン、

支那の孔明、我が邦の徳川家康の如きは其の最良なるものにして其の劣れるものに至ては下女下男に多し。

坪内博士は其の著「倫理と文學」に於て此の四稟質を詳説し、終りに要を示して多血質は「才子肌、世才家、感情家、空想家、又は肉體の慾に溺れる人、斯ういふやうな人を餘計含んで居る」神經質は「普通智慧者と稱する質であ る、策略家といふのはこゝから出れば、慷慨家、熱誠家、精神家、厭世家、懐疑家などもこゝから出る」粘液質は「愚人肌ともいふべきもので（中略）總じて慾氣の薄い樂天家は此の仲間である、君子、善人、篤實な人、實體な人、正直者、律義者、後生樂な人、恬淡家、冷淡家、お心よし、ウスノロ、間抜、抜作、ボンヤリ、ぼん太郎、頓間、愚圖、意氣地なし、ぐうたら、甲斐性なし、おひきずりなどといふのは皆此中から出る」膽汁質は俗に豪傑肌といふといひ「剛愎家と云ふもこれから出る。大いなる事業家、十分に斷行し得る事業家もこれから出る、沈着に大事を行ふ人も此の質、あの人は落着いた人だな、眞面目に事業をやつて乾度仕遂げるなどと評する、其の代り大

泥坊もこれから出る、大罪人もこれから出る、鐵面皮な圖々しい、押の強い奴、糞度胸の据わつた、思ひ切つたことをする、非を遂げるなどいふも此の質」と說かれぬ。以て四稟質の特性を知るに足らんか、人の稟質は斯く四種に分類すべしと雖も、そは唯だ大體の傾向にして個々の人に對して彼れは何質なり此れは何質なりと明かに指示し得るは少し。或は多血三分に神經七分なるあり、或は膽汁五分に粘液五分を交へたるあり、或は各稟質の長所のみを有するあり、或は各稟質の短所のみを有するありて、個々其の質を同うせず。吾等は此の同じからざる稟質を父祖より遺傳し來れるものにして、事多く先天の素因に屬す、此の遺傳に直接なるものあり、間接なるものあり、彼の子の父若くは母に似たるは直接遺傳にして父には似ざれど祖父に似たりなどいふは間接遺傳（又隔世遺傳）なり。唯だ見易き祖父母のみならず、遠く數世を隔てたる祖先の稟質を受くることも少からず、斯く見來らんには吾等の稟質は殆んど先天的に固定せられて動かすべからざる命運に縛せられたるに似たり。されど此の稟質も亦周圍の境遇によりて變化せらるゝことなき能

はず、同じく進化論を唱ふる中にてもダーウキンは此の遺傳に重きを置きたれども、ワイズマンは、双親の經驗幷に特質の直に子に傳はるもののみと見ずして、人は生初より土地境遇等偶然の影響を受け、又雙親の膝下にあるの故を以て知らず識らず其れに同化せらるゝこと多しと説きぬ。先天的素因は略ぼこれを見たり更に後天的素因に向て研究の歩を移さゞるべからず。

ダーウキンとワイズマン

二　家庭の薫陶

父祖の個性が其の子に遺傳して其の性格に多大の影響を與ふるは生物進化の大法が指示する所にして之れを實驗に徴して否むべからざる所なれど、ダーウキンの云へる如く遺傳のみを以て其の子の性格を論定せんとするは早計にして、實際に於てはワイズマンのいふ如く人にはおのづからなる模倣の性能ありて常に近接せる兩親の氣風と態度とを模し知らず識らずの間に其の性格に影響するものなれば個性の後天的要素としては第一に指を家庭の狀態に屈せざるべからず。彼の進化論の唱首チャーレス、ダーウキンの祖父はエラスマス、ダーウキンとて有名なる博物學者にして其の子はジョージ、ダーウキンとて天文學者たり、ジョン、スチユアード、ミルの父にゼームス、ミルありて父子共に名を學界に走せ、賴山陽の父に賴杏坪あり、子に賴三樹あり、伊藤仁齋の子に伊藤東涯あり、北村季吟の子に北村湖春あり、楠氏三代其の忠誠を傳へ、源家世々武將の資あり、所謂將門、將を出し、詩人の子多く其の想を傳ふる如き一面より見れば確かに遺傳を以て言ふべからざるにあらざるも、他面より見ればこれ又家庭の薫陶が其の子をして親の如くならしめ、模倣の性能が自然に親の志を繼ぐに至らしめしにあらざるか。春風駘蕩たる家庭に養はれし子には自然に温和の性を有し、秋風蕭條たる家庭に育まれし子にはおのづから偏僻の性を具するは吾等が日常目撃するの事實にして、金殿玉樓に人と爲りし者と賤か伏屋に成長せし者との間に其の品位の異なるも

遺傳と家庭

家庭の影響

偉人と賢母

偉人と配偶者

のあるも亦否むべからざる事實たり。されば雙親が子に施す薫陶の如何は其の子が生涯を左右するの力あるものにして、古來の偉人多く賢母に育まれしは史の正しく證明する所たり或る人が『芳野山若木の花をおほひづゝはゝそのかげの高くもあるかな』と咏じて小楠公が忠誠の一半は家庭の薫陶より出でたりといひしが如き、北條時賴の母が破れ障子を繕ひて其の子をして天下の執權職に在て而かも質素の生活を送るの素を養はしめしが如き、又は體質虚弱なるヴイクトル、ユーゴーをして能く八十四歳の高齢を保ちて佛國文豪の華冠と稱せしめしが如き、英國の大宗教家ジョン、ウエスレーをして「予の今日あるは幼時に於ける母の感化なり」と云はしめしが如き枚擧に遑あらず、殊に家庭の個人に及ぼす感化は其の幼時に於てのみならず。生計の難易配偶者の良否は直に其の人の社會的活動に影響し、生計の困難に忙殺せらるゝも のゝ心内に餘裕なくして修養に志す能はず常に配偶者の爲めに苦めらるゝも のゝ墮落の淵に沈み易く生計に餘裕あるものには衣食足て禮節を知るの風あり、配偶者に慰安を得るものに品性の高きを見る如き其の事例に乏しからず。

謀故殺と家庭

歐洲の外交界に辣腕を振ひたる鐵血宰相ビスマークは自ら「予が妻に負ふ所の如何に多きかは之れを口にする能はず」といひ、英國近來の良宰相たりしグラッドストンは配偶者によりて、英國の富を以てするも買ふ能はざる心の慰安を得たる如きは其の一例に過ぎず。

人は家庭に生れ、家庭に長じ、家庭に死す。人の生涯を通じて最も近接せるものは家庭なり、其の目睹し、聽聞する所の事、豈に其の個性を動かさゞらんや。更に的確なる統計の事實に由つて家庭の人の性行に及ぼす影響如何を見せしめよ。

謀故殺は人の大辟にして社會の害毒たり、最近の統計を見るに、犯罪者一年に五百九十三名を出す、而して其の因由を探るに

因由	男	女	合計
家内不和親族利益上の爭	九一	一五二	二四三
失愛嫉妬故殺	一一九	八	一二七

◎個性の要素　一二三

◎家庭の薫陶

怨恨報仇	一四四	二	一四六
姦通	一七	八	二五
貪欲	六	六	一二
種々の因由	二七	八	三五
因由不詳	三	二	五

以て如何に多く家内不和親族利益上の爭ひが此の大辟の因由たるかを知るに足らむか、全數の殆んど半ばを占む、こはこれ最近の統計に於てのみ然るにあらず、明治三十九年の調査たる第二十七統計年鑑が斯の如き數字を示すと共に三十八年には總數五百八十二の中、二百二十四、三十七年には總數六百四十七の中、二百五十四、三十六年には總數六百九十五の中、二百四十六にて常に其の大數は此の家庭に因するものなり。更らに自殺者の統計に見んか。一年間總數八千九百九名、日本國内に於て常に一時間に一名以上の自殺者あるの比例にして其の原因の主要なるものは精神錯亂の結果にして其數四千三

百十二名、其の他に於ては統計年鑑は之れを細別して、病苦に因る者一千五百十四、活計の困窮又は薄命を歎きて九百八十四、痴情又は嫉妬、三百七十四、前非を悔ひ又は慚愧に因る者、二百七十一、親族の不和に因る者、二百七十八、罪の發覺を懼れ又は刑の免れ難き爲め、六十四、將來の事を苦慮して六十五、商業の損失又は負債償却に困み、百十六、淫逸放蕩、八十一、親又は夫の懲戒譴責に因り十一、離縁せられしを悲み、二十八、夫又は子等の不行狀を歎て十二、私通妊娠を愛て三十五、老衰身の不自由を苦慮して二十八、結婚を忌みて十二、身體の不具なるを歎て十一、鬱憂、十九、憤怒の餘り、六、親又は妻子の死を歎て、十六、老耄、二、緣談上の困難、四、其の他百六十四、不詳なる者、五百と示す。これのみにても其の如何に家庭に因するもの多きかを知るに足らむ。若し夫れ其の半數たる精神錯亂者も深く其の因由を尋ねたらんには多くは家庭の事情に基くものにあらざるなからんや。更に煩を厭はず法律上の罪人として刑を受けたるものの父母の有無を見んか、

◎個性の要素

父母と犯罪

父母存在	男	一六、八七二	一七、八八〇
	女	一、〇〇八	
父又は母のみ存在	男	二三、〇七三	二四、四九一
	女	一、四一八	
父母共に死亡	男	二一、九二二	二三、六八二
	女	一、七六〇	
棄兒	男	六一	六一
	女	〇	

資産と犯罪

双親健在の者は犯罪少くして其の一を缺くもの又は共に缺くものに犯罪多きは之れ家庭の犯罪に及ぼす大なるものあるを看取するに難からず、其の資産の有無を徴せんか、こも亦家庭と犯罪との關係の密邇せるを知るに足るものあり。事實は吾等に示していふ。

資産ある者	男	六一六	六四九
	女	三三	
稍資産ある者	男	四、八八〇	五、〇九一
	女	二一一	

受刑者

資産なき者	男	三五、二九二	三七、五七三
	女	二、二八一	
赤貧の者	男	二一、一五三	二二、八一六
	女	一、六六三	

犯罪と資産との關係も亦明かなる數字を吾等に示すにあらずや、恒産なき者に恒心なしの格言も亦確かに一面の眞理たり。

一斑を以て全豹を推すを得べくんば、吾等が上來略述せる諸種の關係に於て個人が後天的に家庭より受くる影響の頗る多大なるを知るを得ん。されど人は家庭のみにて生存するものにあらず、一歩門外に出れば其處に他種異樣の人を集めたる社會あり、不言の間に吾等を感化せんとする自然あり。此の二を逸しては未だ以て完然に個人の性格を論ずべからず。次ぎに云ふ所のもの則ち是れ。

三　社會の感化

個人に個人の稟質あり、家庭に家庭の特風あり、個人の集合に成り家庭の團結に成るの社會、豈に亦特種の稟質あり氣風なからんや。蓋し個人は社會の成員にして社會は個人の集團なり。成員たる個人の意志に成り。成員たる個人の意志は、集團たる社會の意志に動かさる。妙なる哉、人。自ら社會を作りて自ら其の爲めに規制せられ、自縄自縛。脫れんと欲して脫れ難きものあり。古來英雄、時に回天席地の業を畫して社會の氣風を一變するものありと雖も、彼れ自身も亦時代の潮流に掀翻せらるゝことあるを免れず。時勢、英雄を生み、英雄、時勢を制す、よし人に聖凡の別あり、勇怯の差あるとも、斷然、時勢の外に立ち、毫も社會の氣風に浸染せられざるものあるなし、時代に時代の潮流あり、社會に社會の氣風あり、之れを名けて時代の精神といひ、社會的意識と呼ぶ。茫々五千載、史の示す所は此の精神推移の行路にして東西學者の頭を惱ます所は此の意識開發の狀態な

り。歷史の證明する所、社會學の研鑽する所、吾等は確かに個人の社會に動かさるゝものあるを看取せずんばあらず。個人は遺傳の大法によりて父母の稟質を繼ぎ模倣の本能によりて其の氣風を受くることを免れざると共に、社會の遺傳を受け、時代の感染を被ることを免れず。生れて父母の膝下にあり、其の見る所のものは時代の風習が産み成せる衣食住にして、其の聞く所のものは社會共通の言語にあらずや、彼れは先づ其の言語を模倣して自己の意志を他に傳達するの方法を學び、其の風習を繼承して社會の一員たるの素養はざるべからず。其の見聞する所のものは時代の智識なり。此の如くにして養はれ、此の如くにして長ず、其の個性に影響する所のもの深且つ大ならざらんとするも得べきのことならんや。況んや人は社會的動物にして、其の本能には模倣の性を有するをや。

個人は社會を離れて生存する能はず、其の衣、其の食、其の住、悉く他の力に頼り、共同團結相互相補給して生存を完うするが如く、其の意識し行動する所も亦社會的意識を離れ、時代精神を超越する能はず、吾等が意識の素

◎社會の變化

智識の素材

材となれるものは皆なこれ時代の經驗にして吾等が行動の主因となるものは悉くこれ社會の順應のみ、偶ま獨創の見あり發明の擧ありて時代を超越し、社會を卓絶せるが如きの感なきにあらざるも仔細に點檢したらんには多く前人苦心の結果に基き僅に一步を轉じたるに過ぎざるを見む。人は到底社會の羈絆を脫する能はず、言語に縛られ、文字に縛られ、習慣に縛られ、流行に縛られ、輿論に縛らる。

言語と文字

言語と文字とは意志發表の機關にして之れなくして人は自己の思想を他に傳達する能はず、而して其の言語と文字とは獨創のものを許さずして必らず社會共通のものたらざるべからず、修辭學者は命じていふ、「造語を禁ず」と、自家製造の言語文字は以て思想傳達の媒たる能はざるなり、

習慣

習慣も亦これ社會が前代より繼承し來れるものにして今や一個の形式となつて個人に迫り、其の以外に出ることを許さず。年賀は虛儀なりと思惟するものありとも、獨り之れを廢する能はず、送葬は不必要なりといふものありとも父母の斃は之れを營まざるを得ず、

流行

流行に至りては能く過去の習慣を打破して新時代の氣風を表現し、終には偉大の壓力となつて個人を動かすものあり、何人か今日社狥の服裝を以て宴席に列し得るものあるや、何れの青年かチョン髷を以て白晝市街を往來し得るものあるや、輿論は時代精神の顯現にして社會意識の發表なり、一たび起つて翕然として天下之れに歸して時代の精神は時人各自の集合に外ならねば、個人の思念する所に誤謬あるを免れざる如く輿論にも亦過誤なきを保せずと雖も、概ね公正にして個人の缺けたるを補ひ社會發展の進路を示し、其の服從を要求す。されど尙ほ是等は强ひて其の束縛を脫し難きにあらざるも、其の政治となり法律となつて現れたるものに至ては絕對の威力を以て之れに臨み、曾ては個人の意志を以て作成したるものなりとも、今は脫るゝを許さずして悉く服從せざらんとするも能はざらしむ、

政治法律

佛國の社會學者チュルケーンは社會の組織の要素を以て一種の壓迫にありとし、多數の思想、多數の習慣は積集して偉大なる勢力となりて個人を壓迫し來る、個人が之れに服從する所に社會組織の根本要素存すとす。

輿論

◎個性の要素

盖し一面の眞理にして個人は到底此の壓迫を脫する能はざるなり。

◎社會の感化

個人の社會に動かさるゝ此の如きを以て社會の狀態によりて、個人の氣風を察するに難からず、文明の社會には文明の稟質あり、野蠻の社會には野蠻の性情あり、彼のモンテスキューの「壓制政體の人民は恐怖を以てし、君主政體の人民は名譽の念を以てし、共和政體の人民は德義を以てし、各、其の社會に生活しつゝあるものなり」と云へる如く政體の國民の氣風に影響すること頗る大にして君主專制の時代に在つては國民殆んど權利の思想を缺如して唯だ服從の德を想ひ、立憲の政體となつて初めて權利の觀念盛んなり、昔は橫井小楠侯が堯王の大義を提げて諸藩を遊歷するや、三個の標準を設けて國情視察の綱格とす。

一　士の容體質朴なるは士風盛なる所、

二　町家の繁榮なるは其の國の富みたる所、

三　農政行屆き民心を得たるは仁政の行はるゝ所、

と、長州の奇傑村田清風、之を聞て、更らに一條の加ふべきものあり、市中に玩物多く賣り居るは奢侈の國なり

といひたる由、偉人の着眼、自ら凡を絕す、社會の狀態を以て個人の氣風を察すべし。個人の氣風を以て社會の狀態を察すべし。これ個人の自ら社會を作りて、しかも自ら其の感化を受くるの證にあらずや。

これ唯だ政治制度に於てのみ見得べきにあらず、產業の上よりいへば農產の盛なる社會に於ては人の思想、保守に傾きて識見固陋を脫せざれども愛鄉の念深く、商業を本位とせる社會に於ては其の思想は進步的にして其の智力は發達して頗る銳敏なれども輕薄を免れず、比較的愛鄉の念に薄くして利のある所、千里も亦避けず、漁業の地方は冒險の氣風に富みて節儉の念少く、工業は商業の如く進步の思想を伴へども、常に一事に專らなるが故に眼界固陋を免れざる等、職業が一面個人に影響し他面に於て社會の風を爲すと見難きのことにあらず。宗教の上より云へば活潑なる社會には活潑なる宗教を要求し、因循なる社會には因循なる宗教を要求し、其の宗教が又社會に影響し我が國の例を見て云へば神、儒佛三道の勢を得たる地方には保守の念厚く、基督教徒の多き地方には進步の念盛んに、同じく佛教の中にても天台眞言の

◎個性の要素

行はるゝ地方は上品なれども儀式に流れ、禪の行はるゝ地方は質素なれども疎豪の嫌あり、淨土、眞宗の行はるゝ地方は人品下れども未來の信念深く、日蓮宗の行はるゝ地方は現世的にして活潑の氣象ありて各々其の趣を異にする等、各種の方面より社會の狀態が個人の氣風を動かすの要素たること少からず。

犯罪と社會

先きに擧げたる家庭の如きも其の組織の良否、生活の難易も亦深く其の根底に入りて由來する所を尋ぬれば社會組織の完否に崩すものにして、其の犯罪關係の如きは主として社會の產みなす所たり。刑事人類學者ケトレーいふ「年々現はるゝ所の犯罪は吾等の社會的組織の必要產物たるに外ならざるが故に、之を改造するにあらざる以上は到底犯罪の減少を見ること能はず」と、又いふ、「犯罪を爲すものは犯罪者其人なりと雖も、犯罪者をして犯罪を爲すに至らしむるものは社會卽ちこれなり」と、社會の風俗習慣は個人を壓し、其の制度文物は個人を制し、殆んど人をして罪を犯さゝるを得ざらしむるに至ることなきにあらず。罪は個人にありと雖も、個人を促して此の罪惡に陷らしむるもの社會與つて力あり。

個人の意志と社會

個人と社會との關係は相互に主となり伴となり、初めは個人の意志を主として成れる集團も、すでに社會となつては社會の意志主となりて個人を動かし、其の個人の意志は社會に現はれて社會の意志となり、其の社會の意志は又た個人の心に宿る、主伴交互すると雖も、個人の意志は弱く社會の意志は強し、これ人の社會の羈絆を脫する能はざる所以か、さらに外より此の社會的意識を制駁し、此の個性を束縛するものあり、之れを自然的なる風土の影響とす。

四　風土の影響

地と人

◎個性の要素

地を離れて人なく、人を離れて家庭なく社會なし、家庭幷に社會の個人に及ぼす感化薰陶大なるを認めたるの眼は此の暗默の間に多大の影響を與ふる風土の關係を逸すべからず。時代にはおのづからなる時代の色彩あるを許し

◎風土の影響

たる吾等は又國土には自然に行はれたる國土の聲調あるを許さいるを得ず。

試に東西兩洋に於ける國民の性格を比較し見よ、其處に不動の地理的關係を有するにあらずや、歐洲の地、山嶽起伏し縱橫に國土を區劃す、これが爲めに古來一統の事業を立るに難く、羅馬初め之れを席捲して未前の大帝國を組織せしも榮華は久しからずして北方蠻族の爲めに蹂躙せられ、其の版圖は分れて數個の獨立國となり、シャーレマン大帝も亦一たび統一の業を成せしも、帝の屍未だ乾かざるに國土は既に分裂を初め、其の後ナポレオン大帝あり、身はコルシカの孤島に起りて絕世の偉略、風雲を叱咤して殆んど全歐の覇たらんとして一敗地に塗れ、終に幽囚の身となるを免れず、歐洲の歷史は幾たびか統一せられんとして分裂したるの痕跡を示せど。支那の地は茫々千里、時に丘陵の國を劃するものなきにあらずと雖も、山嶮しからずして英雄の作業を妨げず、統一の大業は夙に太古に定められ堯舜禹湯を經て周の代となり、其の末に當て國土分裂して群雄割據の春秋戰國の時代を演せしも、分裂は永續せずして秦の始皇に統一せられ、秦亡びて漢亦統一の業を繼ぎ、漢亡びて

三國の分裂となり五胡十六國の亂となり南北朝の對立となりしも、地は之を許さずして隋の統一となり、唐之れを承け、宋之れに繼ぎ、元となり、明となり。清となり、幾分か分裂せられんとして分裂する歐洲の民人は獨立の氣象に富めど、分裂せられんとして統一せる支那の民人は服從の精神を有し、彼れに權利の思想盛んにして、此に義務の念深き、共に地理的影響が鼓吹したるの聲調にあらざらんや。

史家はいふ、文明は河流に淵源すと、埃及の文明はナイルの河畔に出で、小亞細亞の文明はユウフレテース、チグリスの河畔に發し此の二派の文明は流れて西の方、希臘に入り、希臘の文明は更らに西の方羅馬に入り、羅馬の文明は西方に汎濫して歐羅巴全土の文明となり、海峽を渡つて西、英吉利に入り、英吉利の文明は大西洋を越えて西の方、米合衆國に及び、合衆國の文明は又々西して滊茫たる太平洋を橫りて我日本に來る。これ一脈西洋の文明にして其の徑路に自然の指示あり、地理的關聯なしと云はむや、印度の文明はガンヂス、インダスの河畔に起り、支那の文明は黃河、楊子江の畔に出づ、

◎個性の要素

◎風土の影響

二派の文明は東洋文明となつて、朝鮮に入り、又た我が日本に來たる、これ斷じて偶然の結果にあらす。地理を離れて歴史を研究すべからざるは何人も知悉する所、然らば其の歴史の原動力たる個人が地理風土の影響を蒙ること大なるも亦否む能はざる所なるべし。

人、生れて見聞する所、家庭及び社會に現れたる人事百般のみにあらず、巍峩たる山嶽は其の雄姿を吾等に示し、滂湃たる海洋は其の絶調を吾等に通じ、菫花咲く野邊も水雞鳴く小川も、皆な吾等が日常の伴侶となり、不言の感化を幼けなき腦裏に浸染せしめたるにあらずや。故郷忘じ難し。

霜月正高鷗鵡洲。美人清唱發紅樓。郷心暗逐秋江水。直到吳山脚下流

と云ひ

帝城春雨送春殘。夜雨愁聽客枕寒。莫入鄉園使花落。一枝留待我歸看。

といへるものこれ唯だ詩人が悲調のみならんや。南洋浩渺の噴火島、時々爆發の慘を演ずる地に住する蕃民も、層氷積雪、四時殆んど天日を拜せざる北海の島民も、其の土を去ることを好まず、と聽く、鸛鳥、舊林を戀ひ、池魚、故淵を思ふ人に愛鄉の心あり、發して愛國の念となり、憂國の情となる、芙蓉峰の雪、琵琶湖の水は我が國民の誇にして芳野の花、松島の月は我が國民の深く心に印したるものにあらずや。人の感化する所、頗る大なるものあるや疑ふべからず、予、曾て「日本宗教地論」を著はして其の地理的關係を示す、立論、主として宗教にありと雖も、亦以て風土の個性に及ぼす影響を看取し得べければ頗はず左に摘錄せん。

（上略）吾人は之を我か島帝國の地理的形態に求めて、其の一を得たり。曰く我が日本は火山國なり、亞細亞大陸の火山脈はカムサツカ半島より千島に入りて、碁布せる群島となり、進んで北海道に雌阿寒嶽、有珠嶽、駒ヶ嶽等となり、奥羽に入りては一面中央山脈となつて南部の恐山より西に走りて吾妻、盤梯の諸山となり、一面は日本海岸を縫ふて鳥海山となり、妙高山となり、南洋よりせるものは臺灣、琉球を經て薩南列島となり、九州に入りて霧島山となり阿蘇山となり、温泉ヶ岳となり、四國に入り、本州に入り、終に北東の火山脈と合して富士火山帶となり、東南に走りて伊豆

◎個性の要素

七島となり、琉黄島となり、小笠原島となる。我が日本は實に噴火山頭に舞踏するものなり、噴火山其の數實に百七十五座、其中三十七座は現に烟烟火を噴くものたり。太古民人が是等の火山に對して疑懼の情を抱き、是を神視し、是を崇拝し恐懼して冥罰の及ばざらんことを祈りしは人情の當に然るべき所たり。聞く富士はアイヌ語、火神の義にして、有珠嶽も亦浮石を削り出す火神の義なりと、史前のこと今暫く云はず、歴史あつて以來、火山に贈位せるもの枚擧に遑あらず、出羽の鳥海が朝敵征伐に功ありとして位一級を進められ、伊豆の神津島、物忌奈神社が噴火毎に位階を上げられたる如き其の一例なり。若し夫れ現今著名なる火山が神社として如何に待遇せらるゝかを見ば、思ひ半ばに過ぐるものあらむ、富士山には官幣大社淺間神社あり、霧島山には同じく霧島神宮あり、阿蘇山には官幣中社阿蘇神社あり、英彦山には英彦神社あり、大山には同じく大神山神社あり、湯殿山には同じく湯殿山神社あり、以て我が邦人が火山に對する信仰を見るに足らむか、然れども予の云はむと欲する所は此にあらずして寧ろ火山と密接の關係を有する地震にあり。

◎個性の要素

我が島帝國は世界有數の地震國なり、日本全國を通じて平均一年の震數六百五十四、殆んど日に二回に垂んとす、桑田變じて海となるの光景は、我が邦に於ては稀有のことにあらず。

象潟の櫻は波に埋もれて、
花の上こぐ蜑の釣舟

と西行法師の咏せし八十八島、九十九林の光景も、今は麥青く秀でゝ其の俤尋ぬべくもあらざるの類は到る所に詩人の魂を消せしむ。さればかゝる天變地妖の人心に影響すること深く、知らず識らずの間に邦人の氣象を陶冶して、何事をも一時的ならしめ、突飛的噴火山的ならしめ、持久の念に乏しく、忍耐の心薄く、發して萬朶の櫻となるの美はあれども、凝て百錬の鐵となるの強なく、空理空論の迂を避けて現在の實を取らんことを欲し、死を見ること歸するが如く、さればとて隱遁厭世の風に染まず、何處までも活動的に向ふ所、これ活潑々地たる禪宗の我が邦人の嗜好に投じ、現世

◎風土の影響

祈禱を主とする天台、眞言乃至日蓮の諸宗の盛んに行はるゝ所以にあらざるか。試にこれらの宗旨が全國に於ける配布を見るに、其の最も多數の寺院を有するの地方は地震の回數多き關東幷に奥羽にして、天台は千葉、群馬、茨城、東京（別に本山所在地として滋賀）に多く、眞言は千葉、埼玉、東京、福島、茨城最も多數にして、本山所在地たる和歌山、宗祖有緣の四國地方に優る。日蓮は宗祖降誕の地たる安房、七里法華を以て有名なる上總を含める千葉縣最も多く、山梨、靜岡、東京これに次ぎ、禪に至ては曹洞臨濟共に靜岡に多數の寺院を有し、宮城、岩手、青森、山形、秋田、長野の各縣に於ては禪宗（主として曹洞宗）、各宗寺院の上にあり、之を西の方三重、滋賀、京都、大坂、奈良、兵庫の各縣に於て淨土門（殊に眞宗）の多きに比しては何人も其の地理的影響の多大なるを看取するに吝ならざるべし。

然れども、日本の地理的特長は單に火山國たり、地震國たるのみにあらずして、亦實に世界無比の降雪國たり。これを矢津昌永氏が「雪の日本」（太陽第十一卷第一號）に徴するに世界の寒地を以て目せらるゝ北氷カナダのオタワに於ける二月より翌年に至る四ヶ月間の降水量は二百三十二粍にして、これを悉く雪とするも、其の深さ六尺一寸餘に過ぎず、露西亞のモスクワは百四十七粍、これを同じ計算法を以てする時は三尺九寸たるを免れず、然るに我が降雪地を以て目せらるゝ日本海岸地方に於ては加賀の金澤は九百八十九粍にして正に二丈六尺一寸の深さに達すべく、越前の福井は二丈四尺六寸、能登の輪島は一丈八尺四寸、越中の伏木は一丈七尺六寸、伯耆の境は一丈七尺四寸、越後の新潟は一丈七尺二寸、羽後の秋田は一丈三尺に相當すといふ、雪は抑も何等の敎訓をか與ふる、想ふに雪の人生に及ぼす影響一二にして止まらずと雖も、かゝる多量の降雪が人類に與ふる最大の敎訓は貯蓄心の養成にあり、龜田鵬齋が嚴冬の候は交通全く杜絶して、少くとも二ヶ月、長くは六ヶ月に亘りて雪中に蟄居せざるを得ず、故に其の間の食料は之れを雪未だ降らざるの時に於て準備せざるべからず、こゝに於て貯蓄の必要は自ら感ぜられ、持久の

◎風土の影響

精神、忍耐の氣象は自然に養成せられ、永遠の計圖を畫するに至る、これ未來敎たる淨土門殊に眞宗の雪國に於て隆盛なる所以にあらざるか。日本國中最も降雪量の多き石川縣は眞宗の隆盛なるの地にして、全縣寺院總數千二百四十七、而して眞宗は實に八百八十七、他の天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、日蓮、時宗を合せて僅かに三百六十三ヶ寺に過ぎず。富山縣に於ても眞宗は一千百八十八ヶ寺、殘餘各宗は總計三百〇七ヶ寺、新潟縣に於ても亦優に各宗寺院の總數の半は眞宗たり、これ豈に偶然の結果として看過し得べきことならんや。

これ僅に一端なり以て全體を察すべし。職業の人心に及ぼす感化は前節既に之れをいひぬ。其の職業は風土の影響を受けて各々其の便なるものを選び、海岸の人は漁業に從ひ、平原の人は農業を事とし、山國の人は樵業に就き、都會は商業に宜しく村落は生產の地に適する等。悉く地理風土の關係にあらざるはなし、更に予が舊著「人格の養成」に云ふ所を繰返さしめよ。

偉人、山水に生れ、山水、偉人を生むか、人は畢竟自然の兒なり、ヒマラ

ヤの山高くガンヂスの流清き所に、思想高遠、性行皎潔なる釋迦を產み、アラビヤ平原、熱砂千里、而して峻烈なるマホメットを生じ、コルシカの一島淼茫たる海に臨む所に氣宇廣濶なるナポレオンあり、山遠く地廣き尾三の平原に織田出て豐臣出で德川出づ、これ豈に偶然ならんや、山國の人は自由の精神に富み獨立の氣象を有するも、偏狹に失し頑固に流るゝを免れず、アルプス山系、峯巒の中にある瑞西、ヒマラヤ山脈中に獨立を保てるニーポル、ブータンの二國ある如き其の例證にして、人國記の著者（北條時賴と傳ふ）は山國たる甲斐を以て人の氣銳く傍若無人の事多しといへども、强勇にして能く事に耐ゆと見、飛驒の國を評して

健直にして愚なり、日本は廣しといへども、我が國の如きことなしと思ひ、他國の望もなし、井の中の蛙、大海を知らざる如し

といひ、美作を目して「片意地にして人の敎訓を聞入れず」といへるは其の短所を認めて長所を逸したるの嫌なきにあらざれども、全くさることなしとも云ふべからず。山國は沈思冥想には適すべけれど、實地應用には適

◎個性の要素

◎風土の影響

せず、山國は修養の地にして活動の地にあらず、平原國は人文發展の地なり。されば此の國の人は卑屈に流れ服從に失し、彼の山國の如き獨立自尊の心に乏しく輕佻浮薄に陷るの嫌なきにあらざれど、寬裕にして快活なる長所を有す。所謂大陸的氣風なるものは此の地方に於て初めて認め得べきなり、黃河揚子江の流域たる支那平原若くはウオルガ、ドニープ沿岸なる露西亞民族に於て其の長所をも短所をも認め得べきにあらずや、之れを我が國の例に見るに、人國記の著者は淀河平原たる攝河泉の人情を敘して攝津は「武士にして町人百姓のなす如く」といひ、和泉は「譬へばはかゐなき剃刀の如く」と爲し、河内を以て「雪のあしたの庭面の柳、たゆむといへども、終に折るゝことなし」とし、尾張の平原を評して「國民巧才なる所あり」といへるも亦以て其の一斑を察し得べきにあらずや。

支那に於て江南江北其の趣を異にし、我が邦に於て關東關西其の風を同うせず、山陰山陽其の心を共にせず、歐洲に於ても南歐北歐其の氣を一にせざるを見れば風土が個性に及ぼす影響亦瞰々を要せざるべし。

第七章　修養の可能

一　個性と修養

個人の性格は遺傳によりて定められ、境遇によりて動かされ、毫も自己の意志を以て左右し能はざるものとせば修養の事終に無意義に了らざるを得ず、然り全然無意義の事なりと主張する論者あり。ショーペンハウエルの如き其の最なりし彼れは宇宙の根本原理を以て意志とし、吾等が有する意志は宇宙其の者の本性なれば人性は決して變化すべきものにあらず。

各個人の性質は生來固定せるものにして技術を以て製作せらるべきものにあらず、其の根底に於て全く遺傳的のものなり。

と道破し、敎育の力を疑ひて訓誨敎化の方便を以て人性を改造せんとするは鉛を點じて金と爲さんと欲するが如しと嘲笑しき。ショーペンハウエルの言は、よし哲學的空想として棄るも、形事人類學者ロンブロゾーの如きは犯罪

◎修養の可能

◉個性と修養

者の骨相を調査して皆な其の生理狀態を同うす。彼等は自ら好んで罪を犯すにあらず先天的遺傳の制約によりて斯く爲すものにして改めんと欲して改むべからざるものあるに由るといふ、こも亦修養の可能を否定するものにあらずや。

遺傳と變化

彼等のいふ如く吾等の個性に遺傳的性向あるは否むべからずと雖も、遺傳なるものは決して保守的固定的のものにあらずして變々化々する進化の大法を說明する唯一の根據たり、既に進化の大法を說明するに此の遺傳を以てす、其の固定的なるを許さずして變化すべきものなることを是認せざるべからざるは論理必然の結果なり。既に其の變化あることを是認す修養を以て不可能なりとする理由、何の處にかある。殊に遺傳は僅に先天的傾向たるに過ぎずして家庭に動かされ、社會に動かされ、自然に動かさるゝ多きものあるをや。自然、言はず。暫く之れを後章に讓り人を以て變化せしめ得べきものを擧ぐれば家庭の教育あり、社會の教育あり。未だ生れざる以前に於ても母の修養は直に胎兒に影響する胎教あり。「列女傳」に文王の母、

胎教

其の身(はらむ)あるに及んでや、目に惡色を視ず、耳に惡聲を聽かず、口に惡言を出さず、胎に教ゆるを以てなり、

とあり、「大載禮」に

周後の成王を身に娠むや、立つて跂せず、坐して差はず、獨處して居らず、怒ると雖も、罵らず、胎教の謂なり、之を玉版に書し、之を金櫃に藏し、之を宗廟に置き、後世の戒と爲すといへるもの是れ。

家庭教育

出產後の教養に於て其の性格に影響すること大なるは前章云ふ所の如し。ヘルマン、シルレルが兒童の小學校入學の際、心意發達の試驗を行ひしに某町にては二百九十七人の入學者の內 自己の氏名を完全に發音し得るもの一人もなかりしは兩親共に勞働者にして家に居ること少く家庭の注意不行屆の地方なりしを示せる實驗によりても家庭教育の性格變化に力あるを認むるに難からず、されば發達せる社會に兒童の教養を以て家庭にのみ一任せず公共的に教育する學校制度を採り以て家庭の缺けたるを補ひ、進んで國民全般の

學校教育

智能の啓發、德器の成就を計る。これ國民教育の中堅たり。我が小學校令第一條に曰く

小學校は兒童身體の發達に留意して道德教育及國民教育の基礎並に其生活に必須なる普通の智識技能を授くるを以て本旨とす

と、我が學校教育の目的は此にあり。これを發程として中學あり、高等學校あり、大學あり、外に特殊專門の學校ありて品性の陶冶技藝の修練、智識の發達に資す。之れ皆教育者の力により外より導きしを以て被教育者の偏癖を矯め、其の人格を完成せしめんとするに外ならず。學校教育のことは自ら教育學の範圍に屬して此に詳論するの要なしと雖も、學校以外の教育即ち社會教育なるものに至ては吾等の論議と相涉ること多し。蓋し學校教育は教育者によりて具案的に施され、被教育者は半ば命令的に之れに服從せざるべからざれど、社會教育は施設者其の人に具案の事ありとも之れに依りて教育せらるゝと否とは全く個人の自由に存す、自由に存せりといへども其の風化の個人に及ぼす力や大なり。何をか社會教育といふ、（社會教育には二義あり一は社會主義的教育にして他は社會

の教化制度なり、こゝにいふ所の社會教育は後義に屬するや言を待たず）社會の教育も亦學校教育の人心の各方面に向ひて智育、德育、美育、體育の四に分ち得るが如く、社會民人の智識增進の爲めには

一　圖書館の設置
二　通俗講演會の開催

等、其の主要なるものなるべし。書籍は智識の寶庫にして、通俗講演會は智識普及の良法たり。圖書館の有無は以て其の地の智識を卜すべく、通俗講演の開否は其の社會の程度を知るに難からず。頃者我が國に於ける圖書館の增設は智識の發展の結果にして、各地に於ける夏期講習會の開催の如きも亦人文進歩の一現象と目すべし、其の他博物館の如きも亦此の目的と美育とを兼ねたるものたり、德育に於ては

一　道德團體の設立
二　寺院教會の感化

に由ること最も多し學校以内の德育は教育者之れを計るべけれど、一たび其

◎修養の可能

の門を出れば之れを社會の敎化に委ねざるを得ず。歐洲に於て敎會が專ら德育を掌れる如き其の一例にして、我が國に於て寺院の德性涵養に力ありしは何人も知悉するの事實たり。美育に於ては

一　美術展覽會
二　音樂會
三　演劇

美育

の類を算すべし、これらは皆な以て國民の趣味を向上せしむるに力あれど、彼の徒らに公衆の嗜好に投せんが爲めに藝術の神聖を害し、妄りに世の喝采を博せんが爲めに下劣なる趣味を皷吹するものゝ如きは風敎を害するものたるや論なし。體育に於ては

一　體育場の設置
二　衞生組合の組織

體育

の如きといふべきか。體育競技の行はるゝ社會に健全の人多く衞生組合の完備せる地方に病弱者少きも亦社會敎化の一現象たり。

這般の社會敎育が個人を感化すること多きは既に社會の壓力が如何に個人に及ぶかを看取したる吾等に取ては毫も疑ふ能はざる所。遺傳によりて定められたる吾等の稟質も此の如き家庭學校社會等の施設によりて動かさるゝ所多し、この動かさるゝ所多きこれ實に敎育の可能なる所以にして、プラトーンが理想的國家の建立を以て初めて德性を涵養せらるべしと說き、荀子が禮を以て外より性を矯むるを以て修養の道程と爲したるもの亦實に此現象に注目したるに由る。

プラトン

されど吾等は唯だ外より敎へらるべしといへる意義のみに於て修養の可能を說きて滿足するものにあらず、吾等の云はんとする所は寧ろ內面的に潔く人心の根底に入りて此の可能を承認せんとするにあり。

二　修養の理想

◎修養の可能

性を論ずるものに諸種の說ありて、各、其の歸趣を同うせざることは業に

已に之れを述べたる所にして、其の論議の趣向する所も亦之れを見たり、想ふに彼等が善といひ惡といふは要するに着眼の差にして必らずしも根本に於て異れるにはあらじ、其の惡なりといふものは、主として第二性に立論し、其の善なりといふものは主として第一性に立論す、第一性は宇宙玄妙の靈體と脈絡貫通するものにして、子思の天の命之れを性と謂ひ、プラトーンのイデアの面影と指し、程朱の本然の性といひ、道心と示し、陸王の心即理と說き、佛敎に眞如佛性と談じ、ストア派の神性といひ、基督敎の神の子と語り、カントの理性といひ無上大法と斷じグリーンの眞我と示すものにして、第二性は此の本然の靈性が昏惑せられてイデアの都を迷ひ出で終に物質の爲めに繫縛せられたる吾等が今の心にして、程朱の所謂氣質の性、物欲に掩はれたる人心、佛敎に所謂生死流轉の凡夫、宿業の生みなせる心、基督敎に所謂罪の子たる現在の身たり。更に語を換へていへば吾等が遺傳によりて繼承し來れる本能並に稟質にして外、必然の理法に縛られ、內、先天の宿業に汚さる、誰か之れを見て惡傾向を有せずと云はむ。此に着眼するものの惡を矯め非を

正すを以て修養の要義とし禮義を談じ、形名を說き、神の力をいふ等、主として客觀的修養に立論するこれ亦當に然かあるべきのことたり。されど、其の惡を去り非を正して汚されたる心鏡復び明かに、曇りたる靈體亦此に輝かんか、誰か其處に本源の性あるを認めざらん。此に着眼するものの本心を發揮し無碍自在の心地を開拓するを要とし、或は禪定、或は靜座、或は冥想、或は存夜氣、或は養浩然、或は寂靜、或は不動を說き、重を主觀的修養に置くも亦當然の事たり。修養の法異なれりと雖も、其の歸する所や一、吾等は一を取て他を捨つべからず、二者交々用ひて以て品性の陶冶、人格の完成に資せざるべからず。太田錦城曰く、

性は人の天に受けて生るゝをいふ。生るゝ先を譯したる妙なり。性は一なり、されど三性を立つべし。一には道德の性といひ、仁義孝悌は人の天より稟けて生るゝものなり、孝經の父子之道天性也。中庸の德性、孟子の性善、皆なこれなり。二には情欲の性といふ。人の情實、私欲の異、又天より稟けて生れざるはなし、孟子の食色性也といふ。又目之於色、四肢之於

◎修養の理想

安佚性也といふ、これなり。三には形色の性といふ、人身の短長、面色の黒白の異、是れ又天より稟け生れたるもの也、孟子の形色は天性なりといふ、これなり、

と、錦城の所謂形色の性は體質遺傳にして、情欲の性は此に謂ふ所の第二性、仁義孝悌道徳の性といへるもの、これ則ち第一性なり。第一性は天より稟けたる性にして人々異るあるを見ず。人々異る所なく悉く本有の靈光を藏し、個々先天の理性を具すと雖も、敎へずんば知ることなく修せずんば現ることなし、此に於て外より之れを誘發するに敎育なるものあり。生れて呱々の聲を放つや父母之れを鞠養し、漸く學齡に達するや社會は之れを容るゝの學校を設け、以て其の本性の誘發を務め、敎ゆるに時代の智識を以てし、導くに道徳の要義を以てし、新時代に處し、活社會に居して沮む所なきの人たらしめんとす。これ幸なるに似て不幸なるものあり。人生、字を知る憂患の始、其の未だ敎育せられざるや、知る所少きが故に迷ふ所も亦少く、禽獸に等しきの行を敢てして其の不可なるを知らず。

紀州の山奥に其の父を殺して其の罪たるを知らず、自らいふ我れ我が父を殺す何の不可かあらん、況んや其の父は暴飲時に亂行を演じ他を害する多きをやと、紀の南龍公之れを刑せんとして其の無學にして人倫を辨へざるを憐み、これを藩醫の使丁の宅に養はしむ。居ること三年、諸生の言說する所を聽きて孝道の肝要なるを知り、翻然として先非を悔ひ、自ら進んで刑せられんとするに至れり、

此の事、人口に膾炙す、これ敎へられて其の過を知りしものにあらずや、人の幼なるや知ることなし唯だ氣質の性によりて行動するが故に煩悶なし其の長じて自我の存在を自覺するの齡に至るや、知るが幸か、知らざるが幸か、人の性(第一性)との衝突を生じ、外、必然に支配せられて、內、自由の燃ゆるが如きあり心內の競爭甚しく、悶々懊惱の域に遭遇せざるもの少し、此の時に當ては他より我を導く敎育の手は既に離れて獨り自ら敎へ、獨り自ら導く修養の期に入り、遺傳と敎養とによりて造られたる我が品性を向上せしむると

◎修養の可能

◎修養の理想

墮落せしむるとは繋りて一に我が肩上にあり。試みに人心發達の徑路を檢するに幼時にあつては外界に順應して反抗の念薄かりしも、長ずるに從ひて自我の存在漸く明かに、外界に對する取捨安排の心を生じ、物欲の誘惑いよいよ多くして、本有の理性も其の光を蔽はるゝを好まず、第一性に從ひて靈の慰安を得んか、第二性に驅られて本能の滿足を買はんか、諸種の社會敎育は其の墮落を防がんとすれど、周圍の事情は又向上を妨ぐるに吝ならず、一代の運命此に決せられ、順逆の二路此に岐る。

人生の危機

俊傑馬上郎、揮鞭指楊柳、謂言無死日、
終不作梯航、四運花自好、一朝成委黃、
醍醐與石蜜、至死不能嘗

（寒山）

人生の危機は此の時代にありて修養の要亦此の時より切なるはなし。

此の時、此の際、吾等は如何に我が心内を調理し、如何に我が四周を圍繞せらる誘惑に打ち勝つべきか我が、氣怛み、我が、心迷ふされど一たび奮勵一番、第一性を提げ來りて心の全面を支配せしめ、自己人格の中心より迸り出でたる良知の靈泉を以て物欲の汚穢を淨め、心裏の奥底に潜める本有の德光を以て煩惱の闇を破らんか、第二性は全く第一性に隷屬して其の用を爲さんことを欲し、曾ては外界の爲めに左右せられたる吾等も、今は却つて外界を左右し八風吹けども動ぜざる泰山の如くにして、亦能く土壤を讓らざる寬容の量を具ふるに至らん。此の不動の心念と寬容の度量とあつて能く自ら肅む秋霜の如く、人に接する春風の如きの品性を養ひ、徒らに他に順應して自己何等の操守なき凡庸の徒たるを免れ、事毎に自我を主張して反抗の念は悶々の情となりて獨り自ら苦むの愚を離れ、悠然凡俗の上に立ちて、然かも凡俗を攝取し、臺上の明鏡、妍醜の來るに任せて、毫も其の光を妨げず、天空の大月、雲の去來に任せて毫も其の明を失はざる如く、身は塵俗に處するも、心は清淨の境に住し、行は必然の理に支配さるゝも、靈は自由の天地に逍遙するを得む。心、此の一境に繋るが故に悉く差別の事象を超越し、又時空の檢束を受けず、臨機應變、應用自在、以て新時代の新要求に應じ、新運動を試みるに足らむか。第二篇以下論せんとする所のものは實に此の境地に至らむが爲めに左右せられたる吾等も、

修養の極致

◎修養の可能

◎修養の理想

んとする手段たり、方法たり。

我の前なる者、千古萬古、我の後なる者、千世萬世、假令我れ壽を保つ百年なるも一呼吸間のみ、今幸に生れて人たり庶幾くは人たるを成し終らんのみ。

夢中の我は我なり、醒後の我は我なり、其の夢我たると醒我たるとを知るは心の靈なり、靈は即ち眞我なり、眞我は自ら知る、醒睡に問なし、常靈常覺、萬古に亘りて死せず。

佐藤一齋

第二編　修養の方法

第一章　理想と現實

一　修養の困難

吾等が全人格を發揮して乾坤手に在り萬化身に生ずるの力を以て世に處し事に當るは修養の極致にして決して不可能の事にあらずと雖も、人生蹉跎多く、事毎に心と違ふ。自ら宇宙の靈性を稟け得たりと思惟すべき吾等の身抑も幾許の力かある。身長僅に五尺、これを一億九千六百九十萬方哩の地球に置き、更に直徑に於て地球に百倍强なる太陽の光熱を受けて生育す、地と太陽との間、九千二百七十萬哩、されど之れ僅に太陽系中の一部のみ、太陽は此の地球の外に水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星の七大遊星と四百有餘の小遊星を率ゐて天の一方に覇たり、聞く太陽と海王星の距離は

◎理想と現實

實に二十七億八千萬哩と。されど宇宙の大はこれを以て限られたるにあらず、太陽以外に四千餘坐の恒星ありて、其の最も太陽に近きものも亦太陽と海王星との距離に三千七百倍し、其の遠きものに至つては殆んど算數を絕す、然かもこれ僅に今日に於て究められたる一小部分にして全宇宙の大は終に其の涯際を知るべからず、涯際なき此の宇宙の中に五尺の身を以て抑も何事をか爲し得べき。吾等が身はこれ大海の一浮漚のみ。更に其の此の世に生存するの時間に見よ、天地は無始無終にして、宇宙は往古來今を貫き、生物あつてより幾億年、人類あつてより幾十萬年、而して我が世にある僅に五十、七十を以て古來稀れなりとす。天地の悠久にして宇宙の永遠なるを想へば、吾等の一生は露の乾ぬ間の朝顏にも似たらずや。然かも人生の果敢なきは之れに止らずして無常の風、時を擇ばず。老少亦定まる所なきに似て、朝に紅顏世路に走るの人、夕には北邙一片の烟と消ゆ。

行く川の流れは絕えずして、しかも、もとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたのかつ消え、かつ結びて、久しく止ることなし、世の中にある人と

住家と、又かくの如し。玉敷の都のうちに、棟を並べ甍を爭へる、高きいやしき人の住ひは、代々を經て盡きせぬものなれど、是をまことかとたづぬれば、むかしありし家は稀なり、あるは去年やぶれて今年は作り、あるは大家ほろびて小家となる、すむ人も之に同じ、處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅に一人二人なり、朝に死し、夕に生るゝ習ひ、只水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲にか心を惱し、何によりてか目を悅ばしむる。其の主と住家と、無常を爭ひ去る樣、いはゞ朝顏の露に異ならず、或は露落ちて花殘れり、殘るといへども、朝日にちりぬ。或は花萎みて露尙ほきえず、消えずといへども、夕を待つことなし方丈記）

小にして短。然かも此の小身を持して此の短命を保つ、尙ほ且つ非常の努力を要す。太古草昧の代、人は水草を追ふて移住し、食を尋ねて漂泊したり昔に於ては生活は比較的容易なりしも、時代の經過は人類の增加となり、人

◉修養の困難

人口と食物

人生苦觀

類の增加は食物の缺乏となり、幸に世運の發達は生產力の增加となりて食物の缺乏を補ふに力ありと雖も、數學級數的に增加する人口の需要を充たす能はず、現時文明各國は皆な其の供給を殖民地若しくは外邦に受けざるなし。若し其の國內の生產物のみを以て之れに充つるとせんか、食物の最も多量なりと云はるゝ濠太利何牙利に於ても一年に六日の不足を生じ、佛蘭西は三十五日、獨逸は八十七日、英吉利の如きは實に二百八十六日の不足を生ずといふ。我が國の如きも、米のみを以て算すれば一年四千九百五萬二千〇六十五石にして、之れを人口四千八百十六萬八百二十五人に配當すれば一人約一石强、一日約三合に當り、漸く露命を繫ぐに足るが如しと雖も、此の米悉くが飯料に供せらるゝにあらずして、酒其の他の材料に供せらるゝもの多きが故に年々食料に不足を生じ、外國より輸入せらるゝもの米のみにて三千萬圓の價額に達す、これ實に吾等が處世の勞頭に來るの困難にあらずや。人皆な其の生存の爲めに心身を勞し、我も亦其の渦中に入り激甚なる競爭を演せざるべからず、而して此の身は日に老境に向ひて活力の衰ふるを覺え、時に病魔の襲來を受くるも亦た競爭の地を離るゝこと能はず一たび競爭の地を離れんか、復び之れを得るに難く、浮沈に似たる此の身だに支ゆることを得ん、人生の苦楚はこれに止らず、生別又死別を兼ね、杖とも柱とも頼みにし先輩は我を棄てゝ黃泉の客となり。半生の伴侶と頼みし愛しき人にも相別るゝの時なき能はず、外界の辛酸いよ〳〵加はりて、內に慰安の途なく、浮世の義理に迫られては怨みたる人とも遇ひ憎める人にも會せざるを得ず、意に滿たざる事に當り、快からざる物に處し、行はんとする道を遮ぎられ、爲さんとする業は妨げらる、天下意の如くならざるもの豈に啻だ鴨川の水、壽語六の賽、山法師のみならんや。人生萬事、我が意に違ふ。此の苦境に處し、此の難事に當る。然かも其の身は小にして其の力や弱し。徒らに外界の推移に連れて醉生夢死する尙ほ且つ難事たり況んや、乾坤手に在り萬化身に生ずる底の大業を畫するをや、我に無限の靈力あり、遠く天地の神秘に觸れ、無礙自在の用ありと聽けど、現實の我が身に

不如意觀

◉理想と現實

理想と現實

◎現實の悲哀

は其の自在は制限せられ、其の力用ば束縛せられ、脫せんと欲して脫し難く、免れんと欲して免るゝに途なし、理想は高く無礙の一境にかゝれども、身は囚はれて現實の囹圄にあり。理想の追求する所は眞善美の圓滿にして、現實の狀態は僞惡醜の集團なり。理想は理想として消え行くべきものにして現實の缺陷のみ獨り吾等に殘るにあらざるか、理想なくんば則ち止む、內に理想の輝あつて外、之れを行ふ能はざるほど世に悲慘なるはなし。理想と現實、抑も何の時にか融合すべき。尙ほ少しく語らしめよ。

二　現實の悲哀

悲むべきは吾等が今の身なり。なまじいに追求すべき理想を有するが故に、現實の悲哀常に最も切なるを覺ゆ、曾て「中年の悲哀」を稿して自家の感想を披瀝す。採て以て前節の缺けたるを補ふに足らんか。

希望は光にして追悔は涙なり、希望の光薄らぎて追悔の涙いとゞ繁きは中年の悲哀にあらずや、青春の心失せにしとは思はねど、曾ては紅顏の美少年、今は鬢邊既に數莖の霜を戴くに至ては、誰か我が生の短縮せられ、我が存在の否定せられつゝあるを感せざらむ。

花に悲み露に泣く青年の悲哀は、優しき詩的の美を以て彩らるれど、人生の逼迫より來る中年の悲哀は些の美趣なき、現實的のものたるを免れざれば相思の情熱して我、吾を忘れ、「天の原ふみとゞろかし鳴る神も、おもふ中をばさくるものかは」といへるが如き美はしき戀は中年には見る能はずして寧ろ醜き性慾的の戀のみ殘れるにあらざるか、中年に美しき戀なしとは云はず、されど一意之れに向はんには餘りに思慮の熟して低徊願望の餘裕あり。相思ふの人に添はれずとて煩悶懊惱氣も狂はしくなりしは青年の昔にして、今は かゝる場合にては唯だ目的の不成功によりて感ずる不滿の心あるに過ぎざれば中年には失戀の悲哀なしと云ひ得べからざるにあらず。殊に普通の狀態としては配偶者との別離より生ずる悲哀に外ならむ、如何に情熱の穩せたる中年者

存在の否定

青年の悲哀と中年の悲哀

◎現實の悲哀

とても配偶者の死に對して悲哀を感せざるものはあらじ。されど其悲哀は自ら青年時代と趣を異にして、多年影の形に添ふ如く自己と同體となし來りしものゝ缺損によりて生ずるの悲哀にして其の本質は頗る現實的のものなり、唯だ青年時代の追憶が之に加はりて此現實的の悲哀を美化して詩趣あらしむるにあらざるか、月下相携へし昔の夢、花前相語りし當時の思ひ出を除きたらんには此悲みは頗る自利的の者なるやも知るべからず、情には脆き女の心より見るも、青春時代に離婚を拒むは情緒纏綿相離るゝを厭ふにあれど、中年時代のそれは身の振方を案ずるを主とせるにあらずや、所謂二十後家は立ち三十後家は倒るの俚諺は確に一面の眞理を道破したるの言たり、青春の夢今覺めたり、理想にあこがれしは過去に屬して眼は唯だ現實にのみ注ぎ來る中年の悲哀は靈にあらずして肉にあり、如何にして慰められんかとの問題にあらずして、如何にして食はんかとの問題なり、社會は學窓より眺めたるが如く簡單なる者にあらず、人生は机上に論じたるが如く單純なるものにあらず、曾ては霞を隔てゝ花を見るが如くに感じたりし社會人生は今覩面に其被

覆を脱して我が行くては蜀の棧道よりも險き懸崖の一路あるのみ。行路難！行路難！これ實に中年者が頭上に下れる痛苦にあらずや。試みに青年の業を求むるものに聽け、彼等は一齊に糊口の途なきかといふも中年者の業を求むるもしかも中年者の業を云はず。憐れ、彼等は糊口に急にして其業を選ぶの餘裕だも有せざるなり。人生に於ける至難の問題は如何にして生くべきかの問題なり中年時代は切實に此問題に觸れ、諸種の痛苦と夥多の悲哀とは皆な之れを中心として起る、此に於て彼等の多くは青年時代の理想を放擲して小成に安んじ、唯だ食はんことを思ふて他を思はず、當年の秀才、碌々として生きんが爲に生くるの凡庸漢と化石し、僅かに家庭の團欒を得て、せめてもの慰藉と爲すに至る。夕顔棚の下涼み、晩酌の膳に臨める彼等を見て幸福なりといふは。餘りに彼等を侮蔑したるの言なり。往年の志望を追懐して現下の境遇に至るの時、知らず、酒杯に落る涙なからずや。

◎理想と現實

遽莫、好運、我を驅りて志望漸く達したりとも、中年者には更に深刻に更に痛切なる悲哀の動機あり。虎狼の後より我を追ふが如く時代の進運は急激に、之れを享受する青年の意氣壯なるが故に新進の人才は數歩の後に立ち、少しく躊躇すれば所謂時代遲れとなつて生きながら葬られんとし、前途を見れば人生剩す所幾年ぞ、下に深淵湛へる絶壁は我が墜落を待て行くてにあり。『嗚呼終に死せざる能はざるか』顧れば半生。我何をか爲せる、秋風蕭條、我が影の消えゆくを想ふ。人生豈に此くの如きの悲痛あらんや。

時代遲れ

死の邂逅

髮を染めて戰陣に臨みし古武士を珍とする勿れ、中年者流誰か我が思想を染むるに新しき色彩を以てし時代に遲れざらむとを望まざるものあるべき。壯氣未だ消えず、心は青年と伍せんとして我が氣萎み我が力沮むを想ふ、老年者は既に諦め了れり、中年者は諦むる能はず、諦むる能はざるが故に痛苦一層深く或は自暴自棄に陷りて爲し得べきの力を抛ち或は超絶主義を執りて浮世のすね者となり、或は成功を急ぎて手を投機事業に下し終に健全なる社會と沒交渉たらんとす。中年者の心情憫察すべきものあるにあらずや。

萬人悉く感想を一にせずと雖も、中年者に此の悲哀なきはなし。これ人生の現實なり。現實に悲哀多し。されど吾等が理智明かならざるの眼に映じたる悲哀にして、執意強からざるが爲に招ける痛苦にあらざるなきか、人生に缺陷多しといふ者はこれ自ら心に缺陷あるを示すものにして、悲喜苦樂亦我が心に出づ、豈に修めて除き難く、養ふて轉じ難きのことならんや。明の祝世祿いふ。

缺陷の世界

圓滿の心

世界はもと缺陷、人心はもと圓滿、吾人は當に圓滿の人心を以て缺陷の世界を圓滿にすべし、當に缺陷の世界を以て圓滿の人心を缺陷にすべからず、と、悲む勿れ。外に我を苦むるの事情ありとも、內に我を慰むるの心境あり。修養は其の根底を此の境地に置かざるべからず。

◎理想と現實